

---

# 銀河迷雄伝説

浜フィル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銀河迷雄伝説

### 【Nコード】

N0169Y

### 【作者名】

浜ファイル

### 【あらすじ】

日本人初のプロバスケットボールNBAのドラフトを待つばかりの大学生の俺はもうすぐ金、名声、女、何でもかんでも手に入る予定だった！しかし気がつけば転生してあの銀河英雄伝説の世界に入り込んでしまった。しかもあの超KY貴族の次男として！どうなるのよ！俺！・・・

この話はらいとすたっふ2004るーるを遵守しております。  
また、多くの方々の二次小説を参考にさせていただいております。

温かい目で見守っていただけると幸いです。初執筆なので色々教えていただけるとうれしいです。

## 第一話：プロローグ

第一話：プロローグ

パアーン！！

耳を劈く大音量の電子ホーンが試合の終わりを告げた。

それでもここマジソンスクエアガーデンの観客の声援に最後まで聞き取れなかった。

ゲーム終了。俺達は負けたんだ・・・

NCAA全米大学バスケットボール選手権決勝戦【ザ・ファイナル】だった。

コネチカット大学 対 デューク大学 8点差で俺達デューク大学は負けた・・・俺の大学生活最後の試合は幕を閉じた。スタッツは21得点11アシスト10リバウンドこれは【トリプル・ダブル】というやつだ。

俺の名前は速水純一20歳。身長196?で体重88?の日本人だがバスケットボールの夢をつかみにアメリカの大学に進学した。目的はもちろん大学バスケットで活躍して頂点であるプロバスケットのNBAに行くことだ。

激しい生存競争の中、ついに念願のプロバスケットNBAのドラフト候補として名前が広まり騒がれた。しかもただのドラフト候補じゃないぜ、一巡目指名っていうトップ中のトップの扱いだ。

現在はデューク大学の3年生だが、アーリーエントリーという勉強嫌いな奴には魅力的な制度があるので今年のドラフトで指名を受けられるわけだ。

金、名声、ありとあらゆる賞賛が俺の周りを跳ね回っている。これからの俺の人生は変わる。俺が自分で勝ち取ったんだ。俺が勝者なんだ。これからはプロバスケットボールの世界でも申し上がってやるぜ。

今だってみんなには悪いが金も女も不自由なんかしたことは無いぜ。しよっちゆうパーティーやって、イカすギャルをそれこそとつかえひっかえだ。

今日もさっさとホテルの戻って楽しむつもりだ。ドラフト会議は1ヶ月後だからそれまではどのみち練習もできないし、それまではのんびりだな。ロングバケーションにして南のリゾートにでも行って来るか。なにしろこれから暫くは自由の身だから。

ホテルに戻った俺は軽くシャワーを浴びて、イカすギャルを呼ぶ前に軽くチームメイトからもらったドラッグを決めとくことにした。副作用は無く常習性もなく、ドーピングチェックにも引つかからない。便利なヤクだよなこのモーニングスターってヤクは・・・何だか少し眠くなってきた。ちょっと、サクッと寝とくか、その後は激しく楽しいラウンドが待っているわけだからさ・・・ぐう、ぐう、  
・  
・

「おお！お生まれになったぞ！」「やった！男の子だ！帝国万歳！」  
「本当か！余に弟ができたのか！」・・・な、なんだ・・・周りがうるせえ！静かにしやがれ！俺が眠ってたぞ！まだ眠いのに！ざけんな！「おお！おお！元気な泣き声だ」・・・何？俺の声が鳴き声？何言ってるやがる！うるせえんだよ！この俺に何か文句でもある

のか！あれ？おかしいな？体が何だか思うように動かないぜ！どうなってるんだこりゃ？

頭が混乱してたが、落ち着いて周りを見ると・・・何だか変な服装たやつらが大勢いて、何だこいつら？お前ら何なんだよ！つてよく聞けば俺の言葉は・・・言葉じゃねえ！どうなっちまったんだ俺？誰か助けてくれ、警備員をよこせ！あれ、やっぱ言葉にならないじやんか！泣き声だ！何でしゃべれないんだ！どうなってるんだ？ここはどこだ？誰なんだお前は！何？ランズベルク家？何のことだ？待てよ・・・ランズベルク家って・・・あのランズベルク家かよ、あの銀河英雄伝説に出てくるあのランズベルク家なのかよ！

落ち着け、落ち着けこの俺ともあるうものが・・・よくよく見てみると大分わかってきた。理由はわからない。誰の仕業かもわからないが、どうやらここは銀河帝国の貴族のひとつであるランズベルク家であり、俺は次男として生まれてきたらしい・・・銀河帝国ってあの銀河英雄伝説に出てくるあの銀河帝国だぜ！しかもよお、俺の長男はあの！ノー天気男のアルフレッドだぜ！？

アルフレッド・フォン・ランズベルク

有益ではないが、害のない無邪気な人物。かつては貴族のサロンで害のない詩などを書き散らしていた。エルウィン・ヨーゼフ誘拐に関わったからは、かせにその忠誠と情熱を捧げたが、報われることなく終わったようである・・・とウィキペディアには書いてある！

どうやら俺は転生して銀河英雄伝説の話の中に来てしまったみたいだ。だが、そもそも俺は原作をノベルズ、文庫と買いなおし、限定DVDBOXを持っているほどの銀英伝フリークでもあるので、何か複雑な感覚である・・・

ちよつと待つてくれ。そんじゃあ、俺の金は？女は？夢なら覚めてくれ！やっぱスーパースターの俺がいい！誰か助けてくれえ！しかも赤ん坊で生まれたのでみんなが気持ち悪い笑顔で顔を摺り寄せてきやがる！やめろ！気持ち悪いんだよ！

おまけにあの馬鹿兄アルフレッドは「余もこれからは弟に恥ずべき事の無いように気持ちも新たに帝国文学の探求を進めるつもりだ」もう、しぬれ！「貴族の尊さと偉大さを弟に教えていかなければ」とか、何だか与太話が聞こえてきたぞ！寒気がする！ガクガク！ブルブル！

何日か何週間か経ち、最近は、「まあ、いつかは戻れんべ」というか暢気と言うか、所詮はランズベルク家は大貴族なわけで食うに困らないのである。それにしてもそれなりの待遇で生きてきた俺から見ても「スゲエ！」「何考えてんだ？」って感じの生活というか毎日がお祭りみたいなもんで、毎週の木金土日は自宅庭園でパーティーだぜ？

中には結構かわいい顔した貴族のお坊ちやま、お嬢ちやまが紛れ込んでいるので、それなりに赤ん坊をやっつけていても色々構って貰えるので楽しい。暫くの間はこんな現実離れた生活に身を置くのもいいかも、って感じてる。

そのまま戻れないまま、貴族として俺は8歳になった・・・無能だが領民には極めて温厚な市政を行っている父親とこれまた極め付きの世間知らずだが善人の母に育てられてきた。兄のアルフレッドの馬鹿っぷりは相変わらずで、正直何を考えているのかはわからない。

貴族幼年学校では上級生なのに後輩からいじめに合っているような

ので、こっちはストリートファイトで慣らしたバトルで何度か救ってやったりした。その度に「兄に対するその配慮、感極まる」「これからも兄弟二人手を取り合って共に進もうではないか」……つて弱いのはお前だけだろ？

幼年学校に入学した俺は、ミニフライングボールチームに所属した。もともと居た俺の世界ではミニバスケットボールみたいなやつね。重力を軽く設定した空間でハンドボールとバスケットボールの中間みたいなルールで行われるスポーツである。

まあ、何と言うかプロバスケットのドラフト候補だった俺はこの程度のスポーツは片手間だよ。敵無しだよ。一瞬でチームのエースだし、地区の選抜選手にもなってしまった。大人のフライングボールでも見たこと無いようなスカイプレーを連発する俺は幼年学校の、ランズベルク家の誇りだった。

ちなみに馬鹿兄のアルフレッドは運動神経マイナス100億光年！位の駄目さだった。試合が終わるといつも「よくぞ！これこそ我々兄弟の誇るべき手柄である」ってさあ……ほんとに頭悪いだろ！かなりの酷いレベルで！

頭脳明晰、運動神経抜群ともなれば当然校内のスターになるのは簡単だった。ただし一学年上に金髪&赤毛のスーパーコンビがいたので、よく比較はされたけどね。金髪の方はリアル！ラインハルトフオンミューゼルだった。マジかつけー！「君が最近噂されているスーパーボーイなのか？」「兄上の方は何だかよくわからないが大したものだ」「貴族の中にもまだまだ凄い人物はいるんだな」と先輩風びゅーびゅー吹かせて去っていった。

それ以降は妙に気が合うのか、別の思惑があるのか、三人で結構遊



んだりした。パツキンラインハルトのお姉さんにも何度か合った。生アンネローゼは気が狂うほどの美女だった。

こりゃ皇帝も欲しがるわな・・・ホットチョコレートはとても美味かった！さすがに「アルフォンス、弟と仲良くしてあげてね・・・」とは言われなかったけど。

ラインハルトの方は時折、試すかのようにドキリ！とする話をしてくる。その時の隣で聞いているキルヒアイスの顔は尋常ではなかったが。しかし「ルドルフにできて余にできないとは思わない」的な話は原作通りで感動していると「どうした！アルフォンス、臆したか」・・・

説明しなかったが俺の名前はアルフォンスという。アルフォンス・フォン・ランズベルクだ！どうだい？馬鹿兄よりは頭良さそうだろ？

最初の転機は訪れた。クロプシュトゥク家領内で発生した大規模暴動に端を発し、周辺星域領内で暴動が拡大した時期があった。当然近隣に位置しているランズベルク家にも暴動が起きかけた。何しろ父親は領主でありながら無能でお人よしときているので、暴動の鎮圧どころではなかった。

当然鎮圧部隊の指揮は馬鹿兄のアルフレッドが当たったが・・・わかるよね。火にニトログリセリンいやいや、火にゼツフル粒子なくらいに暴動が激しく広がってしまった。

（仕方ねえな。こう見えてもデューク大学経営学部出身だし、将来は起業も考えていたし、少し助けてやるか・・・）

ということ、暴動の原因は何かということ調査したのである。

もともとのクロプシュトック家の暴動は不正な裁判が原因のものであったが、ここランズベルク領ではそんな原因は無く、日々の不満が爆発した・・・そんな感じの調査結果だった。なーんだ、それならば領地政策を抜本的に見直せば済むことじゃないか、ということとを父親と馬鹿兄のアルフレッドに説明した。

内容はこうである。現在のランズベルク領内の租税割合は6割ランズベルク家で4割を領民の取分とする分配方式である。しかもその中から各種税金を追加で徴収している状態である。

この部分を大幅に変更するのだ。4割をランズベルク家、6割を領民の取分とする。しかも徴収した4割の半分をランズベルク家の収入とし、残る半分を全部領民の福利厚生に充てることにした・・・ね！大きな改革でしょう？しかも福利厚生を医療と教育の充実に大きく割り振ったのである。人はパンのみに生きるにあらず！父親も馬鹿兄も猛反対だったが、10のうちの取分を6割から4割に減少するという発案がそもそも馬鹿なのであって、今後は100のうちの40を手に入れるための政策を行うべきであると主張した。

そんな話は聞いた事が無いとか、前例が無いとか渋っていたが、誰もやっていないからこそ我がランズベルク家が真つ先に手を付けるんだ！そこにこそ意義があるんだ！説得し、実行した。

ここで俺の経営戦略部分でもアドバンテージを稼いでおくことがランズベルク家1000年の計であると説明したのが効いたみたい。

馬鹿兄アルフレッドはまたも「感動した！弟の知力は一箇艦隊にも及ぶ」・・・あれ、その話もどっかで聞いた気が・・・

領民の反応を知りたい？

決まってるでしょ？大喜びですよ。

みんな笑顔でファイヤードダンスしまつくていたし・・・領土をを守るための私兵についても今回は整備した。近代化を一気に推し進めて人員を大幅に削減した。その結果は労働人口の増加になり租税の金額ベースではそれほど大きい減収とはならず済んだ。

これからは領民も領主もいっしょにハッピーにならないとね。しかもどういうわけかランズベルク領内は希金属（レアメタル、レアアース）が豊富に産出できるのよ。携帯電話や長距離高速通信の機械には必須の原料なので取引価格が安定して流通できているのである。

ここで少し銀河帝国の携帯電話の事情を説明しよう。現在はネオ・ノキアスという会社がトップシェアである。次いでマリクソン社が追う。離れて大華通信公司、IT&amp;KDDI、とかが続いている。この殆どがランズベルク家の希金属を使っているのである。どこかの国のように、ここで一発生産量を引き締めちゃうか？

知れば知るほどにこのランズベルク家の経済環境は超一流の土壤だったのである。一応経済顧問はいるが、コトラーやポーターの戦略論すら読んでいないらしい。

それなら近いうちに俺が自ら回していくか・・・ちなみに資産運用は株式や金、債券などの現物投資ではなく、幅広く株式、債券、金、先物デリバティブ、投信などをバランスで集めたCDSクレジットデフォルトスワップで運用している。

ヘッジを高く設定しているため、大きく利益は出ないが、致命的な損失もカバーできるので無能な・・・いえいえ多忙なランズベルク家の方々には一番ですよ、と資産運用会社の担当から言われているみたい。やっぱ馬鹿貴族だね。

貴族のランクで考えるとランズベルク家はBランクの規模なんだけど（ちなみにSランクは例のブラウンシュバイク家やリッテンハイム家を筆頭に5〜6家）Aランクは惑星を3つくらい所有している貴族達で総資産は数十兆帝国マルクを所持しているといわれている。

まあ、世紀末の東アジアの島国くらいの規模だと思えばいいかも・・・この規模で20〜30家くらいいるかな？ちなみに我がランズベルク家は一応3つの惑星を持っているが人口が少なく、何となくBランクなんだけど、先出の通り、レアメタルだレアアースだのがわんさか出てくるのでその総資産規模はAランクの上位に匹敵するのである！ああ、楽しいなスーパー金持ちって・・・

そんな超恵まれたアルフォンス フォン ランズベルクだが更なる転機がやってきた。それは、真夏の祭典、ノイエサンスーシで行われるノイエ耐久48時間レースである・・・

## 第二話：王宮杯争奪耐久レース

第二話：王宮杯争奪耐久レース（ノイエ・エンデューロ・グランプリ）

帝都オーデインには正直、そんなに行った事はないのだ。幼年学校初等科なのでそもそも機会が無かった。これが中等科ともなれば卒業体験実習という名目でオーデインへ、そしてノイエサンスーシにも行けるわけだけど・・・

今回は王宮杯争奪48時間耐久レースに参加するためにまだまだ灼熱の日差しを照りつける帝都オーデインにきたわけだ。

最初はなんのこっちゃ？と思ってエントリー用紙なんかシュレツダーにいれようと思ったけど・・・まてよ！参加予定リストに聞いたことのある名前がぎっしりジャマイカ！

原作に登場するやつだけでも、金髪、赤毛コンビとアルトリンゲン、ブラウヒツチ、ファーレンハイト、ビットェンフェルト、バイエルライン・・・ライナー・ブルームハルト！

・・・ブルームハルトって同盟軍のあの【薔薇の騎士連隊】ローゼンリッターにいるんじゃないの？（未だ亡命前のようだ）うーん、この辺りの連中とは繋がりを持っていたほうがよさそうだ・・・

ルールは単純明快、48時間の中で生き残っていれば良いわけである。

マシンはワルキューレを使用する。

高度3000メートルでリミッターを効かせて空中パイロンをひたすらグルグル回るだけである。

ただしウルキュレである以上、爆発しない程度にスペックダウンさせたレーザー、貫通力の弱い実体弾の使用は最低限の範囲で許されているのだ。

攻撃ができてしまうのがこのレースのポイントというか醍醐味というかエキサイティングなところである。

エンジンも24000馬力にリミットされていて非常に遅い！しかし上記ルールを守ればチューニングはOKなのである。

パイロットは1チーム3人まで。怪我や具合が悪くなっても残った人数で戦うサバイバルマッチである。

今回の俺のパイロット仲間はグレッグ・ドレイリングとザビエル・マクダニエル・・・何だか濁点が多い名前な奴らだ。

グレッグは白人の北欧系種族でザビエルはバリバリの黒人である。ともに自信たっぷりで年下の俺に向かって偉そうに話しかけてくるね。「びびってんじゃねえのか」とか「俺たちの足を引っ張るんじゃないえ」とかお前らレースが終わったら皆殺しだからな！

発進順位を決める予選プラクティスがもうじき始まる・・・俺は載らずに見てるだけである。

予選にはグレッグがチャレンジするらしい。

まあ、どうでも良いよ、おぼっちま君達さ・・・参加機数を見てたまげた！480機！完走率は6%ないらしい・・・30機も残らな

いの！！なかなかおぼつちま達にしてはエグい競技ですこと・・・  
金髪赤毛チームは予選はキルヒアイスか！何か速そうだな。

我々のワルキューレはエンジンがアーマーライン社のメタルライン  
Ver.7である。

もともと中高速域重視モデルであるところさらに最高速の伸びを  
捨てて加速を限界まで引つ張ったドッグファイト用にチューンして  
いる。

はつきり言つて空中戦使用である。俺は今回、優勝を狙っている。  
そうすれば空戦能力を買われて飛び級で士官学校にいける可能性が  
あるからだ。

この後の歴史が史実通りであるなら、ラインハルトとキルヒアイス  
にアドバンテージを持っていて先回りしたほうが良さそうなので、  
一気に駆け抜けてやろうと考えているわけだ。

予選の結果は散々だった。

他の機体に何度もヒットしてしまい、ペナルティ（ヒットする度に  
ペナルティポイントが加算され、順位が交代してしまう）で何と2  
15番目という超ど真ん中でやんの！

こういうレースの基本は自分の前に成るべく他人を並ばせないこと  
である・・・

これではスタート時の渋滞や多重クラッシュがあったときには逃げ  
られない！

グレッグはそれでも強がっていたが「お前じゃもつと順位が下がっ  
ている」とか「思ったよりも今回はレベルが高い」とかどうでもい  
いことばかり喋りやがって。

ただ、時折見せる鋭い加速は、こっちの狙い通りだから、明日は俺のパートでせいぜい目だつてやるさ。お前からこそ俺の足を引っ張るなよ！つてんだ！

当日のノイエサンスーシの天気は曇り、時折雨らしい。

OKだ！雨になれば視界が遮られる分、全ての機体と同じ条件になるからである。

まともにレースすれば、空力もパワーもエリート貴族が良いに決まってるんだから、しかも絶対あいつら違法チューンしてるよ、エンジン音が違いすぎる。

エンジン内部のマッスルシリンダーの音が異様に低い、恐らく我々のような同時爆発エンジンではなく異層爆発タイプのもだろう。

低速から高速までの加速とトップスピードに乗っかる時間が理論上は大幅に短縮できると言われている。20世紀後半のモータースポーツでは当たり前なんですけど・・・と勝手に思っているのである。

スタートは地面でエンジンストップ状態でパイロットがダツシユしてコクピットに飛び込んでイグニッションスタートとなるわけだ・

耐久レースの血はこんなところにも受け継がれているのか・・・最初のパートはザビエル・マクダニエルが担当し、予定では3時間半飛び回って来る予定だ。頼むぜザビアー！

「オン・ユア・マーク！」位置について！つてこと。

「セット、レディー！」



バァーン！

とスタートの号砲がなり、ノイエ耐久48時間がスタートした。

パイロットスーツがうじゃうじゃいるからどこがどうなっているのか判らない！

一斉にイグニッションから急上昇するワルキューレの群れは壮観な眺めである。一周してこないと順位表示はされない。待つしかない。  
・凡そ一周は6分台で帰ってくると予想している。恐らくラストの2時間からはスプリント状態である。5分後半に入ってくると思われる。

・そんな事を考えているうちに先頭集団が1周目のカウンターを刻みに来た！速い！

信じられない6分08秒だって・・・いきなりスプリント状態かよ！  
じりじり、イライラ、何なんだ、オイ！6分50秒、52秒・・・  
7分！未だ来ない！

ザビアーは何やってるんだよ！来た！7分5秒、6秒、7秒、8秒！7分8秒！でカウント！しかも「あれ、後部のアンダーパネルが割れてなかった？」「そういえば拳動がへんだったね」って、すぐに気づけよ！

恐らく<sup>トラフィック</sup>渋滞が事故で負ったアクシデントか、早くも撃たれたか

・・・その後は7分前半から6分後半の時間で推移していた。

ファーストチェンジまで後1時間40分！その周は7分経っても戻ってこない・・・8分！

しかもピット内は緊急ピットインを示す赤ランプが点灯している！  
どうした！俺とグレッグはピットレーンに出ていってその状態を見  
た・・・

撃たれていた。コクピット周りは出火した後であろう、真っ黒に焦  
げていた。

序盤からコンバットシューティングかよ！

面白え！次はグレッグのパートだが、黒焦げのハッチを見てびびり  
やがったので急遽俺がスクランブルだ！

ザビエル・マクダニエルは軽傷だが片目を負傷してしまったのでい  
きなりチームランズベルクはパイロット2名でその残りのパートを  
消化する羽目になってしまった。

コースに出た俺はまもなく前方で銃撃をしている集団を発見した。

こいつらか？リーダーは誰だ？仕方ないから雑魚を2〜3匹始末し  
ちやえ。

貫通力を抑えたA-18オートギャトリングガンが測的を始めた。

さて、最初は君か！それ！ブブーという鈍い発射音とともに空薬  
莢数十個がはじけ飛ぶ！最後尾のワルキューレがのた打ち回ってコ  
ース外へスピンして行った。

「あらー、衝撃を受けて操縦桿をいきなり切ったらだめなのよ。  
時速800キロだよ？」俺は正直（チョロいもんだな、楽勝だ）と  
口笛でも吹きたい気分だった。

一方、僚機を失った一団は動揺していた。その集団は、前方の1機を狙っているのだ。

シリアルコードD-02・・・参加者一覧で検索してみる・・・なんとそれはジークフリード・キルヒアイス機だった。ということはその前方の機体はラインハルト機か！

健気な話であるご主人を助けるためにスピードを遅らせブロックしている。

きつとコックピット内では「ラインハルト様、お逃げください」とか「アンネローゼ様、ジークは約束を守りました」とか叫んでいるのかな？（笑）

・・・助けてみるか・・・どうなるのかな人間関係は。

ここで見殺しにしても、助けても失うものはないのである。逆に金髪&赤毛コンビに貸しを作るし！そうと決まれば次のターゲットを探してつと、リーダー格の機体がスピードを下げて近づいてきた。・・・見た顔だ・・・あれは!？

「フレーゲルかよ！」

何とリーダー格として金髪&赤毛コンビを狙っていたのはあのフレーゲルだった。

むかつく奴だった。馬鹿兄のアルフレッドと良くつるんでいるが、話を聞く限り一方的に馬鹿にされているだけのような感じであった。

正直馬鹿さではどっこいでしょ？しかも6対1でキルヒアイス機を  
コースアウトさせられないなんて・・・ぷぷっ！虐めちゃうか！

その前に手前のふらふら動揺しているワルキューレを軽く一掃射で  
コースアウトさせておく。直接通信（お肌のふれあい通信）でフレ  
ーゲルが話しかけてきた。

「この！ランズベルクの馬鹿兄弟の弟か！お前！わかっていいのか  
！」「ハイ？ナンノコトデスカ？」すつとぼけてみた・・・「く！  
貴様の今打ち倒した機体はあのブラウンシュバイク公の6男のヤス  
トルフレッド様だぞ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・げげげ！俺はブラウンシュバイク  
野郎の一族を撃墜してしまったのか！！

うーん、家に帰れなくなるかもしれん。だが、ランズベルクの馬鹿  
兄弟は許せないね。お前ら全殺し決定ね。

さらに「兄の様に無能でおとなしく仕えていれば良いものを、命知  
らずが！」

さすがに馬鹿兄でも同じくらいに無能で馬鹿なお前に言われること  
もないだろうが？

「その大貴族の御曹司どもが、何を集団でいじめているのだ？情け  
ないの極みなので貴族として見逃せなくてね。」と反論したが「貴  
様、殺してやる」と同時にフレーゲル機が体当たりをかけて来た。

エンジン音からして異層爆エンジンだ。

だが反射神経に差がありすぎて、反転して背後に衝いた。「バハハ

「イー！」とギャトリングが火を噴いた。空葉莢が後ろに吹き飛んだ。まあ、機体に当たっても貫通はしないのだから、気にしない。

フラフラとした途端にスピニアウトし始めてコース外へ消えていった。

あーすつきりした。

残りの機体はスピードダウンして集団としては機能しなくなっている。

キルヒアイス機の後ろの俺の機体よりもさらに後ろに下がってしまった。ほとんど見えなくなってきた。

キルヒアイス機を見るとエンジンが双発式のモデルだ。

つまり我々のアーマーライン社のモデルではなく現行型のオムニインダストリー社製である。

2つのうちの一つのエンジンが上手く点火出来ていないようだ。

デトネーション 失火か。直接通信（お肌のふれあい通信）でキルヒアイスが「アルフォンス殿、かたじけない！」「そっちこそ、後ろから見ると失火デトネーションしてますよ」「最悪はエンジンブローだ」恐らくこのラップをスピードダウンさせてピットに入って修理だろう。

さもなくばリタイアしてしまうから・・・「ラインハルト殿の機体はスピードを上げているのでしばらく護衛しましょうか？」「お願いできますか！」「仕方ないでしょう。忠実なるキルヒアイス殿が修理に入られるのだから」

二人の仲に割って入るつもりはさらさら無い。

ただ、2重にメリットがある。一つはキルヒアイスとの親交だ。

もう一つはラインハルトの心理状況である。

キルヒアイスはいい、

代わりにアルフォンスというわけだが、キルヒアイスと俺の人間関係が気にならないはずが無い。今、どうこうというわけではない。

近い将来に何か使えるのではないかということである。

そんなこんなで俺のピットストップの時間が近づいてきた。順位は30番位上げたかな？先は長いし・・・キルヒアイス救出シーンはメガビジョンでオーディン中に放映されているわけで、他の将来ラインハルトに従う人材連中はどう思っているのか。中々興味深い。

ほぼ3時間半周回したが何人かを救出したわけであり、戦果もも上々かと・・・ライナー・ブルームハルトを救い、同学年のステッチ・フォン・ネームハルツ（ハードエンジニアおたく）も救った。

気がつけばA-18オートギャトリングガンも弾切れだし、丁度良いか！中盤戦に向けて少し休養をとるのもいいかもしれないので・・・おっとオートピットレーンの表示が出てきたので減速しながらピットエリアに進入した。

手が、いつの間にか握力がなくなっており、ガクガク・ブルブル状態だったことに気がつく・・・（おいおい、俺も冷静じゃないね）

ブシュー！気圧調整もかねたハッチを開くとドレイリングが「凄いな！38機抜きだぜ！」と言ってきた。

俺ははつきり言うておくべきだと思い「正直、俺は優勝したい。だ

が、あなた達が足手まといなんだ。頼むから俺の足を引つ張らないでくれないか」いきなり反撃を食らって絶句したドレイリングは、「わ、わかったよ。噂のスーパーボーイは本当らしい。何とか順位をキープして交代できるようにするからさ」最初から話しておくべきだったか・・・ちよつと後悔した。

最初の5時間でリタイアした機数が42機！いいねえ、サバイバルジャマイカ！

次のドレイリングが3時間引つ張つて3機抜きの現在189位！

大丈夫！後半戦はひたすら銃撃戦らしいので、一気に挽回も可能だ！

おれが更に3時間半引つ張つて19機抜きだった

・・・ちよつとエンジンの<sup>デトネーション</sup>矢火が気になったが・・・いけるところまでいくしかない！既に自分でも何機撃つたかなんて覚えていない。

周回のペースも6分40秒台である。これでラストがスプリント状態になるのか・・・ちよつとやばいかもしれない。

しかしザビエル・マクダニエルは早々に会場から居なくなってしまうし。無責任な野郎だ。

何だろう・・・何か忘れてるんだよね。

ラインハルトの護衛は最初のフェイズ以降はキルヒアイスが復活したし・・・

凄い重要なことかもしれない事を忘れてしまっている・・・何だっ

けか・・・中盤戦以降に重大な事件を引き起こすかもしれない事を忘れてしまっている・・・

この時俺はあまりに疲れていて、忘れていたのである。

最初のフェイスでコースアウトした馬鹿フレージャーの事を・・・後に怒りと後悔で冷静で居られなくなるというのに・・・



### 第三話：王宮杯争奪耐久レース【Final】

#### 第三話：王宮杯争奪耐久レース【Final】

王宮杯争奪耐久レース（ノイエ・エンデューロ・グランプリ）も中盤を越えて現在33時間が経過している。俺の順位は66位まで来た。400機以上いたスタートだがラップを刻んでいるのは180機程である。メカニカルトラブルでリタイヤしているワルキューレが殆どだが、銃撃戦の末に墜落している機も未確認だが100機近くいるはずである。そもそも俺は30機以上リタイヤさせているのだから・・・

途中で4機のワルキューレが多重クラッシュした関係で30分中断。ピット待機のシーンがあった。もちろん俺達はそんな時間も体力回復のために眠っていた。瞼を閉じた瞬間グーです。現在トップはあの！ゾンバルト機である。史実に違わぬKYな操縦で周りのワルキューレを何機もリタイヤに追い込んでいるのだ。本人はおそらく気が付いていないし、悪気もないのであるから始末に悪い。上位にはミッターマイヤー、キルヒアイス、などが残っている。やはり予想通り異層爆エンジン組は早い、すでに周回遅れにされてしまっている・・・そして！待ってました！

天候が荒れてきた。やったぜ！雨が風が！これで勝てるぜ。条件はいつしよだ！残りは12時間だまだまだいける！一気に差を詰めてやるぜ！ただ、こっちのワルキューレはたまに失火デトネーションが起きるのが心配である。心配だけど、心配したってトップにはなれないから、フルスロットルだぜ！

強い突風で機体のバランスを崩すパイロットが多い。当然スピードダウンしなければ最悪は衝突かコースアウトだ。トップグループは

ここでギャンブルなどしない。

わかってるからチャンスなのだ。今後のチーム戦略をショートタイムに切り替えることにした。銃撃戦に関わらず、2時間くらいでグレッジと交代を繰り返していくことにする。その2時間はトップチームのタイム以上で周回しなければならぬので、死ぬほどの集中を求められる。面白え！望むところだ！

限られる視野と突風に対処しなければならぬので、銃撃戦が殆ど起こっていない状態のままレースは続いた。ラップ表示にシリアルコードG 14リタイアと出ている・・・ラインハルト機かよ！ああ、全てのイベントで勝利するわけではないんだな。であれば、少なくともこの勝負、勝ちにいくしかないでしょ！こっちも必死。衝突しないように、それでスピードアップで進む・・・気が狂いそうな作業だった。渋滞に捕まると最悪で衝突回避システムの警告音と強制離脱操作を受け入れながらのコントロールは限界を試されているようなものであった。

ミッターマイヤーチームのメンバーのロイエンタールがメガスクリーンを見上げて盟友の飛行を見ながら「先ほどから異常なスピードでランクアップしている奴がいる」「ただの無謀か、それともこれを狙っていたのか・・・」「面白い、ミッターマイヤーとの勝負も時間の問題だ。しっかり見させてもらおうとするか」「シリアルコード・・・ランズベルク家が・・・アルフォンスなのか、あれは・・・興味深そうに注視しているのであった、そしてもう一人。「キルヒアイスに追いつこうとしている者がいる。」「あのアルフォンスなのか・・・」「何故急ぐ・・・」「俺と同じ事を考えているとでもいうのか、ただのスピード狂が目立ちたがりの仕業か」「もう少し見ていくしかないだろう」

バンバンバン！キャノピー周辺が銃撃を受けた！」「一瞬バランスを崩したが何とか持ちこたえた・・・誰だ！・・・雨でシリアルコードが読めない！スピードダウンで並んでわかった。あれは！バイエルライン機である！」「仕方ないな、バトルだぜ！」「ドッグファイト開始である。エンジン音と加速スピードから異層爆エンジンではなさそうだ・・・ならばストリートファイトで慣らした間で勝負してやる。何しろこのワルキューレは3000メートル以上上昇できないわけだから。後ろを取られたらほぼ終わりである。まずは！急加速！ドン！と加速Gが俺をシートに押し付ける。加速重視の中でさらに最高速度域を思い切り捨ててローギヤード仕様にしてあるのだ。一気にバイエルラインを引き離す。

しかし高速域の伸びは当然バイエルラインの方が上であり、徐々に追いついてきたロックオンセンサーの音がピーピー当てられて聞こえる。「おいでーおいでー」射程ギリギリまで粘るつもりだ。ブーブーン！と左脇を機銃掃射音がすり抜ける。「甘い！未だ遠いだろ！」右に左に操縦桿を振り回して避ける。何だか他の関係ない機体に当たったかもしれないが知ったことではない。バイエルラインもきつと俺だけ追い続けているのだから・・・現在順位は51位である・・・

ようやくバイエルラインの機体も加速域に入ってきたようだ。さあ、勝負だ！ロックオンセンサーがピーと長い音をたてるようになった。いよいよ射程距離内に捕まった。でも・・・まだだ、もう少し引き付けないと。俺の機体のオートギャトリングガンが2門あるうちの1門が故障してしまっているので、こっちも迂闊に攻撃できない状態である。おまけにレーザーは最初のザビエル・マクダニエル先輩が銃撃を受けて壊して帰ってきたので使えない。

今だ！ガチャガチャ！と操縦桿とスロットルレバーを押し倒して、

急減速！すれすれの横をバイエルライン機がすり抜ける！もらったね！再びフル加速に入って逆に此方がロックオンセンサーを起動した。戦争ではない。レースだから少しのダメージでいいのである。俺は迷わずオートギャトリングガンを撃ったブオオオオオオーン！数十発の銃弾がバイエルライン機に命中した。堪らずスピンを起こした。その上を俺は通過した。このレースで合うことは無いでしょ？と思いつながら先を急ぐ・・・しかし！恐らくフルブーストを駆けてきたのだろう。後方監視システムがバイエルライン機の接近を教える。

マジか！再びロックオンセンサーが音を立て始めた・・・その瞬間！・・・ボツ・・・ボウウウウウンとバイエルライン機は派手な白煙を上げてみるみるスピードダウンをしていった。残念、エンジンブローである。悔しがってるだろうな。でも勝負は勝負！メガスクリーンを見ている観衆もバイエルライン機の派手なエンジンブローで大歓声だ。ここで俺もピットインサインが出た。バトルにかまけ過ぎて順位がそれほど上げられなかったには残念だ。現在48位でピットイン。頼みますよグレッグ先輩！俺は残り9時間で交代した。

ぐっすり眠ってしまった。俺はピットクルーの同僚に起こされた・・・え、もう出番なの・・・腕のG-SHOOKを見ると交代してから未だ1時間くらいだ・・・「え、何かあったの」・・・頭が朦朧としていて何だかよくわかっていない。ピットクルーから「グレッグが順位を下けている。今55位だ」という報告だった・・・うーん・・・！「何だつて！」グレッグの野郎！ふざけやがって！急いで支度をして緊急ピットインを支持して戻ってこさせた。今後の残り時間を2時間の俺が3回グレッグが1時間の2回という一口ーテーションで行うことにした。既に今回の交代で規定交代数はクリアしたので後は好きな様にいじれるのである。

急上昇してみた思った。グレッグが抜かれたのは腕やモチベーションではなく、機体がパワーダウンし始めていたことが原因のようである。今のところ風は収まり雨は強いが安定性は確保できる。そういうコースコンディションだから・・・銃撃戦である。残り8時間でラップを刻んでいる機体は何と96機である。A-18オートギヤトリングガンは1門しか使えないので、あまり長い連射は出来ない。最後になって丸腰ではこっちも不安だからだ。失火もデトネーション気になるし・・・それでも、不安な部分はみんな同じじゃねえの？こっからが勝負だよ。で、41位で2時間のノルマを達成してまたグレッグと交代した。

グレッグの1時間はがんばってくれたようで42位(それでもランクダウンじゃんか！頼みますよ先輩！)交代してみるとまたまたパワーダウンしてる！きつと1気筒死んでるなこのエンジン・・・いよいよ残り時間は5時間となり、無線でフリードリヒ皇帝陛下がこの会場に表彰式のために向かいだしたとの話があった。大詰めだ、負けていけない！この2時間で10機抜きをしないと間に合わないかもしれない。エンジン、持ってくれよ！雨は止むなよ！おっと、後方監視システムが警報だ！・・・キルヒアイス機か！まずい！今撃たれるとコースアウトしてしまう！うーん・・・

撃つてこない。操縦スキルで勝負するのか？もしやそっちだつて武器系ウェポン・コントロールにダメージを負っているのかい？上等だ！決着を付けよう。カモン！ラップタイムが6分20秒台に上がっている！雨が激しいのにこのタイムはまずい・・・晴れたら5分40秒台か・・・そしてたら勝てないな。なんとかこの高速タイムを維持しながら周回しないと！キルヒアイスは後ろにぴったり付いて来ており、まさにテールトゥノーズ状態である。俺のプリントに周りが付いて来れないのでこの状態で5〜6機抜いている。

抜かれ際に無理やり銃撃してくる機体もあつたが、狙つてないので殆どあたらない。目の前にはうつすらと渋滞が……邪魔だな。相對速度であれが遙かに上なのに……。そつと抜く去る手は無いのか？そつと、ポジションランプを消すか、後ろのキルヒアイスはずつと張り付いたままなので追い越す直前でポジションランプを消してやるか！前方の渋滞でどうやら接触があつたようだ、火花に続きボン！という音が聞こえて赤い火が一瞬見えた。四散して吹き飛んでくる破片を避ける動作に入った！来た！残骸だ！危ない！急上昇で間一髪すれすれ回避できた……。ということは後ろのキルヒアイスは、ヒットしてしまった。ガンガン！という音がして直撃ではないが胴体にダメージを負つてしまったようだ。あつという間に後退した。

メインスタンド前にあるラップスクリーンを見ると……。30位である！1位は未だゾンバルトであり、ミッターマイヤー機が8位につけている。俺のターンが終盤になったので銃撃戦に切り替えた。ここでグレッグに変わる前に1機でも減らしてやる！ドッグファイトで3機をコースアウトにした。ここでピットインサインを確認しグレッグのラストパートが始まるのだ。

グレッグのラスト1時間は何と！4機も抜いてきた（その内の2機はメカニカルトラブルであるが……。）それでも現在22位でラップしている！ラップしている総数は62機！減つたねえ！さあ、いよいよファイナルターンのラスト2時間だ！勝負だ！交代する際に「先輩、やるじゃないすか！」といったら、「まあ、本気でやればあのくらいはね！」だつたら最初から本気出せや！

弾丸は満載しエンジンも何とか動いている！OK！いくぜい！他の機体も交代のタイミングだつたのか急加速、急上昇で19位になつ

ていた！さつさと銃撃戦で前に出て弾丸を空にして軽量化して最後の勝負を仕掛けるつもりであった。ところが・・・前方の渋滞トラフィックで何が起きているようだ！立て続けに煙を吐いて5〜6機のワルキューレがコースアウトしていったのである。メガスクリーン前の大観衆も大きくどよめいた！・・・！？・・・最後尾から銃撃している奴がいる！シリアルコード・・・何！あいつは馬鹿フレージェルじゃねえか！リタイアしたんじゃないのか？

フレージェルの機体から撃ちだされる銃弾がやけにダメージを負わせている・・・まさか、ルール違反の実弾じゃねえだろうな！フレージェル機に撃ちだす銃弾は間違いなくコンバット仕様の実弾であった。当然ルール違反であるが本人はどうやらお構いなしで打ちまくっているみたいだ。無線で「あのランズベルク家の次男」「馬鹿アルフオンスはどこだ！」と叫んでいる。こいつクレイジーだ！とりあえず先頭にいるのがミッターマイヤー機であることを確認できたので、馬鹿フレージェルを撃墜してやることにした。そーっと後ろに近づいてと・・・ロックオンセンサーも使わないで、ポジションランプも切ってこっそり、こっそり、ぴったり背後をとってから無線で「よう、馬鹿フレージェル！」「生きていらしたか」と、同時にロックオンセンサーと銃撃を始めたブオオオオオオオオオオ！とかなりの連射を行った。

たちまちコントロールを失ってスピンを始めたフレージェル機だったが、俺がぶち抜いた後から物凄い勢いで追いついてきた。あの急加速はありえないでしょ？もしかしたら違法エンジン？ミッターマイヤー機と並んで飛行していたので無線で「あの加速は尋常じゃないまるで疾風だな」って話してたけど・・・疾風は後であなたが付ける冠だから取つといたほうが良いのでは？なんて思ったりして、ちよっとおかしかった。「あれはルール違反の実弾ではないですか？」と話したら「何！やはりそうか、奴に撃たれた機体が爆発していた

のでもしやとも思ったが「俺の現在の位置は5位と8位集団である。もう少しなんだけどなあ・・・」あの、馬鹿フレールゲルは俺が目当てらしいので、離れていてくださいね」「いやいや、年下のアルフォンス殿に一人で戦わせたとあれば、ミッターマイヤーの名が廃る」「相手はルール違反の実弾を使っているのですから。助太刀しますよ」と言ってくれた・・・うーん頼もしい！

無線で馬鹿フレールゲルが「貴様、アルフォンス、この悪天候のどさくさで殺してやるぞ!」と恨み声を発していた。こっちはこんなところでこんな無能野郎と遊んでいる暇はないので、「どうぞ!勝手になさってください!」「気が散るんで無線使わないで下さいね!」とガツン!と話しておいた!一瞬フレールゲル機が怒りの青白い炎に包まれている気がしたが・・・いきなり撃ちまくってきた!ロックオンセンサーも何もあつたもんじゃやない!とにかくぶっ放してるって感じだね。ただし実弾だから当たると厄介なんだな。俺とミッターマイヤー機は交互に前後を左右を振りながら移動していて狙いを定まらせない!

基本俺しか見てない訳だから、スルスルとミッターマイヤー機はスピードを下げてフレールゲル機の後ろに回り込もうとしている。流石だ!疾風ウォルフ!任せたぜ!何でもかんでも撃ちまくってるから他の機体に当てやがって、2機墜落してしまった・・・まあ、抜く手間が省けたけどね。ガンガン!やばい!俺の機体にも被弾してしまった。自動消火装置!・・・そうだ!いいぞ!損傷軽微!フレールゲル機の後ろに気配を消したミッターマイヤー機がぴったり付いていた。「やっぱルール違反はいけないよね」と言いながらプロオオオオオオ!と射撃し、全弾コックピットの風防ガラスに着弾した。俺達の装備している弾丸は貫通しないがガラスにひびを入れることは簡単だった。視界を失ったフレールゲル機はスピードダウンするしかなく、あっという間に後方に消えた。



「ありがとうございます！助かりました！」「いえいえ、大した事はしていませんよ。」と言葉を交わし・・・では、ラストスパートに向けて！」前方の1位と4位集団は目の前だった。48時間耐久レースも残すところ40分である。俺とミッターマイヤー機はトップ集団に追いつき、今や1位と6位集団となった。後方の集団は半周以上つまり2分以上差がついており、優勝者はこの6機の誰かがなるのだろう。俺のワルキューレは現在ギヤトリングガン弾切れ。油圧低下、水温上昇・・・調子はぜんぜん良くない！何とか持てよ！エンジンよ！

1位集団ですつと周回を重ねながら、決定打をみんな出せずにいる。みんなタイミングを計っている。ファイナルブーストのタイミングを・・・俺のエンジンはファイナルを少しチューニングしてある。みんなフルブーストをかけるにはエンジンの状態と相談しながらになるが、平均30秒と40秒くらいのブーストタイムでセッティングしているはずだ。だが俺は20秒。それもMAXでだ。そもそも異層爆エンジン組みにまともなぶつかつても勝てないのでエンジンの短命覚悟でスーパーハードセッティングをしたわけだ。20秒間しか持たないが最高速度は1.6倍くらいにはなる計算だ。エンジンが持てばだが・・・

みんな躊躇しているのは48時間ぶつ通しで飛んできたエンジンだから、耐久性に自信がないのだ。俺はそのほうが助かる。むしろ周りが早めのブーストを駆けられると追いつけなくなると思うので、もつとみんな慎重になれ！

俺は瞬間最大順位は1位にもなっているが異層爆組に最高速度でやられてしまう。悔しいが仕方ない。いよいよ残り時間15分を切った！後、2周か3週だ！踏ん張ってくれ。みんな軽量化を求めるの

でもはや銃撃戦もない。弾丸が残っていないのだろう……う！失<sup>デトネ</sup>火だ！……しかし一瞬だった。いよいよエンジンも終わるのか・  
・順位は5位。ミッターマイヤーは3位につけている。

もはや体力も機体の耐久性も限界だ！また、ラップを刻んだ！お、  
1機ブーストを駆けた！濃い白煙が吹き出ている！早い！ぐんぐん  
離れるぞ！おい！……と思った瞬間にボン！！と派手な爆発音と  
同時にスピードダウンしてしまった……やっぱりみんな苦しいん  
だね。どのみち俺のワルキューレは最後の最後に仕掛けるしかない  
のだから。後ろからミッターマイヤー機を見てるが2度ほど失火が<sup>デトネーション</sup>  
起きている。不安はいっしょだろ！って。

さらにラップを刻んだ。タイマーが48時間を越えた！ファイナル  
ラップだ！雨は最後まで止まないで振り続けた。俺はこの天候だけか  
らここまで出来た。現在4位だ。最後尾の機体はじりじり離れたし  
ている！恐らくエンジンが持たないのだろう！ミッターマイヤーは  
2位のまま、1位は信じがたいがあは無能のレットルを後に貼られ  
るゾンバルトである！今3つ目の空中パイロンをクリア、後は11  
キロの直線と第4パイロン……最終コーナーだ。どうする。みん  
な様子を探るために自然と接近してきた。苦しい！もう少しだ！だ  
れが来るんだ！おっと！ゾンバルトとミッターマイヤーが同時にブー  
ストを駆けた！

ドン！一気に加速し始めた！まずい！このままでは追いつけなくな  
る！ゴールまでまだ1分ある！第4空中パイロンクリア！だめだ！  
勝負だ！30秒くらいあるが持たせるんだ！勝つんだ！いけ！ワル  
キューレ！フルブースト！俺はフルブーストモードのスイッチを押  
した……ドドン！と物凄い加速感と強烈なGがかかって来た。

周りの景色が全く見えないジャイロスコープで辛うじて真っ直ぐ進

んでいることが確認できる時間が長い！まだなのか！持つのか！ミッターマイヤーとゾンバルトが眼の前にいる！ついに追いついた。並んだ！もうすぐだ！次の瞬間！！！！

ポボウオオオオオオオオオオオオウ！

エンジンがブローしてしまった。それでも慣性でゴールインできた！

順位は？激しいスピードダウンでコントロールがし難くなったワルキューレを操りながらラップモニターを見た・・・4位だった・・・

熱く厳しい48時間耐久レースは終わった。

表彰されないので、さっさと手続きを済ませ家に帰るつもりだ。

パルクフェルメの通路の両脇には物凄い数の観客が集まっていた。優勝はゾンバルト！信じられない！2位はミッターマイヤーが3位は・・・同級生のウエイマン・ティスデイルというやつだった・・・ミッターマイヤーのそばにはロイエンタールが付き添っていた。仲がいいなあ！そして冷たい視線を感じた後ろを振り向くと馬鹿フレーゲルがいた「貴様、覚えて置けよ！」と物凄い形相で睨みながら去っていった。こいつはいずれぶん殴ることになるんだろうなあと考えながら片づけを手伝っていた。

あーあ、一応飛び級の申請はして見るつもりだ。何しろもう一步だったのだから！価値のある4位である。早く宇宙デビューしたいなあ・・・と思いつながら雨が上がり満天の星を見上げるアルフォンスであった・・・

## 第四話：初陣！ナイメーヘン遭遇戦！

第四話：初陣！ナイメーヘン遭遇戦

飛び級申請が無事通り、俺は上級士官学校に進級した。

稀な飛び級扱いなので周囲の視線も冷たかった。

受ける授業も何となく俺に対しては不親切な空気が流れていた。

ただ、既に進級していたミッターマイヤーとロイエンタール、ビツテンフェルトらとは非常に親密な関係であったことが幸이었다。

彼らとのつながりの仲でシュタインメッツ、ルッツ、ケンプらとも交流を深めている。

上級士官学校とは・・・まあ、俺のいた時代で言うと大学と専門学校の合体したような感じである。

学力の向上は当たり前だが、現在銀河帝国は自由惑星同盟なる叛徒どもと戦争中であるので当然、戦時下における対応能力は要求される。

幼年学校では小学校レベルから中学1～2年程度の学習内容であった。上級士官学校では、学部学科はより細かく分けられる。適性や本人の希望が考慮される。

通常は馬鹿貴族どもは砲術科に進んで早くから戦闘艦の艦長や指揮官になりたがる。

そりゃあそうだよな、命令したがる・・・というか他人の命令なんか聞いたことが無い奴らだもんね。

そりゃ仕方ない。

俺はその辺は弁えていると言うか、目的が違うので航空科でワルキユーレを極めることにしたのである。この航空科とは上空や宇宙を問わず、高速機動戦についての訓練学習を目的としている。だから大貴族ではない連中はここで腕を磨いたりするわけだ。

逆に砲術科は一般的にあんまり人気が無い。変に大貴族の御曹司のサロン化している・・・でも、そんな座間で大丈夫なんだろうか・・・艦隊を指揮するんだよね？近い将来に・・・だからラインハルトみたいに一気に駆け抜けるのだろうけど・・・そこに目をつけたわけでもあるし、王宮耐久レースでドッグファイトの醍醐味にヤラれた部分もあるんだけどね。

あとはこの航空科に来ている人材である。後の帝国の双壁や原作上でラインハルトに仕える連中がほとんど揃ってる。つまりここで影響力を・・・いえいえ、リレーションを高めて来るべき時に仲間になってもらいたいと考えた。

訓練は座学や模擬空戦などが行われ、徐々に実戦に向けての訓練が始まっていく。

訓練でくたくたになってベッドに倒れこんで熟睡しかけたところで緊急出動サイレンだ！再び飛び起きてパイロットスーツに着替えてワルキユーレに飛び込む！くたくたになって戻って、朝食のトレイを持って並んでいると再び「緊急出動！パイロットは2分後に格納庫へ！」のサイレンが鳴り響く・・・もう・・・ぐったり。

上級士官学校に入学した時点で階級は少尉扱いである。実戦を経験して功績を立てると中尉になる。

その後は学生時代で大尉扱いになれるか、実戦配備後になるのか、そんな進み方である。

戦闘艦の艦長は原則大尉以上である。実戦に出て経験を積みたくない馬鹿貴族どもは何とか金と政治力で実戦経験無しでまず大尉扱いを獲得して、そこから更に艦隊運営責任者として少佐とかに勝手になっていくのである。

そんな俺達が宇宙空間での高速機動戦闘の模擬戦を実施するために、現在訓練艦隊に配備され、艦隊運営とワルキューレと複座式戦略爆撃機ドーンコメットの实戦訓練を行っていた。

訓練宙域はイゼルローン要塞から同盟領方面の回廊内で小惑星帯がアステロイド・エリア広く展開しているところである。

ワルキューレの宙域内戦闘に限って言えば、ミノフスキー粒子が辺りに蔓延しているために通信回線は殆ど役には立たない。周囲500メートル位までの緊急衝突回避システムと肉眼での目視しか生き残る術はないのである。

艦隊の行動ともなれば大出力のエネルギー放射があるので、ミノフスキー粒子干渉下であっても位置の確認は容易である。

そんな状況の中俺達はワルキューレで高速機動戦の訓練を行っていた・・・最初のうちは機内にある立体天球儀上での上下位置感覚が掴めないで苦労した。

集結のサインを確認してから実は俺だけ逆さまで飛んでいて上官にこっぴどく怒られてしまった。しかし、慣れてしまえば他の仲間には遅れを取らなかった。元々優れた運動神経があるわけで、ドッグファイトもバスケットボールで言うところの1on1(一対一)なわけだから、むしろ俺が得意とする分野である。

訓練宙域は通称：ナイメーヘン地区と呼ばれている・・・遠すぎた橋か？

訓練14度目の出撃が行われた。

訓練といっても実弾とミサイルと急降下用の爆装もしている、フルスペック状態で行われるのである。

訓練教官はウォルダースという。

めちやくちゃやかましいが、実戦経験が豊富なおっさんで我々訓練生の間では「ウォルダースの口撃は10機のスパルタニアンに囲まれるより怖い」と恐れられている存在であった。

本人の口癖は「もうじき年齢制限で後方勤務に追いやられる。そんな貴重な時間をお前らのような屑訓練生と共に居なければならぬのは、とても家族に話せるものではないな」である。

小惑星帯を敵の艦隊と見立て、高速戦闘のヒット&ウェイの訓練を行っていたが訓練艦隊の位置がやけに動いている事に気がついた俺は近距離通信(お肌のふれあい通信)で確認した。

「ウォルダース上官殿、訓練艦隊がずい分我々の前方まで回りこんでいますが、大丈夫ですか」「あれでは強襲後の離脱時にコースイ

ンしてくる艦艇があるかもしれないが・・・」

我が上官殿は「ふむ、アルフォンスよ。お前は訓練が足りないようだな、どんな状況下でも一撃離脱を成功させるのが我々ワルキューレ戦隊の役目だ。」「貴様に命令する、再度ナイメーヘン外周で連続攻撃訓練を開始せよ！」・・・

あーあ、言われちゃったかあ、めんどくせえな！と操縦桿を切り返した。

急速上昇の後にターゲットをコンマ数秒でロックして一気に急降下する・・・あれ、何だか訓練艦隊の数が増えてやがる。

70隻位のはずなのにいつの間にか120隻を越えているのか・・・いつ増えたんだ？さあ！訓練のターゲットは？・・・あれ？急加速しながら何か違和感を感じていた。

数が増えていることもそうだが、艦隊の隊形が横一文字隊形である。訓練時にはありえない。何故なら戦闘を意識した隊形ではないのである。

やれやれ、暢気なやつらだ。仕方ないからちよつと脅かしてやるか、俺は中央の大型艦に向けて急降下を開始した。

その直後機能しない無線機が激しい雑音が起こった。「何だ、また上官殿か」余計な事をするな！みたいに怒鳴っているんだろう。

艦隊も俺の急降下に気づいたのだろう。

慌てて陣形を変えようとふらふらしている。



「遅い！」ターゲットロックオン。ロックオンセンサーが激しくピーピー鳴りやがる。艦艇識別確認！コーション・イエロー！……え、コーション・イエローのはずねえだろ。

イエローは同盟軍艦艇に設定してるのに……その瞬間猛烈な対空防御射撃が行われた！「！同盟軍かよ！」急速離脱を行う時に爆装してある対艦爆弾を全弾発射した。

物凄いGの後なので命中したかどうかは、戦闘確認カメラが記録しているだろう。離脱後に再度転進して同盟軍艦艇に突っ込んでいったがあまりの対空射撃の激しさに全く近づけない。

「貴様、何をしている！」ようやく、味方を連れて上官殿が戦闘エリアに入ってきた。

しかも前方にはスパルタニアンが発進して来ている！

どっちも遅いや。

「上官殿報告します。敵艦隊を発見いたしました。」

「わかっておる！見ればわかる！」「全機突撃隊形展開。これは実戦である！訓練ではない！」

両方の艦隊もお互いを確認しており、艦隊戦の用意をしている。訓練艦隊も訓練とはいえ普通に戦場使用が可能な巡航艦などで編成されているので戦闘は問題ない。運よく俺は仲間のグレッグを確認し、共同でスパルタニアンに対峙した。この実戦でどれだけの仲間が撃墜されるのだろうか……

正面にスパルタニアン。  
俺が引き付けてドッグファイトを仕掛ける瞬間に斜め後方からグレッグが割って入り襲撃して撃墜する。

後ろにつけられてもロックオン寸前に大回りした俺、グレッグ、が射撃を行う。前方に集中している敵は一たまりもない。相手に有効射撃を繰り返していたので補給が必要になった。

しかしまだ、スパーローミサイルが残っているので、前方で射撃を行っている巡航艦に向けて一撃離脱を行う。至近距離では敵の艦艇に対する警告サイレンが激しく鳴っている。対空砲火を潜り抜けて何とか全弾発射した。離脱時に至近距離で対空ミサイルが爆発し、少しダメージを負ったようだ。

スパルタニアンに対する武器が弾切れになるので急いで戻る道中に散々敵機に追い回された。

こっちがダメージと弾切れをわかっているようだ・・・むかつく！制空権掌握率は同盟が65%となってしまうた。やはり訓練生では駄目なのだろう。

ようやく母艦に戻って補給を受けられる。整備メカニックから「少尉、何だか凄い戦果を挙げられているらしいじゃないですか！」え、そうなの・・・「うーん、よくわからん。」

次はワルキューレでいくかドンコメットでいくか、ちょっと悩むところだが、空戦が続いているので、ワルキューレで再度発進することにした。

補給待機時間は10分・・・艦内のフードコートでフルーツジュースとプロテイン錠剤、ハムカツサンドイッチを流し込んだ。

目薬でシャキ！としてヘルメットを被り、コックピットに収まった。

メカニックが「ダメージの修理はOKです。」「全開でいきます！御武運を！」といって射出カプセルに送り込んでくれた。

発進！ドン！という発射のGが体をシートに思い切り押し付ける！立体天球儀が敵味方の位置を表示する・・・ずい分やられているな。同じく補給の終わったグレッグと同じ分隊所属のステイブ・ワトソンが合流し3機で中央を突破することにした。

途中でギャトリングガンで2機のスパルタニアンを撃墜した。6門のギャトリングガンの掃射を受ければひとたまりも無いのである。

高速機動戦域は既に同盟軍が優勢で進んでおり、帝国ワルキューレ戦隊は劣勢であった。

目立つならこんな時である事はわかるのでグレッグとワトソンに「目立ちたいので、艦船攻撃に切り替えようと思うが」と話したら、高速機動戦の雌雄は決しているので手柄狙いでいいかも、という返事だったので目標はスパルタニアンではなくて、宇宙母艦である。

同盟軍艦隊の間をすり抜けながらインターセプターの追撃を振り切りつつ宇宙母艦を探した。恐らく2〜3隻はいるはずである。勢い余ったインターセプターが仲間の駆逐艦に衝突して駆逐艦も爆沈した・・・あれは俺のスコアになるのだろうか・・・

敵のスパルタニアンも徐々に母艦に戻り始めた。

帝国の訓練生ワルキューレ戦隊も急いで収容されている。

後5分もしないうちに艦隊戦になるだろう。急がないとね、グレッグが「いた！4時の方向！宇宙母艦だ」「距離300」いくぞ！グレッグが見つけた宇宙母艦はスパルタニアンがほぼ満載状態の艦であった。一気に補給に戻って来て補給中なのである。

チャンスだ！

やるしかない！

後方からインターセプターが6機！猛烈な勢いで追いかけてきた。俺の意図を察したのである。「距離100！いくぜ！グレッグ！ワトソン！」艦底から近づいてスパローを全弾発射。全弾補給中のスパルタニアンに着弾！上昇し対艦ミサイルと爆弾を艦橋付近に全弾発射！だ！

急上昇と緊急離脱で同盟艦隊の中から離脱しているが怒りのインターセプターが20機くらいで追いかけてくる！

爆撃の結果を確認する暇も無い。

2機のインターセプターを撃墜したが俺のエンジンの装甲版も打ち抜かれ、じきにパワーダウンするかもしれない。

グレッグはもはや弾切れらしく、必死で逃げている。もうちょいで帝国艦隊干渉宙域なんだ！逃げる！そのとき「ドワララララララララララー」と凄まじい音でギャトリングガンの一斉射撃が始まった。

ウォルダース殿が訓練生を率いて救出に来てくれたのだ。

「命令違反だぞ。アルフォンス、グレッグ、ワトソン」「私は今回の訓練で対艦戦闘を行えとは言っていない。」「うるせえなあ・・・こっちは必死なのになさ。」

援軍を見て同盟軍のインターセプターが引き上げていった。何とか助かった。

巡航艦2隻、宇宙母艦1隻、駆逐艦1隻、スパルタニアン9機

これが俺の戦果らしい。

すべてはカメラのデータを照合した結果である。一躍スターダムに踊りだせた。

訓練生でこれだけの戦果を挙げたのは銀河帝国以来初かも知れないと・・・帝国全土の高速通信で一躍ニュース扱いである。

俺は2年を残して大尉に昇進。

いつでも実戦部隊に配属希望が出せる。

しかも艦長か空戦隊長格を選べるのである。俺はただの艦長には興味が無く、むしろもう一段結果を出して少佐に昇格後に分艦隊の指令として進んでいく事を考えているので、今回は空戦隊長格を選択した。

数年後銀河帝国の政治・軍事の頂点を極める事になる俺の記念すべき初陣はこのような形で幕を閉じた。

俺の愛機ワルキューレは性能を3倍にアップさせるチューニングを  
施し、機体もミッドナイトブルーに染めて、違いを出した。

これが後に同盟軍パイロットの中で、青き流星として恐れられる事  
になるはじまりである。

## 第五話：第2次ナイメーヘン〜アルレスハイム星域会戦・・・？

第五話：第2次ナイメーヘン〜アルレスハイム星域会戦・・・？

昨年のナイメーヘン遭遇戦で戦果を挙げた俺は上級士官学校の生徒でありながら第139高速機動戦隊（ワルキューレ戦隊）の空戦隊長に任命されたのである。

管下の機体は48機にもなった。

責任は重いのである。

馬鹿兄アルフレッドも「ランズベルク家の栄光はここに極まれり！」とうれし泣きしやがって。

「我々兄弟は銀河最強の兄弟かも知れぬ」・・・いい加減にしてくれ、俺は物凄く忙しくて兄の手助けはもうできそうもないのだから・・・いじめられても自力で抜け出せよ！

分隊長はグレッグ・ドレイリング、ケネス・ギルフォード、アルマリック・アズヴァール、リュウ・ウェイの4名でそれぞれ12機くらいを受け持つのである。

グレッグは王宮杯の耐久レースからの付き合いになる。以外に冷静に状況を判断できるところがあり指名した。他の3名は独自に調べた結果、恐らく猫の子ではなく虎の子のほうであると判断した連中である。

そんな我々の第139高速機動戦隊は士官学校の生徒でありながら、実戦参加の命令が来て帝国軍イゼルローン要塞駐留艦隊所属のカイ

ザーリンク中將の艦隊に配属され、高速巡航艦ホルツグラフに我々は待機している。

このホルツグラフは2世代前の老朽艦であり、射程が通常の同型艦の6割位しかない。ミサイルや主砲の連続発射時間が遅い。スピードが出ない。乗り込んだとき思わず

「大丈夫なのかよ！これ！」と叫んでしまった。

航行中もギシギシ音がするし・・・でも元々の乗組員の連中は「ここまで生きながらえてきたんだから縁起が良い！」といってるし・・・

しかも史実どおりなら、半分以上を失って負けてしまう戦いのはず・・・  
・ 相手はあのビュコック爺さんだし。

この出撃予定地である、アルレスハイム星域とは帝国領イゼルローン回廊、自由惑星同盟方面にある星域の名称で、数多くの小惑星が漂う場所である。  
アステロイド・エリア

特に不安定な成長活動中の恒星や未確認の新生ブラックホールの類はない比較的安定した星域であったが、今まで主だった艦隊戦の宙域に選定されなかったのは、その小惑星群が障害物になってしまい、帝国及び同盟の警備地域としてもっとも厄介な場所と指定されていた。

つまり、ここだけは衛星による警備網ではなく、艦隊や艦載機によるマンパワーでの哨戒が必須とされていたのである。銀河帝国も定期的な監視艦隊を派遣しチェックを怠っていなかったが、もちろん完全ではないのである・・・



そしてアルレスハイムの最南端には俺の初陣を飾ったナイメーヘン地区がある。個人的には好きな場所だ。

各分隊長とのブリーフィングを行うと必殺1対1のドッグファイトをやりたがるグレッグと数の有利を持って攻撃に当たらせるべきだというシステムアタック論者のアルマリック・アズヴァールがぶつかった。

「ワルキューレ載りの本質はドッグファイトである。そのためにパイロットは空戦技術を血のにじむような努力で習得しているのだ」  
「集団行動によるアタックなど同盟のスパルタニアンどもに笑われるというものだ！」と強気のグレッグ・ドレイリング・・・

「では、ドッグファイトで敗れたらどうする？」  
「パイロット一人作り上げるコストをご存知か？所謂、キルレシオが高いのではないか？だとしたら死なない作戦で戦ったほうが良い」とアルマリック・アズヴァール（これからAAとします）

「では集団戦闘の優位を説かれるが、我が空戦隊よりも多数の敵に攻められたら、どうするのだ」

「その集団を細分化して数の有利を引き出せばよい」

「逆の同盟が良く使う三位一体の攻撃に対してはドッグファイトでは切り抜けられないではないか」

議論に収束の気配がなく、俺は宣言した。

「多数を持って少数を叩く！戦略は以上だ、各員の奮闘を期待する。以上だ」

決まってしまう後はそれぞれが行動をチェックするだけの話である。

「同盟軍は1万6000隻だと?」

カイザーリンク中將はフェザーン航空宇宙局からの伝達情報に呻いた・・・

我々は1万3000隻である。

副官のウインメル少將は「どうなされますか。このまま戻られますか?」と尋ねた。

「・・・」

「一戦もせずにイゼルローンに戻れというのか・・・」

「出来ない話だ・・・イゼルローンのゼークト大將に逢わす顔がないわ。」

「では、数の不利を承知で・・・」と心配そうなウインメル少將

「そもそもフェザーンの奴等の情報が正しかったことがあるのか?」

「いつもいつも訂正するなどいつてくるではないか」

「しかし、今回が正しかったらどうされます?」

「その時は一戦してずるずる後退し、小惑星帯から引きずり出してトールハンマーの餌食にすれば良いではないか!」

・・・そんな繊細な作戦をあなたは貫徹できるのか?現場対応させられる兵士の身にもなれよ!・・・と心の奥で叫ぶウインメル少將・・・俺はこんなところで死ぬのはいやだからな・・・

「我が艦隊、アステロイド・エリア小惑星帯に入ります」

「各艦、小惑星を盾に取り、監視体制に入れ。同盟の艦隊はまもなく畏にはまるぞ」

カイザーリンク中將は少し興奮した声で全艦に伝えた。

これで大勝利を収めれば俺はゼークトに並ぶ……この俺が帝国軍大將だ……イゼルローン駐留艦隊の司令長官にだってなるかもしれない……気合だな……

旗艦リオ・グランデの戦闘艦橋の大スクリーンを見つめてビュッコク大將はつぶやいた。

「昨年末のナイメーヘン地区での遭遇戦な……」「異常な被害を受けた戦闘であつたそうだ」

「聞いております。」「何でも数機のワルキューレに甚大な被害を受けたそうで」副官のファイフェル中佐が同じく大スクリーンを見ながら続く。

「そんな時代になつてしまったのかもしれないなあ」「戦艦の数ではなくて、戦闘機の数で勝負が決まる……」「私のような古株はもう用無しかもしれんな……」

「しかしワルキューレやスパルタニアンが長駆してイゼルローン回廊に進撃することは出来ません。まして、要塞を攻撃などできませ

んが・・・」涼しい瞳を司令官に向けながらファイフェル中佐は話  
す。

「近い将来、それも可能にしてしまうかもしれない・・・」「我々の歴史というのはどうせ無理だとか、まさかそんな事が、ということとを乗り越えてきた事でもあるのだ・・・」

「せめて私の生きている時代は艦隊戦で決着が付く形でいてほしい  
と思うよ」

「・・・ん、・・・つつ・・・」額を軽く押さえたビュコック中将の  
顔が少し歪む・・・

「司令！どうなされました！」少し心配顔のファイフェル中佐が尋  
ねた。

「ん、何でもない・・・頭痛のようだ・・・」「風邪でも引いたの  
かな・・・」

「いけませんな。作戦前だというのに・・・」「風邪薬を飲まれま  
すか」

「ん、いや、やめておこう作戦前だしな」ビュコックは終わったら  
服用して休むか・・・と考えた

「味方先発艦隊より入電！」「ナイメーヘン地区で熱源反応確認！」  
一気に艦橋内に緊張感が走った。

「来たか・・・」「後方のウランフはどうしておる」とファイフェ  
ル中佐に聞いたです。

「ウランフ提督の艦隊は予定通り、我が軍の後方2万宇宙キロに展

開しております。」

何故か原作と違い、増援軍としてウランフ提督の第4艦隊が姿を見せていた。

歴史の流れが変わってる？

「帝国の奴ら、まさか今回は前回の遭遇戦の弔い合戦とは思って……」

アルフォンスが最初に攻撃し、初戦果を挙げた巡航艦の艦橋には司令官であるカウメロ・アンソニー准将が載っていた。もともと第5艦隊ビュコック中将の高級幕僚の一人で今回始めて艦隊指令として指揮を執っている最中の遭遇戦だったのである。旗艦サンタナは爆沈、准将以下全員死亡が確認されたのである。

通常の艦隊戦を挑む気配の中で今回は完全に相手を打ちのめしてやるうとビュコックは考えた。

再び遭遇戦を装い、背後にウランフ艦隊を回して完膚なきまでに叩きのめすつもりだ。

ただ、懸念はウランフ艦隊の位置が背後にイゼルローンを置いた形で戦線を維持するので反転攻勢を受けるとトールハンマーが気になるのである。

「小惑星帯に敵艦隊確認。数6000隻!」「ワルキューレを発進させている模様」

「こちらもスパルタニアンを出せ!」ファイフェル中佐、続けて艦載機が戦闘空域に達するまで主砲、リニアレールガン、ミサイ

ル、撃ちまくれ！目標は方角でいい！」

先発艦隊のマイクラー少将は

「まだ撃つな！」「居場所を悟られるな！」と小惑星に身を隠しながら叫んだ！小惑星に先に陣取った銀河帝国は本来優勢で戦況を進められるはずであった。しかしおよそ数十箇所から艦砲射撃が始まった。

そしてその数発は味方のワルキューレの進行方向に向けられていた。

「後方！高熱源体！」

「何だと！」「全機右展開！」俺は脂汗をかきながら味方を助けるのに必死だった。

俺の第139高速機動戦隊は無事だったが、命令が数秒遅れた空戦隊は味方の主砲エネルギー弾に打ち抜かれ、一瞬に十数機が消滅した。

「！！」味方のワルキューレ戦隊は大混乱だった。そこへ同盟のスパルタニアン部隊が殺到してきた。数はほぼ互角だが、何しろ指揮系統がズタズタで機能しているのは俺の空戦隊だけだった……

俺達は2機がふらふらと敵の目の前に出て、追いかけると急いで逃げる。追いつきそうな瞬間に渦巻き状の半包囲網を仕掛け一気に3〜4機を葬る作戦である。効率的かどうかは別にしてこちらは被害無しで既に15機以上撃墜できている！

リュウ・ウェイがまたうまい演技で逃げ回るので、（AAなどに言わせれば、それが本当の実力であり、奴の空戦はドッグファイトで

はないとか)面白いようにスパルタニアンが引き込まれる。

空戦隊内ではこのフォーメーションを『ブラッディ・スクリュー』と読んでいるが、俺の時代では既に戦国武将の上杉謙信たちが行っていた車駆りではないか・・・

ブラッディ・スクリューを抜けたスパルタニアンが2機いた!返り討ちで味方のワルキューレが4機撃墜されてしまった。

「おのれ!」AAが急上昇して襲い掛かるロックオンしてからトリガーを引くまでの時間がわかるかのようにギャトリングガンのウラン235弾を回避している。

「やる!」俺はフルスロットルで追いかけた。何しろ俺のワルキューレは通常の3倍のスピードが出るチューニングを施している。

グワン!と物凄いGが掛かる!一気に2機のスパルタニアンを追い越した。それが作戦なのだが・・・

「急加速のミッドナイトブルーのワルキューレ・・・蒼き流星か!」  
「コーネフ!あいつはもらったぜ!」

「いえいえ、共同戦線でいきましょう。ポプラン殿」2機のスパルタニアンはオリビエ・ポプランとイワン・コーネフという。後の同盟空戦隊の大エースである。

2対1のバトルだが互角である。機動性は俺のワルキューレに分があるが、なかなか連携が取れていてお互いに数発被弾している。

俺の空戦隊は予定通り同盟軍第5艦隊に攻撃を仕掛け始めた。俺は

この将来の大エースどもに苦戦している。



## 第六話：第2次ナイメーヘンくアルレスハイム星域会戦・・・？

第六話：第2次ナイメーヘンくアルレスハイム星域会戦・・・？

艦隊戦の方は・・・

同盟軍第5艦隊旗艦リオ・グランデの戦闘艦橋内では

「奴らの方から居場所を記すような砲撃を行うとは・・・」「解せないな・・・」少し悩んでいるビュコック中将に「提督、畏であると小官は判断しますが・・・」とファイフェル中佐が答えた。

「畏か・・・しかしやつらは、味方の艦載機を吹き飛ばしてまで行う畏とは何だ??？」

「当面は小惑星帯の中から発砲してきたエリアへの砲撃に留める」

一方、カイザーリンク中将の艦隊は大混乱であった。小惑星帯で待ち伏せすることが作戦であったにもかかわらず、砲撃を行っている部隊がある！当然同盟軍もそのエリアを集中的に砲撃してくるので凡そ自分達の潜伏場所を教えているようなものである。

「ええい！何をしている！」

「誰が勝手に攻撃をしても良いと言ったのか？」「分艦隊指令を出せ！」

当然小惑星帯のそこかしこに、ミノフスキー粒子は散布されており、通信状況はひどく悪い。ノイズが多いがぎりぎり分艦隊指令のマイクルーア少将に繋がった。

「マイクルーア少将出ました」とウインメル少将から。

「貴様！何を考えている！基本方針を忘れてもしたのか。」スクリーンに向かって絶叫するカイザーリンク中将・・・

（あーあ、怒ってる暇なんか無いんじゃないの？戦局は不利に動きそうだし・・・だめなおっさんだね）瞳の片隅で怒ってるカイザーリンク中将を横目に見ながら

（今度は降格でもいいから配置換えを希望しよう・・・長生きできそうに無いな、この方のもとでは）と考えるウインメルであった。

ノイズの中で分艦隊司令のマイクルーア少将は

「申し訳ありません。原因を調査中です」と言うに止めている。  
「原因が確認でき次第報告いたします！」スクリーンは切れた。

おのれ、誰がこんなことを・・・と、いきり立つマイクルーアであったが、すぐに発砲者の集団がわかり、旗艦に召集させた。数名の艦長が戦闘ブリッジに召集され、状況を説明することになっているが、皆の口から出てきた言葉は以外な発言だった・・・

「同盟なんか皆殺しだ」、「我々は負けすはずが無い」「敵を叩いて一気に同盟本拠地に乗り込むのだ」

・・・何を言っているんだろうか？と直接話しに参加はしていないが、クルーと打ち合わせている振りをして話を聞いていたウインメルは思った。

絶句しているカイザーリンク中将とマイクルーア少将は「貴様ら！

何を言っているのか？」「頭が麻痺でもしているのか！」

その発言の瞬間にウインメルとカイザーリンクは同時にある事実を思い出した。

「き、貴様ら・・・サイオキシシン麻薬か・・・」カイザーリンクは呻いた。

サイオキシシン麻薬はその当時の銀河帝国、同盟両方の軍隊に蔓延しつつある薬物の名前であった。一般的に軍隊での薬物の蔓延経路は下級兵士からというケースが多い中、今回のサイオキシシン麻薬は上級士官から蔓延しただしいわれている。

上級士官の場合通常の乗艦前のドラッグチェックは実施されない場合が多いので、検査に引つかからないのである。また、この薬物構成上、尿や唾液からは成分が分泌されにくく発見が困難な麻薬として対応が遅れているのも事実である。

「銀河帝国艦隊の艦長ともあろう者が薬物によって正常な状況判断ができないとは！」

「軍法会議は覚悟しているよ！」「SPはこの者たちを拘禁・・・」最後まで言葉が発せられないのは召集した艦長たちがいきなりレイガンのカイザーリンクとマイクルーアに向けて発射したからである。

「貴様ら！何を！」レイガンを抜きながら遮蔽物に転がり込んだウインメルが叫んだ！

たちまち戦闘艦橋内で激しい銃撃戦が展開された。召集者の一人が携帯型ゼツフル粒子発生機をもっていた。そしてもう一人が携帯用のハンドグレネードランチャーを取り出して発射した・・・

カイザーリンク艦隊旗艦の戦闘艦橋で激しい爆発があった。その直後艦隊全域で混乱が生じ、集団としての機能を保てなくなりつつあった。その瞬間、前方の同盟第5艦隊に向けてパニックによる全面攻撃に転じたのである。中にはいきなり小惑星帯から抜け出て逃げ出そうとした瞬間に同盟軍の攻撃で爆沈する戦艦が増えてきた・・・

「どうかしたのか？帝国軍は？」

リオ・グランデの艦橋で帝国軍艦隊の不可思議な行動をみてビュコツクは考える・・・

こんな時はうちのファイフェルではなくて・・・そう、あの若いの名前は確か・・・ヤン・ウェンリーとかいったな。あの若いのと一度話したことがある内容だな・・・

「敵が明らかにパニックによる行動を起こしたときの原因としては、全く予期していない時期、方向、からの敵部隊の出現。？艦隊内部の人的構成要因に問題が生じた場合・・・凡そ、この2点に分けられる・・・」

出撃前の同盟軍統合作戦会議室で聞いた話を思い出していた。

「・・・とすれば、ヤン・ウェンリー大佐の論法でいけば今回はどちらなのだろうか・・・」

「提督、例のエル・ファシルの英雄ですか・・・」とファイフェル少将。

「そうだ、本来なら彼のような修羅場を経験したものをどんどん引き上げるべきなのにな・・・」

「近頃の人事ときたら・・・」

「提督！」ファイフェルが注意深くたしなめた。

「そつだな。今は戦争中だ・・・集中しよう、目の前のことにだけ」  
未来のエース候補のオリビエ・ポプランとイワン・コーネフを同時に相手にしている俺は徐々に愛機ワルキューレのスペックの差が効いて来た。徐々にポプラン、コーネフの両機を追い詰めていった。ポプラン機を追い詰めてロックオンセンサーをわざとぶつけてプレッシャーをかける。

「う、こいつ！振り切れねえ！」ポプランが必死の形相で操縦桿を操作するがじりじりおれは追い詰める。あーあ、原作と変わっちゃまうな！

「あばよ！」とトリガーを引く瞬間に「！」またしても味方から無差別な砲撃が行われ、エース候補の撃墜するタイミングを逃がしてしまった。ポプランと、コーネフの両機は急いで戦線から離脱してしまい、もはや時期を逸した。

「なにやってるんだ！あいつら！」俺は怒りの炎で血液が100に沸騰した感じだった！丁度、俺の空戦隊のワルキューレ軍団が対艦戦闘を終えて補給に戻るところであった・・・無差別な主砲のエネルギーは無慈悲に帰還中の編隊に突き刺さった！

一瞬にして十数機のワルキューレが消滅した・・・俺は急旋回して小惑星帯に突撃した。頭が真っ白だった。敵も味方もねえあいつ等全殺しだ！物凄いGと加速感がコックピットを包む星の形が何だかよく見えないくらいの猛スピードだ！

AA、リュウ・ウェイ、ケネス・ギルフォードの機体が怒りに任せ

て突撃してきた。近距離通信で「ざけんな!」「殺してやる!」と叫んでいた。俺は今回止めないよ。悪いのはそっちだし、今回は悪すぎる。大人の判断の前に償えるだけ償うべきだ己の生命を持って超高速で進む俺の進行ルート上に脱出ポッドの反応があった。軍務規定上、脱出者の保護救援は最優先事項なのである。無視するべきだ!と思ったが放置していけば間違いなく助からないだろう。

仕方なく隣接して回収作業に付いた。中には片腕を吹き飛ばされた高級士官が苦痛に顔を歪めながら載っていた。

「だ、誰か?」と誰何され、「は!第139高速機動戦隊のアルフオンス・フォン・ランズベルクであります。」「・・・ランズベルク・・・あのランズベルク家の方か・・・」どのランズベルクかは知らないが「そうであります」「具合はよろしくありませんか?至急小官のワルキューレに搭乗され、病院船までいきますので治療されたほうがよろしいかと思えます」

顔面蒼白になりながら「では、頼みます」と一言だけ話し、ゆっくりワルキューレに向かった。病院船に向かう間に少しずつではあるが話を聞いて驚愕の事実を知ることになった。俺が助けた士官は艦隊旗艦の副官であるウインメル少将だった。

「サイオキシン麻薬!ですか!」

「そう、命令を無視して同盟艦隊に砲撃したのはみんなサイオキシン麻薬中毒もどだった。カイザーリンク中將はあの様子だと恐らく即死だろう。」

「やろう、味方のくせに、俺の部下を主砲で撃ちやがったな・・・」  
「糞どもも同じ思いをさせてやる!」

呻きながらウインメルは「君達の動きは今回は止められないと思っているので、自身の判断で行動するように」

「了解です少将！」まもなく病院船にドッキングできた。

艦隊戦はいよいよ一方的になって来た。同盟軍第5艦隊が小惑星帯の前面に半包囲の陣形で展開している。戦線を離脱するにはそこを突破するしかない。後方に（イゼルローン要塞方面ね）逃げればウランフ提督の第4艦隊が待ち構えている・・・味方同士の打ち合いもかなり目立ってきている。

「奴等は何をしているのだ？あれはどう見ても同士討ちだぞ？」ビュコックは呻いた。

「小管にも同士討ちとしか見えませんが・・・なんででしょうね」フアイフェルも考え込む。

「まあ、叩ける時に叩いておくとするか」片手を挙げてゆっくり振り下ろす「全艦、攻撃開始！」

「ミサイル、全弾発射しろ！」「撃てば何かに当たる！」

同盟軍第5艦隊の集中砲火が始まった。同士討ちを行っている両方に高密度の砲撃と水爆ミサイルが殺到した。たちまち火の玉があちこちで吹き上がった。艦隊司令と分艦隊司令を失った帝国軍は指揮系統が機能せず、各々が自己判断で戦場を駆け巡っている状態であるので、組織的な攻撃を繰り返す同盟軍の相手では無くなっているのである。

艦隊の後方に位置していた艦艇はイゼルローン方面に脱出を試みるが既にウランフ提督の率いる第4艦隊に狙い撃ちされるのである。旗艦【磐古（Bang-Goo）】でウランフ提督は戦況を見つめながら一方的な戦況に

「奴等、どういうことだ？勝手に崩れだしているぞ・・・」  
同じく大スクリーンを見ている参謀長のチェン少将は「小官もわかりかねますな。何でしょうか・・・」  
「わざわざ撃たれに出てくるとしか思えない感じですよな」

俺は乗艦ホルツグラフで補給を行い（この段階でまだ沈んでいない！）サイオキシン麻薬中毒連中に報復するために発進した。AA、ケネス・ギルフォード、リュウ・ウェイ、グレッグ・ドレイリングの分隊も続く

既に混乱の極みの帝国軍艦隊はその数を7000隻まで減らしていた。つまりほぼ半分を失った状態である。俺たちは混乱しながら絶望的な反撃をしている艦隊の間をすり抜けて、小惑星帯の同盟方面、つまり第5艦隊の布陣している方面に飛んでいる。

未だサイオキシン麻薬軍団と帝国軍の内輪揉め状態と第5艦隊の攻撃でめちやくちやの宙域に進み、サイオキシン麻薬中毒艦を探した。近距離通信で会話するだけで興奮して発砲してくる戦艦を戦闘艦橋めがけて攻撃するのだ。

戦艦ホーブルンの戦闘艦橋に交信すると「帝国の裏切り者め！撃ち落してやる！」との内容で一斉射撃が始まったので、俺は苦笑しながら目をすつと細めて「死ぬ！糞ども！」と急上昇して一気に急降下を始めた。何しろ通常のワルキューレのスピードではないので対空防御システムが俺を捕らえることはできない。砲塔部分に対艦用爆弾を投下して、上昇するときに戦闘艦橋にギャトリングガンで攻撃してあげるのである。

戦闘艦橋のウィンドウ部分は粉々になり宇宙に放り出される奴等を



確認できる。撃たれた仲間の仇だ。

思い知れカスどもめ！俺たちの空戦隊は散々攻撃を繰り返し、返す刀で同盟軍の艦艇を攻撃した。そろそろ逃げないと不味いかも・・・と感じて全機集結させてホルツグラフを護衛しながら小惑星帯のイゼルローン方面に向かっていく。

当然、そこには同盟軍ウランフ提督の第4艦隊がいるのであるが・

俺たちは再度補給を済ませて残存艦隊がイゼルローン要塞へ戻るべく活路を開く役目を受けた。こういう時に踏ん張ると出世するのよね。気合入れていこう！

補給を済ませた第139高速機動戦隊が向かった小惑星帯イゼルローン方面の戦況は・・・地獄だった、半包囲の陣で構えている第4艦隊の真正面に次々と飛び出す形となっている。そこに落ち着いて狙いを定めた高密度のエネルギー弾が殺到するので、艦艇の前方エネルギーシールドなどコンマ何秒しか持たない状況であった。次々と爆沈していく帝国軍の艦艇・・・

「酷いな虐殺だな・・・」AAは呟く

「俺達で一暴れしてその隙に一隻でも多くの艦艇を脱出させなくてはならない！」俺は付け加える。

「ただし！燃料、弾薬が尽きるまでだその後はイゼルローン方面へ急いで離脱するのだ！」

「いくぞ！」30機を割った第139高速機動戦隊は第4艦隊に目掛けて突撃を開始した。無補給で継続戦闘時間は1時間が良い所だろう・・・何機戻れるかな・・・

半包囲の第4艦隊の右中央部分に突然混乱が走った。艦隊運動が一瞬停止し、陣形が崩れているのである。ウランフは舌打ちしながら

「右中央部分の分艦隊は何をしている！今一息で奴らを壊滅させられるのに！」

すると「分艦隊から入電！我、敵艦載機の攻撃を受け苦戦中！以上！」

「何だと！異常に早いワルキューレに巡航艦が4隻もやられているだ！」

「それは・・・噂の蒼き流星の事ではないですか・・・あいつ一機で前回の遭遇戦では4隻の艦艇がやられたそうです・・・」チエン少将が情報端末を見ながら発言する。

「そんな化け物が出てきているのか・・・」

「敵空戦隊！我が艦隊の右中央を突破します！」

「・・・何！まずい！その後方は」とウランフが呻くと同時に

「我が方の宇宙母艦戦隊が控えているところですよ！」とチエンが青ざめる！

俺達は散々敵艦隊の一部分を集中的に痛めつけた。何故かスパルタニアンが1機も出てこないのは解せないが・・・どうやら艦隊の右中央部を通過したようだ。しかしレーダー立体天球技の前方方向にコーション・イエロー反応があつた。また敵かよ。

艦影は全部で9隻、大型艦ばかりだ。かなり近づいて来たのに対空防御射撃が行われない・・・何で？肉眼で確認できるところまで来たが・・・なるほど！

「俺達についているぜ！見ろよ！あれはスパルタニアンの宇宙母艦だ！」9隻の艦艇は我々を発見したのだろう。慌てて陣形を構築し

ようとしている。迎撃用のインターセプターも間に合わないよう出てこない。こうなれば一気に爆沈させてやるぜ！

既に25機を割っている我が戦隊だが、まだまだ弾薬も残っているはずである。急上昇後に一気に急降下を始めた。ここに来てようやく対空防御射撃が始まった。しかし宇宙母艦だけの艦隊なのでそれほど厚い弾幕も張れないので、我々は悠々と目標に近づいていった。

俺は敵の防空システムでは捕らえきれないほどのスピードと加速で次々と対艦爆弾を投下していく。スパルタニアン満載の母艦がもがき苦しむように、爆発し被害が増えていく。大型の宇宙母艦だと一隻でスパルタニアンを40機、60機くらい搭載するので被害はでかい！

既に4隻の宇宙母艦が爆沈しているさらに3隻は操舵不能状態だ。

「後方に敵艦隊！接近！」

宇宙母艦が攻撃されているので、俺達が突破して来た右中央部分の艦隊が怒りのオーラで接近してきた。小惑星帯に潜んでいた帝国軍残存艦隊は前方の同盟軍艦隊に混乱が見られたのと同時に全速力で飛び出した。宇宙を真上から見ると半包囲の右中央部分が後ろに引っ込みそれと同じくして前方から艦隊が飛び出している、まるで吸い寄せられるように進んでいる状態であった！

宇宙母艦をほぼ壊滅させた俺達の後方に同盟軍の右中央部艦隊、そしてその後ろに我々の帝国軍の残存艦隊6000隻が追撃している状況である。

同盟軍艦隊に一齐射撃を行っている帝国軍残存艦隊に痛撃を浴びている同盟軍はあっという間に殲滅してしまった。

旗艦旗艦【磐古（Bang-Goo）】のメインスクリーンでウランフは絶句していた。

「・・・9分9厘、勝ちなんだぞ・・・間違いなく勝ち戦だったのに・・・」軍用ブーツで地団駄を踏んだ！

「大勝利目前で我々は虎の子の宇宙母艦を9隻全部失ったのか・・・500機のスパルタニアンといっしょに・・・500名のパイロットもろとも・・・」

チエン参謀長は声がかげられなかった。しかしウランフの言うとおり、9分9厘我々の大勝利だったのに、あの蒼き流星のワルキューレ戦隊だ、あいつらのせいでこんなに打ちのめされなくてはならないのか・・・

ホルツグラフに帰還した我々は誰一人としてイゼルローン要塞に戻るまでコックピットから出てこなかった・・・みんな限界を超えて戦ったので気絶？眠り？の最中だった。

第2次ナイメーヘン〜アルレスハイム星域会戦：銀河帝国軍13000隻が参加し、イゼルローン要塞内のドックに戻ってこれた数は6200隻。同盟軍第4、第5艦隊参加艦艇数28000隻で損失数2000隻。

同盟軍の大勝利である。

イゼルローン要塞立ち寄りの後、帝都オーデインで上級士官学校に戻った俺は少佐に昇進した。分艦隊と1個空戦隊を預かる立場となった。あの金髪赤毛コンビも史実どおりに順調に進んで来ているの

で俺は全てを先取りしてやることにした。先にあいつに会って・・・  
先にあそこに行って・・・先に奴を倒して・・・

## 第七話：迎撃！惑星カプチェランカ攻防戦

### 第七話：迎撃！惑星カプチェランカ攻防戦

少佐になった俺は分艦隊司令官として20隻の艦隊と50機のワルキューレ空戦隊を預かる身となった。旗艦となる高速戦艦【コーラル・シー】は機動性重視（スピード重視型）の戦艦でサイズは帝国軍の大佐、少将が乗艦するワレンコフモデル標準戦艦よりも小型でかつ、エンジン構造は新型のトルネードチャージ型ラムエンジン搭載のルクシオン型2号艦ということでスピードとパワーは現行型よりも60%以上のアップが実現できている。

航海士に言わせると幼児の三輪車にワルキューレのエンジンを載せた感じ・・・だそうだ。ピカピカのうれしい話はここまでで、艦隊の構成内容は酷いもので、戦艦6隻、巡洋戦艦3隻、高速巡航艦6隻、駆逐艦3隻、ミサイルフリーゲート艦2隻である。

バランス型と言えなくも無いが、不満点がいくつもある！

？ 宇宙母艦が無いこと・・・これではワルキューレの積極活用が難しい事。今後は対艦戦闘はワルキューレの時代になると信じているのでこれは不満。

？ 航空戦力が無い以上、接近戦ではなく砲雷撃戦主体の構成であるべきなのに長距離射程を持つ戦艦、高速で雷撃を行う巡洋戦艦の数が少ない事。これでは敵のスパルタニアンに接近されてしまう可能性が高い・・・これも不満。

？ 一番使うのが難しいと考えている駆逐艦とミサイルフリーゲート艦をどう使えばいいのか、射程が短い戦闘艦なので前面に出すしかないが、当然敵の攻撃を受ける機会が増えてしまう、装甲が薄いので被害が大きくなってしまふ・・・これは不安。

？ 何が不満で、あの！ホルツグラフが編入されていること！俺のコーラル・シーから見たら3世代古い戦艦である。そんな艦船を入れていたら、自慢の高速戦闘が出来なくなる！不沈伝説はもういいから、俺はスピードが命なのだから。

以上の理由で俺の分艦隊は些か不満な内容である。

コーラル・シーの艦長に任命されたザザ・パチュリア少佐にいわせると、未だましな方なのだそうだ。

艦隊運用参謀にはギュンター・ノルト大尉、作戦参謀にはユーリー・クルガン大尉、二人とも我がランズベルク家の領内の出身である・・・ということにしてある。アルマリック・アスヴァール AA、ケネス・ギルフォード、リュウ・ウェイ・・・みんな領内出身の士官という形にしてあるが、訳あり登用なのである。経緯は非常に重要なので機会を改めるが・・・

ちなみに我が栄光の第139高速機動戦隊は現在アルマリック・アスヴァール大尉が引き継いでいる。

所属艦隊はイゼルローン要塞駐留艦隊司令ヴァルテンベルク大将所属のウインメル艦隊（元はカイザーリンク大将の艦隊を再分割し900隻ほどの分艦隊になっている）に配属されている。

現在、ウインメル少将は前回の戦闘で負傷し療養中であるので、副

官のサマーン大佐から俺も含めた分艦隊司令官に命令が下った。

「イゼルローン要塞駐留寒帯司令のゼークト大将から命令が来た、我が艦隊は早速出撃準備を整え、惑星カプチエランカ星域に向かう。」

「今回の出撃の目的は？」

「カプチエランカ星で精製した水素エネルギー、天然ガスを積んで出航する輸送船団のイゼルローン回廊内までの護衛任務である。」

「同盟軍の動きは今のところ情報局、フェザン航空宇宙局ともに入っていない」

「三日後の18時を持ってイゼルローンを出発する！以上！」

俺は分艦隊に戻り、作戦を説明した。正直、楽勝！どうでもいい任務だ！と思っていた。

準備OKで出撃をした。総勢4500隻の艦隊である。

カプチエランカ星までは通常航行で5日間の航程である。行きはワープも使うので3日間で到着予定である。道中で馬鹿兄のアルフレッドから電子メールが届いていた。それによると最近、またあの糞フリーゲルとつるんでいるらしい・・・フリーゲルめ何を考えているのか。

ああ、それと少しずつ人材確保のための予算が取れるようになったので、フェザンに諜報部員を一人送り込んだ。アンドレイ・キレンコという者で軍属でないために階級はない。金髪&赤毛コンビを出し抜くために採用した。何しろ歴史上、初めてフェザン回廊を通過するのは俺で無ければならないので・・・



カプチェランカ星に到着してすぐに俺はワルキューレと駆逐艦のコンビネーションで域内探索を実行した。何しろ運ぶ物が物だけに慎重にならないとまずいのである。熱源探知ユニットを5000個展開させて、コーション・レーダーを100個撒き、敵襲に備えた。

資源輸送艦と言うものを始めてみたが、その巨大さに驚いた。俺のコーラル・シーは全長600メートルであるがどう見ても輸送タンクを装着した状態での輸送艦のサイズは2000メートル以上あるのではないだろうか・・・こんなデカイ物を作れるのか・・・その巨大なタンクを5本まとめて抱え込む形で一隻の輸送艦はできている。

全ての輸送艦がカプチェランカを離脱できるまで後、2日かかるらしい、今、輸送艦隊司令から連絡があった。上級士官学校に戻れば秋の体育祭かあ・・・練習してないけど大丈夫だよなあ・・・むかつく先輩どもを思い知らせてやるには良いチャンスだし・・・

幼年兵がコーヒーを持ってきた。みんなにわたして俺も一口飲んだのだが・・・

「んー、何だ！この酸っぱいコーヒーは！」「うげ！」とあちこちで騒ぎ出した。

「でも、司令、この袋の豆を淹れたんですよ！」

その幼年兵が持ち上げたコーヒー豆の袋には『フレンチ・ロースト』と書いてある。

「フレンチ・ローストだと？これがフレンチ・ロースト!？」

「ああ、オーデインのカフェが懐かしい・・・クロワッサンも食いたい・・・」

と故郷を懐かしんでいるときに！

航海士が

「コーション・センサーに感！」

「前方2万宇宙キロに重力震！ワープアウトの数凡そ10000！」

「何だと！」俺はフレンチ・ローストを噴出して、モニターを見た。

こんなときに恐らく敵襲である。

次々とワープアウトし、現れた同盟軍艦隊は明らかにカプチェランカ星の天然・鉱物資源を狙いに来たのだろう。

「敵旗艦艦影はパエッタ中将のパトロクロス！同盟軍第2艦隊であると推定します。数は11000隻です。」

「何てこつた！こちらのほぼ3倍だぞ！」サマーン大佐は呻く。

「現在離脱可能な宙域にいる輸送艦は！」

「は！140隻ほどあります！」

「く、ほぼ半数か・・・どうする・・・」一瞬悩んだが、すぐに決断した

「発進可能な輸送艦は全速力でイゼルローンに向かわせる！間に合わない艦はそのまま作業継続し、残留する護衛艦隊とともに離脱を試みる！」身勝手な決断である。しかし全滅を回避するための決断と言えば聞こえはよいが・・・

「クロフォード少将とバリヤー二少将を！」サマーンは分艦隊の司

令官を呼び出した。

「卿らは残って残存艦隊をイゼルローンにつれて来い！よいな！」

言われたほうは堪ったもんじゃない！2人の少将クロフォードとバリヤー二は青くなって反論した。

「し、しかし！残存部隊を護衛するのは命令としても、いかほど戦力をお預けいただけるのでしょうか？」

「・・・1000隻がいいところだろう・・・奮闘を期待する！」  
苦し紛れにサマーンは説明する。

「そ、そんな！」後の言葉が続かない2人の司令は絶望的な表情で通信を切った・・・

「俺達に死んで来い！ってのか！」「何考えてやがる！うちの司令は」お互いが自分自身を納得させるためにサマーンを罵っていた。そして落ち着いて考えた結果は2人別々のものになったのである。

「俺達に残った輸送船団を護衛しろってさ・・・」コーラル・シーの戦闘艦橋で俺は命令を受け取った。すぐに、ノルト、クルガン、両参謀に相談した。

「こういう場合の考え方として、まわりの脳なしどもはどう考えるかな？」

「恐らく嘆くばかりではないかと・・・」ノルトは答える。

「敵前逃亡を図るものまでおりましょう。」クルガンは顔をしかめつつ答える。

「やっぱ、目立つチャンスだよな！これって！」と俺は目を輝かせ

ていた！

「司令がそうお考えなら、その通りかと・・・」ノルトは答える。

何が起きてても輸送船団を守ればOKなわけだから・・・先に逃げ出す艦隊どもに役立ってもらおうとするか！と俺は考えている。これってエルファシルの脱出と同じ感じ？史実を知ってるって役に立つなあ・・・

俺はクルガンに熱源デコイとミノフスキーチャフを準備させた。きつとこれが上手くいくはずである。その話をしたときに

「小官も同じ考えでした。」と説明してくれた。やはり、この手しかないだろうな・・・

サマーン率いる護衛艦隊は正面の同盟軍第2艦隊に攻撃を開始した。帝国軍3800隻対同盟軍11000隻の戦闘である。あつという間に形勢が不利になり後退をはじめるサマーン。

追激戦に入った同盟軍の進行方向の逆にワルキューレで引つ張ったダミー6000個に1000個の熱源デコイと数10万枚のミノフスキーチャフをばら撒きながら全速力で進んだ。

「何！数万隻の集団だと？」同盟軍第2艦隊のパエツタ中将は叫んだ！

「そんなはずはありません。これは罠です。正面の敵艦隊もしくは今のリーダーに映っている集団の逆方向から本体が出てくるかもしれません！」今、出て行つては駄目です！」幕僚の一人が答えた。

「何だと、君は、この部隊が罠でその後に本体が出てくるというのか！」「つまり、それ以上の数がまだこの惑星に残っているとどう

のか！ヤン・ウェンリー少佐！」

「今以上なのかどうかは判断しかねますが・・・少なくとも自分ならそうします。」・・・言わなきゃよかったかな・・・別にこちらが負けるわけではないのだから。余計なことだったな。ああ、下手打ってしまった。ヤンは後悔しながらさらに考えた。

「困なら仕上げに多少の攻撃姿勢を見せるべきだが・・・」

「新たな艦隊方向から巨大な飛行物体がこちらに向かってきます！数40！」

「巨大な物体とは何か？正確なところを報告せよ！」と顔をしかめてパエツタが言った。

レーダー管制官は

「は！・・・しかし、この質量は・・・戦艦クラスの物ではありません！・・・何と言うかその、小惑星がそのまま向かってきているような質量です。！」

「なるほど・・・うまいな・・・」ヤンは一人で感心した。

攻撃姿勢を見せることで注意を引き付けられる。しかも恐らく向かってくるのは小惑星にエンジンを付けたものだろう。当たらなくても殆ど問題ないし1隻でも当たればそれは大きい戦果になるし、攻撃の意図が明確になると思わせられる・・・

「どつちに転んでも損しないわけだ。」ヤンは独り言をつぶやく。  
「接近中の物体が判明・・・小惑星です。小惑星が此方に向かってきます！」

「全艦回避しろ！」パエツタは叫ぶ

「俺なら今脱出するな・・・」

レーダー管制官が

「レーダーに感！第三の方向に飛行物体数凡そ10000！」

やはりな・・・敵にもこの宙域の状況を見渡せる者がいるんだ・・・中々どうして！ヤンは感心していた。銀河帝国の貴族にも優秀な奴はいるわけだ。

「10000！やはりな、それは艦隊ではなく小惑星群か何かだろう。」  
「そもそも10000隻の船を脱出させるために数万隻の艦隊を囿にするわけが無いだろうが！」ヤンに聞こえるようにパエツタは言う。

俺が使った囿の中から発射された小惑星は衛星ミサイルと言われて  
いるもので、構造は単純である。

小惑星にエンジンをつけて方向を決めて発射するだけのものである。  
途中でエンジンが止まっても慣性の法則でそのまま進み続けるし原料が小惑星なのでコストは殆どかからないし、1発でも命中すれば  
大成功だし・・・

「回避間に合いません！衝突します！」2発の衛星ミサイルを避け  
きれずに同盟軍艦艇の中で8隻が爆沈した。まさにキルレシオが高  
くつく被害だ。

「何をしているか！」パエツタは怒鳴る。

「陣形を立て直せ、正面から攻撃を行う！」

「最初の船団が有効射程より離脱しつつあります！」管制官が報告すると、パエッタも

「構うな！正面の本体にのみ集中しろ！」「紡錘陣形だ！」

アルフォンスの仕掛けたペテンにまんまと乗せられ、同盟艦隊は採取に逃げ出したサマーン艦隊も見逃すことになった。まさに1回で2度おいしい作戦になってしまった。

前方の艦隊が脱出を止め、宙域に留まった。これは引つ張っているワルキューレも逃げ出したせいである。それをパエッタの艦隊は陣形を構築していると勝手に判断しているのである。

ベレー帽を深く下げて腕を頭の後ろに組んで壁にたたずんでいるヤンは同じ艦隊にいる後輩のダスティー・アッテンボローに話しかけられた。

「また、パエッタ司令に言われたんですって？」

ヤンは「ああ、別にもういいよ。この戦いは我々が小惑星にぶつけられた8隻の艦以外の被害はもう、でないだろうからね……」

「ええ！どういうことですか？」アッテンボローは聞き返す。

「つまりこういうことさ、前方の敵艦隊と思われるものは恐らく困だ、艦隊でもなんでもないとと思う。我々は乗せられたのさ。」

「それでは何故、転進してそれを！」ヤンはアッテンボローの話を途中で切った。

「パエッタ司令だつて自分の過ちを認めたくは無いだらう？これはもはや、余計な事だ。」

「敵はずいぶん陣形編成に時間がかかっているな。素人か!」「本  
当の艦隊戦を教えてやるぞ!」

「待っている必要は無い!全艦攻撃開始!」パエツタが命令した。

同盟軍艦隊は忠実に命令を遂行した。罔が浮遊している宙域に攻撃は殺到した。集団を構成しているのは熱源を発するデコイとチャフ（1枚が4メートル四方のアルミ箔）の集団である。主砲一撃で数十個から数百個のデコイとチャフ・アルミ箔が蒸発してしまう。

「一撃で2000隻の敵が消滅した?・・・」パエツタは耳を疑った  
「そんなはずは・・・」一瞬、パエツタはベレー帽を深く降ろして  
いるヤンのほうをちらりと見た。

「再度、砲撃せよ!一気に突き崩せ!」

同盟軍第2艦隊は再び罔が浮遊している宙域に殺到した。主砲エネ  
ルギーで蒸発する熱源デコイとチャフたち。

「しまった!凶られた!」パエツタ中將は青くなった・・・(奴の  
言うとおりだったじゃないか・・・)

何としてでも手柄を立てなければ!強迫観念に包み込まれたパエツ  
タは

「追撃可能な艦隊はどっちだ!」と管制官に探させる。その時にヤ  
ンはベレー帽を掴み、

「司令、もう遅いです。追撃は危険です!」と叫んだ!  
じろりと脅すような目つきでヤンを睨みつけ、

「どうやら我が艦隊は敵に欺かれたようだ。だとすれば転進してこ  
れを撃たなければなるまい。」

「敵艦隊は発進して我々の追撃戦に対する備えを準備する時間を与



えてしまいました。この上は、不本意ながら至急撤退すべきであると判断します。」ヤンは訴える。

「ふむ、何とも不愉快な作戦案だな、ヤン・ウェンリー少佐、だが、空手で帰るわけにはいかん！」

「最も早く追撃可能な艦隊は最後に発進した艦隊です」管制官が報告した。

「よし、紡錘陣形のまま突撃せよ！」パエツタは命令した！

(私なら、あの小惑星を再び正面にぶつけるな・・・そしてワルキューレで出鼻をくじいて離脱する)

ヤンは無言でスクリーンを見つめていた。

俺はコーラル・シーの戦闘艦橋で

「奴ら、予想通りに追いかけてきたぞ！鼻っ面を引つ叩いてやれ！衛星ミサイルだ！全弾発射！」

「その直後にワルキューレ戦隊だ！AAに命令せよ！」

「クロフォード少将、バリアー二少将、今ですよ！艦隊はイゼルロンへ急行させてください！」

「りよ、了解した。卿はそれでいいんだな？」

クロフォードとバリアー二の引きつった顔がスクリーンから消えた。

最大戦速で紡錘陣形のまま突撃してくる第2艦隊に左右斜め前方から最後の衛星ミサイル20発が発射された。前回に痛い目にあっているの、慌てて回避運動に入るが紡錘陣形の中心部の艦艇は思うように方向転換が出来ないまま衛星ミサイルが突入してきた。外側アルマリックの艦艇も大きく陣形を崩してしまい、右往左往しているとAアスバル率いるワルキューレ空戦隊が襲い掛かる。

「いけ！周りは全部敵だ！帰艦時に残弾残すなよ！全部！ぶち込んでやれ！」とAAは命令した。

ワルキューレは単艦で応戦している艦艇に集中攻撃を浴びせた。

「アルフォンスは初陣で4隻撃沈か・・・俺も負けてられないね。これで食ってるんだから。」

アルマリック・アスバールは冷静に巡航艦の戦闘艦橋に対艦ミサイルを発射した。艦隊の外周部で次々とワルキューレの餌食になる同盟軍艦隊にパエツタは

「何をしている！こちらもスパルタニアンを出せ！急いで陣形を再編しろ！」と叫ぶ

（全てが遅くこちらの予想通りだ。銀河帝国軍艦隊の司令官は原則に則り攻撃してくる。）

「逆に見事だな！つてことか」独り言をつぶやくヤン・ウエンリーは光の玉が弾ける同盟軍艦隊外周部分を見ている。

「あの艦隊の司令官・・・誰なんだろうか・・・」ヤンはアッテンボローに問い、

「さあ、きつとそれほど高い地位についていないと思いますけどね」と答える。

同盟軍第2艦隊は衛星ミサイルとワルキューレの奇襲により80隻を失ってしまった。

銀河帝国軍被害はほぼゼロである。

イゼルローンに戻った俺には輸送艦隊の司令から挨拶を受けた。（あんたみたいな戦艦乗りは始めてみたよ！今までの奴らときたら・・・）

結局俺の陽動作戦で輸送船団雄被害ゼロ。損失した艦艇ゼロ、ワルキューレ全機帰艦を確認。分艦隊で同盟の1個艦隊を手玉に取ったというニュースが超ハイパーウェーブ高速通信で銀河帝国中に知らされた。

これでまた出世しちゃうかもなあ・・・次は何だろ一気に少将とかにならないかなあ〜金髪&赤毛コンビの前にやらなければならぬ事がありすぎて・・・急がなくては！

## 第八話：割込み御免！シャフハウゼン子爵家VSヘルクスハイマー伯爵家

第八話：割込み御免！シャフハウゼン子爵家VSヘルクスハイマー伯爵家

それは同盟軍のイゼルローン要塞攻略戦のような派手な艦隊戦でもなく、銀河帝国の自由惑星同盟領への侵攻でもない。

ひたすら後ろめたい、みつともない、大人気ない、チンピラ貴族の口論から始まった。

ヘルクスハイマー伯爵家が（大貴族のリッテンハイム家の分家というか子分みたいな感じ）シャフハウゼン領にあるレアメタルの採掘場である（我がランズベルク家の発掘量の500分の1だけどね・  
・）モンブラン山脈を何とか難癖付けて？ぎ取るうとしているのである。

83

その理由が上級士官学校にいるそれぞれの子息同士のいざこざで、親が登場し政治的決着をつけようとしているなかでの話であり、正直、子供の喧嘩に親出すな！って感じかな。

シャフハウゼン家の子息オスロマイヤーは上級士官学校で俺と仲良しの一人だ。（俺は別に全ての貴族が憎たらしいとは思っていない。問題がある連中もいるが、そうで無いやつもいることを理解している。そこは原作のラインハルトやキルヒアイスとは違うところである。）フルネームが出る以上、この話以降は俺の幕僚に加わる訳だ  
けどね。

気が弱く運動神経も殆ど無いが、艦隊運用シミュレーションを昼休

みに対戦したとき、かなり上級と言われていた俺を10分で倒してしまった。

正直、馬鹿貴族に何かを負けるなんてことを考えていなかった俺はショックだった。ただ、奴は優秀な頭脳を持っていた。

テキスト類は一回読めばほぼ覚えてしまうという頭脳・・・頭にくるけど、むしろおれの忠実な手足として使ってやるほうが銀河帝国のために有意義だ。

そんな下心もあり、公私に亘り色々話し合っている仲だ。そんな彼オスロマイヤーが「ヘルクスハイマー家にイチヤモンを吹っかけられてる！」と聞いたときに我がランズベルク家の誇る超近代化精鋭部隊を送りこんでこの2家とも併吞してしまう手はないかと考えたくらいである。

まあ、ヘルクスハイマー家なんて我がランズベルク家にしてみれば片手間で踏み潰せる貴族レベルだけだね。家自慢をもう少しすると、我がランズベルク家は4つ目の惑星開拓を完了し資産は莫大な数字になっている。もちろん非公開だけどね。

ランズベルク私兵団は艦隊12000隻、ワルキューレ10000機を所有している。俺は最終的に艦隊10万隻ワルキューレを5万機所有することが目標であると報告している。

惑星開拓も進めなければならぬし、有能な士官を領内から発掘しなければならぬので忙しいのである。

そんな中、ヘルクスハイマー家が艦隊を発進させてシャフハウゼン領内に侵攻しつつあると報告を受け、俺は馬鹿兄アルフレッドを従

えランズベルク家の艦隊を急行させた。急いだので高速巡航艦が中心であるが・・・ヘルクスハイマー家の艦隊なんてたかが300隻である。

旗艦コーラル・シーの戦闘艦橋内で俺は

「楽勝なのはわかっているが・・・」呟いた。

「この際、難癖つけてヘルクスハイマー家を取り潰してしまい、併呑したい。」

「鍵はこのコーラル・シーですか？」とギョウター・ノルトが聞いてきた。こいつはいつも俺の知力と集中力を試す質問ばかりしてくる・・・

「ああ、そのとおりだ。この分艦隊旗艦のコーラル・シーが切り札だ」

「直前の情報によると、シャフハウゼン家の領主がグリューネワルト伯爵夫人へお願いをして例のラインハルトフォンミュゼル大尉が軍事顧問として赴任してきているそうです。」

「ふむ」

「そうきたか・・・だが、少なくとも味方であるので気を使う必要も無いであろう。」

俺は戦闘環境から主砲の砲塔を見下ろしていた。新型ブラスター装備の超強力なやつだ・・・恐らくこのブラスターを装備している艦は銀河帝国数ある軍艦の中でこのコーラル・シーくらいであろう。

「司令、まもなくシャフハウゼン家の領内に接近します。」管制官が報告してくる。

「スクリーンで見れるかな？」俺は司令官席をたちメインスクリーンを見上げた。

「は、切り替えます」メインスクリーンにはまばらな光点がパラパラと見られる。一応、交戦中なのであるう。何だかつまらなそうな艦隊戦だね……

「ヘルクスハイマー家の艦隊が約320隻、シャフハウゼン家が凡そ190隻です。」

弱小貴族にしては良く集めた軍備である。我々ランズベルク家私兵高速集団は9000隻である。

戦闘を行えば一瞬で終わってしまう。

だからこそ、1隻も失いたくないのである。俺の考えているXdayまでだね……

お互いに戦闘では素人集団なので攻撃も効果なく、まばらだし、まぐれで命中して破損するくらいだろうか……ダメな奴らだね。

「司令の言われる……オスロマイヤー卿でしたでしょうか？……あんまり戦果を挙げてはいないようですが……」ギウンター・ノルトが皮肉る。

「自転車の補助輪なしで乗れるようになったからといって、ワルキユーレを操縦できないから無能だという内容の発言は……避けたいものだね。」俺は答える

「御意」ノルトは再びメインスクリーンを見つめる。

「司令、そろそろ干渉宙域に入りますが、ミノフスキー粒子の濃度が濃くて通信が出来ません。」管制官が報告する。

「A Aに命令、ワルキューレの発進準備をするように」俺は管制官に指示すると

「アスヴァール大尉からです」と管制官

「すでにワルキューレは準備を10宇宙時間前に完了しております。まるで、指示が遅いよ!と言っているようだ・・・」

「対艦戦闘のみの爆装で出るように!」と俺は確認をした。

「御意でございます。司令官閣下殿・・・」スクリーンは切れた。全く舐めてるべ俺のことを。原作どおり食えない奴だよな。

「ケネス・ギルフォード大尉を」俺は続けて指示した。今回ケネス・ギルフォードには複座式戦略攻撃機ドーンコメット隊を率いてもらうのだ。

「司令、ギルフォード大尉です。」スクリーンに敬礼しているギルフォードが出た。

「司令、何か?」

「うん、先発隊のワルキューレが全機発進後にギルフォード大尉のドーンコメット隊は大きく迂回して天頂付近から攻撃を行ってもらう。」

「は!」「しかし司令、ドーンコメットの半数を残してしかも雷撃装備で待機の機体はどうされるのですか?」

「状況次第で自分が出る!そのために準備してあるのだ」と答えた  
「・・・蒼き流星がわざわざ、出るのですか・・・」ギルフォード



は驚いていた。

「まあ、それも相手の出方次第だけだね。」俺は近づくと戦場をスクリーンで見ながら答えた。

「司令、通信可能エリアまで後400宇宙秒です」

「うむ、通信回線を此方に回せ」「最大戦速でコーラル・シーは戦闘エリアのど真ん中に位置しろ！」メインスクリーンに映る二人の貴族に俺は話し始めた。

「これよりアルフォンス・フォン・ランズベルクが仲裁目的のために中央に進軍する。小官の乗艦コーラル・シーは皇帝陛下より賜った新造艦である。そのために万一、当艦にどちらかもしくは両方からの攻撃で被弾するようなことがあれば、それは皇帝陛下にたいする反逆行為とみなし即時攻撃を開始する。」

「その場合は被害の内容を考慮する事無く、全軍に殲滅戦を指示するものである。」かなり強引な一方的な説明であるが、それだけでなくは目的が果たせない。どちらかをもしくは両方の家を併呑するためには……

俺の乗艦コーラル・シーだけどんどん進んでいく……  
シャフハウゼン家の艦隊とヘルクスハイマー家の艦隊の中央に進み停止した。

それまでの砲撃戦とは打って変わり、静寂が流れているのである。流石のギンター・ノルトとユーリー・クルガンも汗をかいている。両方から一斉射撃を受ければ瞬間的に蒸発してしまう距離である。

俺はわかっていた。恐らく手を出してくるのは……ヘルクスハイ

マー家であることを。

ヘルクスハイマー家艦隊の旗艦では原因の一人であるご子息殿が怒り狂っていた。

「なぜあのようなものの話を受け入れなければならないのか！」参謀格の者が押さえつけながら

「アルフォンス閣下の話は原理原則に則っており、ここで手を出せば間違いなく反逆罪で抹殺されます。しかもアルフォンス貴下の艦隊は非常に強力であるとの話も伺っております！何卒、ご自重を！」

同じころ、我がコーラル・シーにシャフハウゼン家の艦隊から使者が来た。

ワルキューレから降りてきたのは何と、ジークフリード・キルヒアイスであった。

「キルヒアイス中尉、久しぶりですね。」俺はあの暑く長い王宮杯争奪耐久レースを思い出した。

「その節は、本当にありがとうございました。」と深々と頭を下げるキルヒアイス。

おっと、まずは恭順して相手の懐へ入るか・・・定石どおりの展開か・・・次はどう来る？

「本日、伺いましたのは、シャフハウゼン家の艦隊参謀役であるラインハルト・フォン・ミューゼル大尉の伝言をお伝えに参りました。」丁寧に話すキルヒアイス・・・こいつを俺の幕僚に必ず加えてみせる！

「ほう、どのような話でありましょうか？」俺もできるだけ丁寧に

話し返した。

「アルフォンス少佐の御身をわざわざ煩わすことなく、小官の方で解決する所存ですので、どうか今件はお引き取りくださいませうようにとのラインハルト大尉の申し出でございます。」

やはりな・・・この金髪&赤毛コンビは利益ではなく出世のステツプとして今回の騒動を利用しようとしているわけだ・・・こっちはバリバリ利益のためだけだね。

「なるほど、ラインハルト大尉の申し出も大変よくわかります。小官の身を案じてのご意見であるかと思われませう。」と切り出しながら「ただ、小官も盟友でもある、オスロマイヤーフォンシャフハウゼン殿より正式に援助の申し出を受けているの事は事実であるので、役目を全うしようと思っっている。」

「今回は敵味方ではないので、各々感じられるままに、そしてできれば邪魔をすることがないようにしていきたいと思うとラインハルト大尉に伝えていただけませんか？」

お互いの思惑を感じているキルヒアイスは暫く眼を伏せて

「わかりました。少佐のお考えはごもつともであると小官も判断します。それでは我々もアルフォンス少佐の邪魔をしないようにいたしますので。」

「ああ、キルヒアイス中尉・・・」敬礼とともに立ち去ろうとするキルヒアイスを俺は呼び止めてしまった。

「は！何でありますでしょうか？」振り返り俺を見つめるキルヒアイス。

「い、いや、何でも無いです。またお会いしましょう！」

「は！」と敬礼し立ち去るキルヒアイス・・・

「少佐は彼を幕僚に加えるおつもりですね。」ギユンター・ノルトが言った。

「ああ、できれば欲しい人材の一人だからね。未だ貴族の間では金髪の小僧の周りを回っている赤毛の衛星だと言われているが彼は本物だと思う。」

「だから欲しいんだ。本物をさ・・・全てが始まる前にね。」

一方、怒りの収まらないヘルクスハイマー家艦隊の旗艦では、爆発寸前であった。

「こうなったら邪魔立てするほうが悪いのだ。全艦、あのコーラル・シーへ砲撃を開始せよ！」と完全に逆上した、ご子息殿が命令した。「御曹司！それはなりません！」「またも参謀格の者がおさえにかか  
るが

「貴様！私はリッテンハイム家に繋がっている者だぞ！あんなランズベルク家など踏み潰していただくわ！」「構わん！砲撃開始せよ！」

「御曹司！いけません！」ここで必死に止める参謀格のものはラツセル・ウエストブルックという少尉級のものである。（フルネームが出ると言つことは・・・幕僚になっちゃうかも・・・）

「貴様！もうよいわ！警備兵！こ奴は頭がおかしい！病院船に連れ

て行ってしまえ！」彼、ウェストブルックとしてはここが生死の分かれ道であった・・・

ヘルクスハイマー家艦隊の旗艦の主砲が発射され、コーラル・シーへ向かう。

「前方、高熱源体！」「ヘルクスハイマー家艦隊の旗艦から発射された模様！」

俺は心の中でやったぜ！とガッツポーズであった。

発射された主砲の1発がコーラル・シーの第一砲塔付近の装甲版に直撃した。

「全艦！被害状況！」「第一砲塔、異常なし！」慌ただしくオペレーターが叫ぶ！

「これも予定通りですかね」ギョントー・ノルトが言うとユーリー・クルガンは渋い表情で胸の前で十字を切った。

「第一砲塔付近第一装甲版破損。負傷者6名、死亡なし」最終的な被害状況が確認された。

ほんの数秒間、宇宙は凍りついたような沈黙があった・・・

「よし、もういいだろう。ブラスター全弾発射しろ！目標は旗艦のみだ！それでOKだろうからな！」

我がコーラル・シーのブラスター砲塔は全部で6個、一斉にヘルクスハイマー家艦隊旗艦に向けて測的が始まった。ロックオンした砲塔から物凄い光とともにブラスターが発射されていく。

ブラスタアの弾速があまりにも速いので爆発しないで直撃した部分だけがもぎ取られていく。前方部分から順番にもぎ取られて戦闘艦橋に近づいていくブラスタアの着弾を見て

「何故だ！私はリッテンハイム家に繋がっているのだぞ！何故こんな・・・」全部叫びきる前にブラスタアが戦闘艦橋を直撃した。内部の乗員は全員蒸発してしまった。

「ヘルクスハイマー家艦隊から入電」「我に戦闘継続の意思なし、寛大な処置を願う」との内容だった。俺はヘルクスハイマー家艦隊を傘下に収めた。そして進路をヘルクスハイマー家本星に向けた。

感謝の意を表しにオスロマイヤー・フォン・シャフハウゼンが乗艦してきた。

「礼よりも私としても優秀な副官が一人でも多く欲しいのだ、卿の力を貸して欲しい」

「何をお考えなのですか？アルフォンス少佐は、これだけの名声を得ながら未だ何かを欲しておられるのですか？」

「それは貴族のあり方については、考えるところはあるが、今は自由惑星同盟を滅ぼすことにある！」などと心にも無いことを話してしまった。

俺のそばにいればいずれわかる事だから・・・

進路をヘルクスハイマー家本星に向けてから既に18宇宙時間が過ぎ、直接ヘルクスハイマー家に対して降服勧告を行った。一応、財産は保障。だが今後の内政は6割を人々の利益とし、4割を租税と

する。うち2割は福祉、教育関連への投資とする、ランズベルク家モデルを導入した。

残る2割の半分をランズベルク家の安全保障税とした。それくらいで我々は十分なのである。欲しいのは在野の人材であるのだから・

・  
ノイエサンスーシには報告も完了し、正式にヘルクスハイマー家は我がランズベルク家の下部貴族に組み込まれた。これで我がランズベルク家は惑星6個を所有し人口が6億人を突破した。

今回は対自由惑星同盟への作戦ではないので俺や仲間の昇進は無かったが、待望のオスロマイヤー・フォン・シャフハウゼンが少尉として正式に俺の軍門に参加することになった。

まだまだだぜ、どんどん人材も集めて資源を増やして資産を倍増させて、ブラウンシュバイクだの、リッテンハイムだのを叩き潰すのだ。そして最後は皇帝にも・・・

金髪&赤毛コンビが追いつく前に作戦を実行するのだ・・・

何を？って決まっているじゃないか。神々の黄昏作戦だよ・・・

## 第九話：第5次イゼルローン要塞攻略戦

### 第九話：第5次イゼルローン要塞攻略戦

俺は16歳になり、上級士官学校の最上級生に飛び級でなつてしまつた。階級も1ランク上がつて中佐である。

艦隊350隻とワルクューレを400機預かる身となつた。

順調ではあるが・・・例のコンビが金髪&赤毛コンビがいよいよ少佐と大尉になつてきているのである。

俺が歴史を壊しているせいなのか・・・やつらのペースが上がつてきている。せめて5000隻の艦隊を駆使できる立場でないと先を越される可能性がある。

自分が開拓する人材以外に艦隊司令部に優秀な副官を！というリクエストを出したら何とファールレンハイト少佐とアイゼナツハ少佐を付けてくれた！もう金髪&赤毛コンビには上げないもん！

色々搭乘してきたのでここで一度通称アルフォンス軍団の陣容を整理してみよう。

アルフォンス・フォン・ランズベルク

イゼルローン駐留艦隊所属分艦隊司令、上級士官学校生

ベルホルト・フォン・ウインメル少将 アルフォンス分艦隊主席幕

僚、総参謀長

ガザ・パチュリア少佐 戦艦コーラル・シー艦長



アーダベルト・フォン・ファーレンハイト少佐 参謀チーム艦隊運  
行チーム参謀官

エルンスト・フォン・アイゼナツハ少佐 参謀チーム戦略情報チ  
ーム参謀官

ギユンター・ノルト大尉 分艦隊参謀チーム参謀官

リュウ・ウエイ大尉 分艦隊参謀チーム参謀官

ユーリー・クルガン大尉 分艦隊参謀チームAグループ艦隊リーダー

ケネス・ギルフォード大尉 第139高速機動空戦隊副指揮官

アルマリック・アスバール大尉 第139高速機動空戦隊指揮官

ラッセル・ウエストブルック少尉 分艦隊参謀チームBグループ艦  
隊リーダー

オスロマイヤー・フォン・シャフハウゼン少尉 参謀チーム参謀官

俺は今回行動派よりも来るべき元帥府を開くときに中心となる人物、  
または今後の指揮する艦隊なり空戦隊なりのリーダーを広く求めて  
いるのである。

ベルホルト・フォン・ウインメル少将は総指揮官の俺よりも上位階  
級だが、本人の願いを受けて俺の許で仕事をしてもらうことになっ  
た。

優秀な人材を集めることに急いでいる理由はもう一つある。

それは金髪&赤毛コンビに優秀な人材を与えないこと、そしてでき  
ればキルヒアイスも俺の幕僚に加えたいと思う。

近頃、イゼルローン回廊内を哨戒しているとミノフスキー粒子のせ  
いで殆ど聞き取れはしないが、通信を頻繁に行っているようなジャ  
ミングが格段に増えてきた。

当然、イゼルローン要塞司令部に報告をしてあり、注意深く観測を

行っていたが・・・

ここ、この状況にあたり近日中に自由惑星同盟によるイゼルローン要塞の攻略が近いことを連想させるに至った。

ちなみにこれから起ころうとしている、この第5次イゼルローン攻略戦は宇宙暦792年/帝国暦483年5月に行われる。

索敵データ送信用衛星が20機通信が途絶した・・・

これは誰かが意図的に破壊するしか手が無いわけで、銀河帝国軍がするわけが無いとなれば、自由惑星同盟がなるべく知られたくない情報を隠すために行ったわけだ・・・

理由は簡単である。

大勢力で出てきているから知られたくないのだ。

現在のイゼルローン駐留艦隊司令官はヴァルテンベルク大将であり、貴下の分艦隊である我々は索敵業務をさせられているのである。

戦闘開始は5月6日。

同盟軍の兵力は艦艇約50000隻、総司令官はシドニー・シトレ大将であることが判明。同時にあのフェザーン航空宇宙局からの情報も同じ内容だった。

帝国軍はイゼルローン要塞とその駐留艦隊約13000隻。

要塞司令官クライスト大将は駐留艦隊に出撃を命じた。

俺の分艦隊はヘルムート・レンネンキャンプ少将の艦隊に組み入れら

れた。隣の分艦隊にはラインハルト・フォン・ミューゼル少佐の乗艦エルムラント？がいた。その戦闘艦橋で……

「こいつは驚いた、あのランズベルク家のヤング・エグゼクティブが隣にいるぞ。しかも分艦隊を率いているとはな。」

「今まで、遅れを取っていたが、そうは行かぬぞ。この戦闘で一気に追いついてやる。」「たかが大貴族の次男坊じゃないか」「このときにラインハルトは気がつかなかったのである。」

金髪の小僧と蔑んでいる貴族達と基本的には同じ理由でアルフォンスを貶している事を……

「ラインハルト様、油断は禁物でございます。あのアルフォンス中佐、どこか計り知れぬ深さを持っている気がします。」「キルヒアイスは警告する。」

「何だとキルヒアイス、計り知れぬ深さではなく、今までに無く変わった性格の御仁だから、こちらの尺度も鈍ると言うわけだ。恐れるに足りんわ」先を常に越されている苛立ちからか、冷静でいられないようである。

「お言葉ですが、ラインハルト様、既にアルフォンス中佐の貴下にはずいぶん優秀な幕僚が数多く集まっているとの情報もあります。お気をつけ下さいませ。」「キルヒアイスは続ける。」

「ふむ、ギユンター・ノルトにアルマリック・アスバールAAAか……出所不明な奴らばかりを集めたところが胡散臭いのだ。」「ラインハルトはため息をつ

いた・・・

アルフォンスの幕僚の中にはラインハルトが将来的に引き抜きたいと考えていた人物が幕僚内に参画しているのだ。

「貴族のご子息の仲でも特に優秀な方を引き入れられております。平民出身、貴族の子息、こだわり無き人材登用は評判を呼び題しているのも事実です。」キルヒアイスは警告を続ける。

「コーション・ソナーに感!」「コーション・イエロー! 同盟軍艦隊です! 右天頂方向!」

エルムラント?の管制官が叫ぶ!

「見せてもらおうか、上級士官学校のヤング・エグゼクティブの力とやらを・・・」ラインハルトはコーラル・シー率いる分艦隊の方向を見ながらつぶやく・・・黙ってかすかに頷くキルヒアイス。

同じくしてコーラル・シー戦闘艦橋・・・

「砲撃のタイミングは味方の開始と同時に進め。狙いはどこでも構わんが、火力集中は必須である! 10分経過後に戦線を後退するのだ。判ったな!」

歴史が思ったよりも早く進みだしている・・・よって戦闘時間も前倒しで考えるべきだろう。

ここはさっさと逃げるのだ。

何しろ3分の1の味方艦艇を吹き飛ばすことになるのだから・・・

メインスクリーンの右上の部分から徐々に同盟軍艦艇の艦影が現さ

れてくる。

「凄い数だ・・・」大規模な艦隊戦はこれが初めてとなるので少し膝が震えた。

ヴァルテンベルク大將は樂觀視していた。どうせいつものとおりになる。その気になれば奴らはトール・ハンマーの射程内には入って来れないのだから・・・

シドニー・シトレ元帥は今回の攻略戦でイゼルローン要塞の占領、もしくはトール・ハンマーの無力化を目指していた。

「今回はやってやるぞ・・・見ておれよ、銀河帝国軍め・・・」

お互いにはほぼ同時に攻撃開始をした。

「攻撃開始！ファイヤ」

「今だ！フェイエル！」

一斉に宇宙に飛び出す数千の光の束が弾ける！数を頼りに前進してくる同盟軍に対し、紡錘陣形で対抗する帝国軍艦隊。

暫く一進一退の状況であったが、同盟軍艦隊の左翼、帝国側の右部分の艦隊が急に突出してきた。

数に差があるので受ける帝国側がにわかに引き出した。

「まずい！」ほぼ同時に俺とラインハルトが叫んだ！引き出した帝国艦隊を見て、一気に左翼を奪い半包囲を完成させようとしてきた同盟軍。

すでに包囲しかかっている部分の同盟軍の集中砲火に帝国軍艦隊は

次々と光の玉となり爆沈していくのである。

「何をしているのだ右舷の艦隊は。」「耐え時を知らぬのか！」「ラインハルトは叫ぶ！乗艦である巡航艦1隻では大勢に影響を与えることは難しい。」

しかし我が分艦隊は350隻だ1点集中砲火を繰り返し、大型戦艦ばかりを狙い撃ちしているのだ。

時間が経つにつれ、同盟軍もこの攻撃による被害を無視できなくなってきた。

我々の右舷に殺到するあまり、我々の前を横から突つ切るしかなく、横つ腹に集中砲火を浴びてしまうのだ、苦痛にのた打ち回るように苦悶の動きの後、光の玉に変わってしまう戦艦を何隻爆沈させたか・

ラインハルトのエルムラント？も巡航艦を撃沈させた。ようやく戦果をあげたのである。

「ランズベルク家のヤング・エグゼクティブに遅れをとっているとはな・・・考えもしなかった」

「アルフォンス中佐は早くから人材の発掘に注力したと見られ、しかも地道に信頼関係を築き上げていたようです。」「キルヒアイスは付け加える

「何だと。まるで私が人材の発掘や育成を怠っているようではないか？え？キルヒアイス」と反論する。

「いえ、ただ、アルフォンス中佐の人材登用の先見の眼を注意されたほうが良いのではと・・・」

「愚問だな。キルヒアイス。先見の眼など必要ないのだ。伸びる奴は伸びるし、馬鹿は馬鹿だ」

(・・・ああ、ラインハルト様、どうか先行しているアルフォンス中佐のことなど構いませんな。ご自分の信じる道を走り抜けていけば良いのに・・・一番影響を受けてしまわれているのか・・・)キルヒアイスの中にほんの少し、冷たい氷の欠片が吹き付けた。

戦線の全域で同盟軍が数の上で優位に立ち始めた。こうなると帝国軍はイゼルローン要塞に戻りつつ、必殺のトール・ハンマーに期待するのであるが・・・

今回はそうならない事は判っているので、早々に撤収を考えるのである。

「AA大尉を！」おれは管制官に伝える。

「アルマリック・アスヴァール大尉出ました！」メインスクリーンにAAが映る。

「は！何か！」敬礼のままAAは話す。

「もうじき撤収する。そこでワルキューレ戦隊で奇襲をかけて撤収のための時間を稼いでくれ」

「了解いたしました！AA発進します！」敬礼のままスクリーンから消えた。

「高速機動空戦隊の発艦準備急げ！」俺は管制官に命令した。

コーラル・シーのブラスターを直撃されて持ちこたえることのできる艦艇は存在せず、砲撃するたびに同盟軍の艦艇が光の玉となる。

これがもし改良されて短時間での連続発射が可能であれば同盟など一ひねりだな・・・

「ひねった後はどうするのだ？」独り言であったが・・・

「は！何でしょうか」ギョンター・ノルトが不思議な表情で聞き返してきた。

戦闘艦橋からは次々と発艦するワルキューレの姿が見える。

AAはきつとうまくやるだろう。後はトール・ハンマーが発射される前に戦線を離脱することだ。

エルムラント？の戦闘艦橋でラインハルトが叫ぶ

「味方は何をしているのだ！まともに対抗できているのは、あのラズベルク家の艦隊だけだぞ！」

「後退するにも敵との距離が近すぎるではないか！」・・・！その瞬間ラインハルトは全てを悟った。

「そうか！敵の本当の目的がわかった！キルヒアイス！何としてもこの宙域を離脱せよ！」

「奴らの狙いは最初からトール・ハンマーだったのだ！接近戦で味



方に近づいてトール・ハンマーを封じ込めるつもりなのだ！何故、此れしきの事がわからなかったのだ！」

（・・・ラインハルト様、アルフォンス中佐の事に気を取られすぎたのでございましょう・・・そんなことでは、この先、ゴールデンバウム王朝打倒など果たせませんぞ・・・）キルヒアイスは悩んだ・・・

（では、もし、ラインハルト様がゴールデンバウム王朝を討ち果たせなかったら・・・お前はどつするのだ？キルヒアイスよ？）心の問いかけに苦しむキルヒアイスであった。

（そのときは・・・アルフォンス殿に相談することになるのか・・・）

AAのワルキューレ空戦隊は一匹の巨象に群がる殺人蟻のように集団で攻撃していた。

天頂付近から急降下で対艦爆弾を発射して、水平飛行に移った瞬間に戦闘艦橋に向けて雷撃を行うのである。

至近距離の雷撃は戦闘艦橋を一瞬で粉碎し、コントロール不能にさせてから爆沈させる戦法である。これで出撃後数分で4隻の艦艇を爆沈させているのである。

暴れまわっているAAを見つめながら、俺は・・・

「潮時だ！ノルト大尉、AAを引き上げさせる。全艦後方に撤収するぞ！」焦りだしている俺はラインハルトのエルムラント？に通信をかけた。

ノイズは思ったほど酷くなく、話はできそうだ。

「ラインハルト少佐、我々は後方に引き上げる準備が出来次第、この宙域を放棄するが、卿はどうされるのか」

「アルフォンス中佐のご自慢の空戦隊のおかげで転進する時間が稼げそうだ、こちらも合わせて後退する。」そうか、ではまたイゼルローン要塞で・・・と通信は終わった。

イゼルローン駐留艦隊司令のヴァルテンベルク大將はここに至り、ようやく半包囲網を完成しつつある同盟軍艦隊との戦闘を収束させるべく、撤退命令を出した。

「全艦、イゼルローン要塞へ戻る！まずはトール・ハンマーの射撃軸線上に展開しろ。」

敵は追ってはこないはずだから・・・」どうせ、やつらはトール・ハンマーの射程内には入ってこないのさ、まさにいつもの通りに終わるのだ。

同盟軍艦隊司令のシドニー・シトレは司令官席を立ち上がり、

「来たぞ！このタイミングを逃すな！全艦全速！平行追撃戦に移る！

幕僚チームの参謀官として参加しているヤン・ウェンリーはこの作戦を聞いたときに思っていた。

一見、斬新で成功率の高い作戦だが一つだけ命題を欠いている。

それは・・・混戦状態でイゼルローン要塞に近づいているときに『敵がトール・ハンマーを味方に対して絶対に使わない』保証が無い

のである。

考え方として、要塞を守るのか、味方を最後まで信じるのか・・・と問われれば・・・

「さてと、どっちになるのかねえ・・・」ヤン・ウエンリーは後ろに控えるアッテンボローに呟いて見せた。

アッテンボローは首をすくめて「わかりませんよ」と答えた。

「ただ、これで駄目なら・・・つまり味方を撃つことを躊躇わないとすると・・・正直、外部からの攻撃ではあのイゼルローン要塞は落せないことになってしまふな・・・」ヤン・ウエンリーは考える。そうだったら、自分ならどうするか・・・

「同盟軍艦隊、急速接近します！」管制官の報告にヴァルテンベルク大將は驚いた！

「奴ら！何のつもりか！トール・ハンマーが怖くないのか！」ヴァルテンベルクは混乱した。

そのときになり、ようやく敵の狙いは平行追撃戦でイゼルローンに近づき、トール・ハンマーを無力化して攻め込む作戦だったとは！混乱はイゼルローン要塞内部にも起こっていた。

「何だ！敵の艦隊と入り乱れているぞ！」「しかもそのままこちらに近づいてくる！」

要塞司令官クライスト大将は混乱している。

このまま敵味方入り乱れてイゼルローンに近づかれると港に敵艦隊の侵入を許してしまうことになる。

しかし、敵を遠ざけるにしてもトール・ハンマーを使えば味方も大損害を受けてしまう……

「ええい！ヴァルテンベルクの奴め！しくじりおつて！」「要塞内部に敵を入れるわけにはいかない！対空防御の準備をしろ！」と命令するのが精一杯であった。

……どうしたらよいのか……要塞を守るためにはこれ以上の同盟軍の接近を許すわけには行かない。しかしそのためにはトール・ハンマーを使うしか方法が無い。使えば味方のだ真ん中に打ち込むことになる……

「どうすれば……」苦悩するクライスト、管制官が「味方の艦隊は敵を引き連れたままイエローゾーン突破！」「レッドゾーンまであと400宇宙秒！」レッドゾーンに入ればトール・ハンマーが照射できない。

もうじきトール・ハンマーを発射するかな……俺は思い切り回廊の外縁部分に沿う形で進んでいるので仮にトール・ハンマーを発射されても問題ないが……やはり汗をかいている。

艦内はこのままではまずいし、事態の打開にはトール・ハンマーしかない。と暗黙の理解をしだしている……みんな沈黙したままだ。

「……仕方ない！艦隊中央部にトール・ハンマーを発射せよ！」話した直後からクライストは司令官席を後にした。

トール・ハンマーの制御室は要塞司令官の命令を忠実に守った。

それは最悪の形で行われた。

「し、司令！イゼルローンの表面に光の軌道が……」副官が呻いた。

「何だと！おのれ、クライストめ！我々を見殺しにするのか！」  
全艦離脱！急げ！」

公式記録では、これがイゼルロン駐留艦隊司令ヴァルテンベルク大将の最後の会話となっている。

20秒後にトール・ハンマーの第一射が行われた。

艦隊司令ヴァルテンベルク大将の乗艦もろとも数百隻の艦艇が消滅、爆沈した……それは凄惨な地獄絵図であった……常軌を逸した艦艇がやけくそに発砲する、その一方でエンジンを臨界まで回して脱出を図ろうとして僚艦に体当たりして2隻とも爆沈したりする光景があちらこちらで起こっている。

第一射から2分後に第二射が行われた。再び宇宙空間に光の玉の列が繋がった。

「仕方ない……全艦撤収準備だ！まさか本当に味方に向けて撃つとは……」

シドニー・シトレが撤退命令を出した。急速に後退する同盟軍に対してトール・ハンマーの第三射が行われた。三度、光の玉が列を成

して広がった・・・

同盟軍も大混乱であったのだ・・・

今回の戦いで失った艦艇は同盟軍5500隻、帝国軍4800隻・・・  
・帝国軍の殆どはトール・ハンマーの攻撃で失った艦艇である。

さらにイゼルローン駐留艦隊司令官のヴァルテンベルク大将が戦死。

その中で味方の脱出経路を作り出しながらの奮戦を評価され、俺は大佐に昇進した。

まだまだ急がなくては！奴より先に駆け抜けるのだ。俺には時間が無いのだ・・・

## 第十話：七色星団連合同盟

第十話：七色星団連合同盟（Association of seven colors of stellar clusters alliance）

大佐に昇進した俺は分艦隊1200隻とワルキューレ900機を預かる事になった。

もう艦隊運用も一人では見られない数になってしまったので、今回300隻の分艦隊にわけそれぞれを分艦隊Aグループをファーレンハイト中佐にBグループをアイゼナツハ中佐にグループCをケネス・ギルフォード少佐（一気に今回昇進）指揮させることにした。

ワルキューレ空戦隊はそのままAAに任せることになる。新たに空戦隊のリーダーにはバウムガルト・フォン・レッケンドルフ中尉、エリオット・バーゲンザイル中尉、ウエルナー・アルトリンゲン中尉が配属になった・・・どれも原作登場済みである。いいね！さらに俺の艦隊の参謀グループにカール・グスタフ・ケンプ少佐がやってきた！

またまたラインハルト幕僚チームのメンバーを引つ張れた！渡さなにもんね！人事発表の後に我がランズベルク家の経済チーム顧問のダリアス・ヴェンツェル少尉と軍事チーム顧問のボンデクスト・カールマン大尉から現在の状況報告を聞いた。

現在有人惑星を現在5つ所有しており、俺の行った施策が当たり、空前の好景気な状況である。さらにヘルクスハイマー家を所有しているのも財政的にも相当余裕ができているとのことである。もはやブラウンシュバイク家やリッテンハイム家に並ぶ位置まで申し上が

ってきた。

しかし急拡大した部分は未だ未報告だから、周りには判らないように隠してある。勢力をガンガン拡大して銀河帝国NO・1の巨大貴族を目指すのだ。これからも下級貴族を吸収していく戦略に変更はない。

一方ランズベルク家の私設軍団だが、カルマーンの報告によると現在艦艇18000隻でワルキューレを1500機保有していて、今後はパイロットの育成が急務であるとのことである。急いで40000隻以上にしないと間に合わなくなる・・・

士官ルームでAAと打ち合わせを行っているトリユウ・ウェイ、ケネス・ギルフォードが入ってきた。コーヒーのマグカップを机に置きながら、初めてみんなに会ったときの話を思い出していた。

我がランズベルク家領内は帝都オーデインからはかなり離れた辺境に位置しており、後に出てくるクロプシュツク家領内やブラウンシュバイク家の領内のベスターラントに近い場所にある。

実は新たに開発した惑星の後方に更なる開拓を始めようとして、隣接星系の民族と接触をしてみたのである。銀河帝国でもなく自由惑星同盟でもない第三の勢力の名前は7色星団連合同盟という名前である。

それぞれがアキイロニア、プリンス・ハラルド、タデメツカ、クンロン、ブエノス・ゾンデ、ニューキャメロット、サンダーラーとい名の惑星国家連合体である。

既に我がランズベルク家はアキイロニア、プリンス、ハラルド、タ



デメツカ、ニューキヤメロットの4つの惑星国家と交流を始めており、ほんの少しではあるが人の往来も始まっていた。

この7色星団連合同盟は別星系の惑星国家間で戦闘状態にあり、統一軍を結成した直後にAAを始めとした司令官たちが軍上層部の汚職と無能ぶりを暴露してしまい、逆に国家反逆罪で死刑になりかけて脱出したところをランズベルク家の艦隊が保護したのである。

俺は銀河帝国と自由惑星同盟をこの手に収めたら次はこの7色星団連合同盟に進出してやるぜ！って決めたのだ。そしてその抗争相手も飲み込んでやろうと思っっているのである。その上で、いよいよ銀河中心部へ殴りこみを駆けてやろうと思っっているのである。

もちろん我が陣営にいる元7色星団連合同盟の将兵は、俺が進出することを了解しているので問題ない。保護し登用した士官連中は物凄く有能ではあるが、何しろ個性が強いのでやはり原作を熟知している俺がマネジメントして行く事になっている。

「あの時は・・・危なかったね。」「お互いに何者だかわからないとつのは混乱するんだね」  
と当時の俺の感想である。

「最初は保護された国家はどこなんだ？と艦内は騒然としてましたな・・・」リュウ・ウェイがつぶやく・・・

「銀河帝国なんて聞いたことが無かったものだから」「辺境の田舎惑星国家だと思っていた」AAとギルフォードも続く。

現在の銀河帝国及び自由惑星同盟の科学力軍事力をこの7色星団連合同盟と比較するとほぼほぼ同レベルである。軍事に関しては我々

のほうが少し優位かな？とも感じる。ただ、7色星団連合同盟の優れているところは惑星開発力である。

我々の半分のスピードで居住可能なレベルまで持っていけるのである。これを採用し更に改良したものを我がランズベルク家は持っている。それで最近では惑星開拓が順調なのである。どんどん開拓して人口を増やして巨大貴族になるのだ。

それから現在我がランズベルク家は要塞を建設し始めている。イゼルローン要塞級のもはまだ作れないが収容艦艇数4000隻のクルスの要塞を5つ建設開始した。この要塞は単独でも使用できるが、5つの輪にしての運用も可能であり、5つの要塞から集約したハイドロメガ粒子砲はイゼルローン要塞のトール・ハンマー以上の破壊力を発揮できる予定である。

この連結要塞は通称「デス・ネックレス」と呼ばれている。完成し実戦配備まで2年弱かかる予定である。

イゼルローン要塞駐留艦隊の新しい司令官のゼークト大将から俺とウィンメル少将に出頭命令があり、要塞駐留艦隊司令部出頭した。何事か？と思っただが、本日イゼルローン回廊同盟方面でパトロール艦隊が哨戒中に同盟軍艦隊と接触し交戦状態に入ったがすぐにお互いが撤退したので大事には至らなかった。

しかしパトロール艦隊の中の分艦隊の一つが命令違反を犯し、撤退命令中に敵艦隊に突撃を開始し最悪、撤退出来なくなりそうな場面があった。

帰等後、処分しようとしたが反論されパトロール艦隊司令と口論になりつかみ掛かって収監されている中佐をこっちの分艦隊で引き取

るようにとの命令であった。最初からこのゼークト大将は俺のことが気に入らないみたいな感じだった。

厄介払いをこっちに向けたな！

連れて来られた士官はオレンジ色の髪の毛が乱れていた。きっとこの体格だと数人がかりで取り押さえたのだろう。

「中佐、名は？」俺は尋ねた。

「は！フリッツ・ヨーゼフ・ビッテンフェルトであります！」

おお！黒騎士槍騎兵じゃないか！またも将来のラインハルトの幕僚をゲットしたぜ！

「では、ビッテンフェルト中佐、今後は我々の分艦隊の指揮下に入ってもらおうぞ！」

「は！」

馬鹿ゼークトめ、厄介払いをしたつもりだろうが、こっちは大正解だぜ！

今後の展開を考えると黒騎士槍騎兵のような戦力が欲しかったのさ。

残るはキルヒアイス、ミッターマイヤー、ロイエンタール、ミュラーなどを幕僚に加えるだけである。しかも俺はヤン・ウエンリーをも加えるつもりでいる。これも原作を熟知している強みであろうか

ラインハルトはどうしようかな・・・幕僚に加わることを良しとするだろうか・・・

それともやはりいつか決着をつける時が来るのだろうか・・・

翌日、ゼークト大将から全艦へ命令が下された。

ヴァンフリート星域にて同盟軍艦隊を撃滅せよとの命令が下された。

## 第十一話：ヴァンフリート星域の会戦

### 第十一話：ヴァンフリート星域の会戦

「司令、電磁機雷散布終了です。」

メインスクリーンを見つめていたファイフェル中佐は第5艦隊司令官ビュコック大将に報告をした。

「うむ、準備はできたというわけか・・・」ビュコックは呟く。

「ウランフ、ボロディン、両提督にも報告を送るように」管制官に命令した。

イゼルローン回廊の同盟側出口付近に位置する通称ヴァンフリート星域に同盟軍は第5、第6、第10の3艦隊総数46000隻を展開させた。

「さて、どつくるかな・・・」ビュコックはメインスクリーンを見ながら呟く。

統合作戦本部の命令どおりにイゼルローン回廊からの帝国軍艦隊に対して前方をふさぐ形で機雷をまいた。これで帝国軍は機雷を排除しながらの進軍となるはずである。当然スピードは遅くなるし全部の機雷を除去することは不可能に近いので、何箇所かの穴を開けた形で進軍してくると思われる。

当然そこを出会い頭で各個撃破仕掛ければいいのであるが・・・そんな事は帝国軍も百も承知であろうから・・・

イゼルローン要塞から俺達は発進したが、今回の帝国軍艦隊総司令

官はグリーンメルスハウゼン中将である。総数は13000隻で出撃し、俺も金髪&赤毛コンビも組み込まれていたのである。

しかし帝国軍のイゼルローン要塞不敗神話はかなり根強いものなんだなあ・・・いつも同盟軍よりも戦力が少なくても平気で出撃するのだから。

先発艦隊に組み込まれた俺は機雷原をどうやって突破するのかを考えていた。指向性ゼツフル粒子を使うにも艦隊が通過できる穴をあけ切ることは難しい・・・では、どうするか、俺には考えはあるのだが・・・

「先発艦隊の中にあのヤング・エグゼクティブがいるようだな、キルヒアイス！」

艦長シートから振り向いてラインハルトは話す。

「はい、アルフォンス大佐の艦隊がほぼ最前線で展開しております。

「キルヒアイスは答える。

「今回はどうやるのか高みの見物といこうか。」

「それにしても同盟軍の奴らもわざわざ負けに来たわけではないだろうからな。」

「ヤング・エグゼクティブのアルフォンス大佐殿の手腕、拝見しよう。」

色々な思惑の中で、その行動が注目される状態というのは、くすぐったいものである。上席者でありながら、わざわざ俺の主席幕僚でいることを望んでくれているウインメル少将が

「考えはあるのですよね？」と聞いてきたので

「はあ、まあ、なんとかなるのかなって感じですが・・・」ちよっと口の聞き方とかやりにくいなあ・・・バリバリへりくだる必要もな

いとは思っているが一応は年上、上席だし・・・

「今回、同盟軍は布陣した前面に機雷を散布しましたが、それは返って自分達の行動範囲を狭めているだけなのではないか？と考えています」丁寧の説明しているつもり。

横でギョントー・ノルトが笑っている・・・

「返って、行動を狭める・・・なるほど、それでどうなさるおつもりですか？」少し好奇心を刺激してしまったようだ。

「機雷源を突破する方法を奴らは艦砲射撃によって突破口を開き、艦隊が突撃してくると判断して、そこを狙い撃つ考えなのでしょう。」

「お互いが常識人ならそれでいいと思います。」と付け加えた俺。

「そこで自分は衛星ミサイルを使って突破口を開き、通過した衛星ミサイルの背後に艦隊を隠しておいて一気に突撃を試みようと思っているんですが・・・」

「なるほど、突破口を小惑星にやらせようと言うことですね。」「うなずきながらウインメルは話した。

「突破した後にはワルキューレとミサイル艦を中心にした部隊を滑り込ませ、衛星ミサイル通過によってできたスペースをpushさえてしまえば・・・」

「逆に半包囲が完成して優位に立てる・・・と」ウインメルは感心しているようであった。

「自分たちが撒いた機雷源に後方を遮断されるわけですから、我々は力に任せて押し出せば良い」と俺は説明した。

この戦はそれほど戦略的に重要な位置を占めていない。それならば、被害も最小限に食い止めたいと思う。重要な作戦はまだまだこれからなのだから・・・

「AAを呼んで！」俺は管制官に指示した。

「AA中佐出ました！」メインスクリーンにアルマリック・アスヴアール中佐が出た。

「司令、何か！」敬礼のまま、AAはたずねてきた。

「ワルキューレ全機、爆装オペレーションを変更して雷撃戦モードにしてくれ」

「魚雷装備ですか」AAは続けた。

「そうだ。今回は対艦戦闘が中心になると思うから、大型魚雷を装填してほしい」

「了解であります。では！」敬礼をしてAAはスクリーンから消えた。

「私のブルー・ドラゴンも準備！」おれは自分の愛機を告げた。

「は、出られるのですか？」ギンター・ノルトが言う。

「今回は激しい艦隊戦は少ないかもしれないので点数稼ぎにぞ。」  
「一緒に行く？」



真つ青になつてギョンター・ノルト中佐は

「滅相も無い。恐れ多すぎて・・・またいずれお願いいたします。」

一瞬戦闘艦橋内が爆笑に包まれた。まあ、こんなリラックスもありかな。

「衛星ミサイル50発、始動準備完了です。」管制官が報告してきた。

俺の艦隊の前面に50個のラムエンジンつきの小惑星が並んだ・・・一斉に発射したら機雷が全部無くなるんじゃないの？

「ヤング・エグゼクティブの奴、またあの岩の塊を使うつもりらしいぞ。キルヒアイス」

ラインハルトは冷笑ぎみにキルヒアイスに話す。

「味方の被害を最小限に抑えて戦う作戦なのでしょう。」  
「キルヒアイスは答えた・・・味方の被害を抑えるという考え方は原理原則として正しいと思う。しかしこの方はどう、感じておられるのか。」

「ラインハルト様ならこの作戦はどう思われますか。」  
「キルヒアイスはほんの数ミクロンの疑念の粒子を塗しながら質問した。」

「岩で大穴を明けすぎてしまえば、我々も敵も行動の自由が手に入る。メリットとデメリットが半々であるので私は使わない手だな。」

さらに付け加えると

「指向性ゼツフル粒子で数箇所トンネルを掘り、一斉に突入させ

る・・・」

ラインハルトは自論を展開した。

「衛星ミサイルで突破口を開ければ我々の被害はありませんが・・・  
」キルヒアイスは反論する。

「それこそがこの作戦の甘いところなのだ。キルヒアイス。機雷群を突破した衛星ミサイルが絶対に同盟軍艦艇にぶつかると言う保証は無い。恐らく敵もコースをシュミレートして避けてしまっだろう。」  
「ラインハルトは続ける。

「それは一時的に時間を稼ぐだけの話であり、敵艦隊の宙域に突入するときは少なからず被害はでてしまう。その数を最低限と言うのだ。」

キルヒアイスは恐れた。

もし、何か考えもつかない作戦をあのアルフオンスが考えていたら・・・いつも先手を読んでいような、まるで最初から展開がわかっているような行動をとる方だから・・・

「年下の後輩でしかも貴族の次男と言う甘えられた環境で育ったアルフオンスに抜かれてラインハルト様の立場もわからなくはないが・・・」

もし、本当の本物で、しかも我々と同じ考えを持っているとしたら、ゴールデンバウム王朝をひっくり返すつもりでいるのなら・・・どうする？キルヒアイスよ・・・自問してみたが、何も考えられなくなるのである。

「思考停止か・・・情け無い」自分に少し腹が立つのである。あの、

ラインハルト様が協調など考えもしないだろうからな・・・

「アスヴァール中佐のワルキューレ戦隊、全機発進完了しました。衛星ミサイルの後方に展開中。ミサイル艦300隻も配置につきました。準備完了です。」  
管制官が緊張した声で報告してきた。

俺の頭の中を宇宙戦艦ヤマトの戦闘シーンの音楽が流れる・・・いつもこんな感じだ。

「よし衛星ミサイル全弾発射！同時にワルキューレとミサイル艦は突撃せよ！」  
おれは命令した。

次々とラムエンジンから赤い炎が吐き出され、やがて青白い光に変わっていく。臨界点に達したのだ。小さいもので500メートルくらい、大きいものになると数キロのサイズの小惑星なので動きはゆっくりだがスピードは徐々に亜光速まで上がってくる。

その後ろにぴつたりとワルキューレ戦隊とミサイル艦が隠れていて、至近距離の戦闘は実体弾であるミサイルや宇宙魚雷が有効なのである。

衛星ミサイルの小惑星の先頭部分が青白い光で発行し始めた。亜光速に達したのだ。本体の数十倍の大きさの衝撃波を出しながら突き進み、ついに機雷群に突入した。

物凄い轟音と閃光が連続して立ち昇り、機雷の連鎖爆発が起こった。俺の放った衛星ミサイルは全く影響なく突き進み誘爆を繰り返しながら同盟軍艦隊に突き刺さった。

機雷に接触し誘爆したおかげで恐らく同盟軍のはじき出したシユミ  
レート結果に誤差が出ているのである。次々と同盟軍艦艇が爆沈  
していく。

「見る度に思うが、つくづく戦争はより安いコストで相手を殺すか  
にかかっているような気がする。衛星ミサイルにやられる同盟軍は  
さぞ、キルレシオが高いんだろうなあ・・・」

しかも衛星ミサイルが通過した瞬間に背後に隠れていたワルキュー  
レとミサイル艦が同盟軍のレーダーに捕捉されるのである。

「敵の隕石ミサイル（同盟軍では、こう呼ばれている。）の後方に  
敵のワルキューレと小型艦多数！」

「何だと！」「全艦近距離射撃モードに切り替える！」ビュコック  
は叫んだ！

しまった。ぬかってしまったわ。貴族の鈍らと馬鹿にしていたが、  
しかし敵にもやる奴がいるの・・・

「司令！至近距離射撃モードへの切り替え、1分40秒かかります  
！」管制官の報告は悲鳴に近い叫び声だった。

「うーむ。それではかなりの数の艦艇が被害をうけることになるで  
はないか！」

「ウランフ、ボロディン両提督は！」ビュコックがメインスクリー  
ンを睨む。

すぐに両提督が写った。

「どうじゃな、そちらは対応はできそうか？」ビュコックが尋ねる。

「こちらは重装甲の戦艦を前面に押し出しているので、対空防御は

無理だ。「ウランフは答える。」

「むっ、ボロディン提督は！」

「こちらも隕石ミサイルで多数被害を受けており、迅速な対応ができない！」

衛星ミサイルの通過した後に空間が出来ていて、そこに帝国軍ミサイル艦が正面から展開できて、しかも前方には真横を向いている同盟軍艦隊が横たわっているのだ。

口笛を吹いたAAは

「いくぞ！やりたい放題だ！ミンチサンド（袋叩き）開始だ！」

ワルキューレ空戦隊は一齐に宇宙魚雷を発射し始めた。敵はどういうわけか、全く攻撃してこないのだ・・・ミサイル艦隊も対艦ミサイルを連続発射し始めた。反撃がないので一方的に撃ちまくり状態である。

ワルキューレの宇宙魚雷や対艦ミサイルをもろに真横に受けて真っ二つに裂けながら爆沈する艦や、裂けた片方の船体が衝突して巻き添えの爆沈をする艦があちらこちらに発生して同盟軍艦隊は大パニックに陥った。

ワルキューレはもちろん、ミサイル艦の対艦ミサイルポッドがからになるまで撃ちまくった後にようやく対空防御システムが作動し始めた。

すでに数機のワルキューレが対空レーザーの餌食になった。

「祭りは終わった！帰艦する！」これまた3隻の巡航艦を沈めたA

Aが命令する。

「少し長くやりすぎたか・・・」コーション・センサーに黄色い点が大挙して映し出された。同盟軍のスパルタニアン空戦隊である。

そのときに聞き取れるギリギリの音声で援軍が到来したことが聞き取れた

「誰だ？援軍？」AAは方角を見た・・・コーション・センサーが機体を割り出した。

「ブルー・ドラグーン？青き流星か！」

退却するワルキューレ戦隊とすれ違いにスパルタニアンに向かっていくワルキューレの先頭はミッドナイトブルーの機体のブルー・ドラグーン率いる援護部隊であった。

追いかける一方であると考えていたスパルタニアン戦隊は出鼻をくじかれた。通常の3倍のスピードを誇る機体は正面に捕らえたと思つた瞬間真後ろからオートギャトリングガンを撃ち込まれているのである。たちまちスパルタニアン戦隊が光の玉に変わっていく。

ここでもまた同盟軍はパニックに陥つた。対空ミサイルをロックしないで発射してしまう機体が多く次々と味方のスパルタニアンを撃ち落してしまった。

「何をやっておるのか！」ビュコックは怒鳴つた！

「味方のミサイルでやられるなど、無駄死にもいいとこだ！」「役に立たないのなら撤収させろ！」

「敵の援軍と混戦状態に入っております。戦闘宙域からの離脱は至難の業かと・・・」副官のファイフェル中佐が答える。

俺はブルー・ドラグーンを駆り、スパルタニアンを撃ち落しながら、重装甲戦艦を見つけた。まだ宇宙魚雷は使っていなかったので、早速ロックオンして6発全段発射した。発射の後に急旋回して離脱した後方で何発か宇宙魚雷が装甲の薄い部分を貫通していた。ゆっくりと二つに折れ曲がる船体、次の瞬間巨大な光の球が膨れ上がる。轟沈だ。

一方、ウランフとポロディンの艦隊は、混乱に乗じて機雷源を突破してきた帝国軍の先発艦隊に集中砲火を浴びている状況だった。次々と衛星ミサイルの空けた巨大空間を帝国軍の艦隊が突破してきているのである。

「3倍！3倍だぞ！我々は優位に戦いを進めるはずだったのに」ポロディンは叫ぶ！

帝国軍先発艦隊は徐々に右側に移動してきており、押されるように同盟軍艦が左側に移動する。左側とは、自分達が撒いた機雷源である。

あちらこちらで電磁宇宙機雷が炸裂して連鎖爆発が起きて次々とポロディン艦隊の艦艇が誘爆に巻き込まれていく。もがいて前に出ると帝国軍の集中砲火に打ち倒される。まさにもがき苦しむ巨象のような状態である。

集中的に被害が多いポロディン艦隊を救出すべく、ビュコックは「我々とウランフ提督の艦隊を交代させる！スペースにポロディン艦隊を進ませるのだ」

ビュコックの第5艦隊、ウランフの第10艦隊がそれぞれ後方に下がらだした。それと同時に吸い寄せられるようにポロディンの第6

艦隊がそれまで同盟軍の占めていた空間に逃げてきたのである。

今度は当然に帝国軍の前面にいたボロディン艦隊が居なくなったのだから、帝国軍艦隊も行動の自由を手に入れた。そして、ここからが本当の狙いだったのである。

「行け！今だ！全速前進！敵艦隊中央部分に突撃せよ！」俺はチャンスとばかりにブルー・ドラグーンのコックピットからコーラル・シーに命令した。基本的に俺の艦隊構成は高速移動をモットーとしているので、そこらのろまな艦隊とは訳が違うのだ。

紡錘陣形のまま急速に敵艦隊と平行線上に並び痛めつけたボロディン艦隊を通過して後退していた同盟軍第10艦隊の中央部に転進し真横から突撃を開始した。

あまりにスピード！スピード！と叫んでいたのが最前列の巡航艦の数隻が勢い余って本当に敵艦隊の横っ腹に突っ込んでしまった。

「何を考えているのだ？速度を上げるにも程があるだろうに！ギョントー・ノルト！しっかり陣形を組みなおせ！」補給に戻りながら俺はブルー・ドラグーンの中から叫んだ。

突撃を開始した俺の分艦隊は火力集中による攻撃でウランフ艦隊の中央部に徐々に刺さっていった。

「まずいぞ、このままでは総崩れになりかねん・・・」最後尾のビュコックははるか前方で行われている戦闘を苦い表情で見つめていた。

ボロディン艦隊とウランフ艦隊の前方半分の艦隊は今や帝国軍の半



包囲網の中で集中砲火を浴びているのである。帝国軍の何倍もの数で光の玉が同盟軍の艦隊の中で炸裂している。

そこへ更に補給の完了したAAのワルキューレ戦隊が2度目の総攻撃を開始した。またまた対空防御を強いられた同盟軍艦隊はパニックに陥っていた。

「やりすぎるなよ。そのうち後方の残存艦隊が救出に来る。その時に撤退しよう」俺はギョクスター・ノルトに命令した。

「見事じゃないか。ランズベルク家のヤング・エグゼクティブは」ラインハルトは集中砲火を浴びせながらキルヒアイスに言った。

「しかも度胸もある・・・もしかすると厄介な奴かもしれないな・・・」少し顔をしかめてスクリーンを見ていた。その横顔をキルヒアイスは黙って見ていた。

ここに至り同盟軍は完全撤退を決め、被害の増大しているポロディン、ウランフ艦隊を救出すべく突撃を行い、その後一気に後退する作戦を取った。

ウランフの後方部分と第5艦隊が一気に突撃をしてきた。

「今だ！全艦逃げろ！もう引き上げてしまえ！急げ！」下品な命令をしているとギョクスター・ノルトが首を左右に振りながらあきれた表情だった。

あっという間に合流した同盟軍艦隊は全体でゆっくりとしかしその後方は痛めつけられた艦隊が最大戦速で戦場から離脱していた。帝国軍のグリーンメルスハウゼン中將も全軍に撤退命令を出した。

同盟軍艦隊は6000隻の艦艇を失ってしまった。帝国軍は900隻の損失だった。ビュコックは

「こちらがしたいことを殆どさせてもらえなかった。帝国軍の中に優秀な人材が増えてきている。これは危険なことだ」と語っている。

今回もきつと昇進しちゃうな！

いよいよ人材確保のスピードをあげるべきだな。

などと考えながら、司令官席で眠ってしまった俺である・・・

## 第十二話：第6次イゼルローン要塞攻略戦

### 第十二話：第六次イゼルローン要塞攻略戦

前回のヴァンフリート星域の戦いで功績により、ついに史上最年少で最速で少将に昇進した。感情が絡むのは仕方ないとして功を報いるシステムが機能しているのはうれしい。

銀河帝国軍宇宙艦隊司令長官のミュッケンベルガー元帥などは、未だ早いのではないかと異論を唱えたいらしい。しかし他の政治力が働き、微妙なバランスの上で成立した人事らしかった……

俺にとってはそんなことはどうでもよい。むしろ、人材確保のための予算が大佐時代とは比べ物にならないくらいもらえるのがうれしい。これでガンガン、スカウティングできるぜ！

そして陣容であるが、いよいよ一個艦隊（8000隻から12000隻をいう）を任せてもらえるのである。といっても、ランズベルク家の私設軍では既に艦艇55000隻を持っているので、なんだかなあ……と思う。

宇宙艦隊司令部より、俺の少将昇格に伴い、新しく人材が追加された。

アルフレッド・グリルパルツァー中尉、カール・エドワルド・バイエルライン大尉、デイトリッヒ・ザウケン中尉……みんな将来のランズベルク家のためにしっかり成長してもらいたいと思う。

そんな中、金髪&赤毛コンビにメックリンガーとルッツが加わったらしい……まあ、いずれキルヒアイス共々俺のものになるのだから

ら、気にしないさ。

結局俺の艦隊は艦艇9000隻、ワルキューレ2500機・・・ワルキューレには強く要望した。みんな気づいていないのだけれど、今後はワルキューレを持った艦隊が勝率をあげるのだと俺は確信しているからだ。

近頃また、イゼルローン回廊内で同盟軍によるジャミング・ノイズが増えてきている。理由は一つ、再び大兵力で攻め込んでくるからであろう。帝国軍イゼルローン要塞もこの事実を受け哨戒行動にしているのである。

同盟領方面に俺の艦隊は布陣しており、再び小惑星帯を索敵する任アステロイド・エリアを受けたのである。小惑星帯を同盟領側に抜けてその前方に宇宙電磁機雷を散布することが目的なのだが、ここで俺はランスベルク家で極秘開発中のトラップ型雷撃システムのテストも兼ねることとした。

これは2連装の魚雷を搭載した機雷のようなもので、自動索敵システムを搭載しており、コーション・イエロー時（つまり、同盟軍艦船反応）にのみ作動し魚雷を発射するシステムなのである。我々がどんなに近くを通過しても反応せずかつ監視の必要がないので安価である。

電磁機雷とともに多数ばらまいて見た。同盟艦船が通過すれば発射するので相手の行動が明らかになりやすい。

衛星ミサイル用にラムエンジンを50個の岩に設置作業を始めた。もはや、衛星ミサイルを使った戦法が俺の艦隊の定番になっているようである。

訓練もかねて小惑星帯で偵察に当たっていたAAの空戦隊が同盟軍の宇宙母艦艦隊を発見した。同時に発見されスパルタニアンとの壮絶な空中戦が開始された。

今回はこちらが先手を打てなかったようだ……しかし機雷原に引き込んでしまえば、一気に形勢は逆転できる。

同盟軍ホーランド提督の宇宙母艦、ミサイル艦、ミサイル巡洋艦の艦隊であった。AAの空戦隊はグループによる攻撃を行っており、実際に相手を減らしているが数の上ではスパルタニアンがほぼ倍の数を誇る。

「きりが無いな……」AAは呟く。そして

「全機、天頂方向から4時の方向へ退避すると見せて対空防御の前を通過させる！」

逃げる演技には絶大なる自信を持っている空戦隊なので、演技も逼真だった。パニックに陥ったように見せてぐいぐい小惑星帯に引きずりこんでいるのである。

その光景を見て俺は、

「AAがこっちにスパルタニアンを引っ張ってくるぞ！」

「仕方ない！対空防御準備！」「やつめ手の掛かる作戦はこっち任せか……まあいい。」

俺の艦隊は対空防御モードに入った。しかもたっぷり対空攻撃を受けてもらうために側面展開を行っている。

一目散に逃げ出したワルキューレを仕留めようとスパルタニアンの

空戦隊が小惑星帯に入り込んでいる。追撃を緩めようとすると、反転して襲い掛かり、頭にきた同盟軍が追いかけたすと、また逃げる・・・繰り返し返しているうちにスパルタニアン空戦隊は小惑星帯のイゼルローン要塞方面に近づいてきたのである。

罨を仕掛けるための餌をより豪華なものにするために、俺はブルー・ドラグーンを発進させた。猛烈なスピードで逃げを打ってるAAの空戦隊を通り越して、同盟軍のスパルタニアンの中に飛び込んだのである。

同盟軍空スパルタニアン空戦隊はパニックに陥り、大混乱となった。俺は片っ端からオート・ギャトリングガンでスパルタニアンを撃墜していった。7機まで覚えたけど途中から撃墜数を競うわけではないので、数えることをやめた。

あんまり遣り過ぎるなとAAから注意の通信が来ていた。俺一人で楽しんで悪いか・・・と思い、やはり逃げる演技を開始した。

パニックから立ち直った同盟軍は再び怒りに任せて追いかけてきた。恐らく俺の不意打ちで撃墜したのは5機や10機ではなさそうだから・・・同盟内にも「蒼き流星」は知れ渡っていると思われるので急いで逃げ出す俺達を猛スピードで追いかけてくる同盟軍のスパルタニアン。蒼き流星の賞金首効果もあつてか、完璧に罨にかかりそうだ。

いよいよワルキューレが小惑星帯を飛び抜け出てきた。それぞれの分艦隊の司令やコーラル・シーのギョントー・ノルトが対空防御の支持を出すところである。

しかもギユンター・ノルトの発案で艦隊は敵スパルタニアンの予想進路の下部に配置し直して一斉射撃を行うつもりである。

AAと俺はコーラル・シーの戦闘艦橋のすれすれを逃げてきた。同盟軍のスパルタニアンがほんの数秒遅れてきた形になった。次の瞬間対空防御が始まった・・・

小口径のパルスパルスレーザーや対空ミサイルが一斉に発射された。たちまち数十個の光の玉が宇宙空間に広がった。後から飛び込んでくるスパルタニアンも同じ運命を辿ってしまった。片っ端から爆発して光の玉を増殖させている同盟軍スパルタニアン空戦隊・・・なによりも被害を大きくした原因は紡錘陣形で突撃をしてきたからである。

「何？」ホーランド提督は耳を疑った・・・俺の耳は壊れちゃったのか？

「1000機のスパルタニアンが全滅だと？」「何かの間違いではないのか？」

管制官はこれを否定した。小惑星帯に突撃をしたスパルタニアン空戦隊1000機は一瞬で全滅してしまったのであると・・・

腕組みをして・・・しばらく考え込んでいたホーランドは

「敵艦隊の動きは？」

「は、こちらを発見し小惑星帯の前面に展開中ですその後方に電磁機雷群を確認しました。」管制官は伝えた

「やつら何を考えているのだ。」「この状態で背後に機雷をしょって、どうするつもりだ？」

「出方がわからん。各自応戦しろと伝えろ」

ブルー・ドラグーンから戻ってきた俺はすぐに紡錘陣形を取らせた。

「突破してはいかんぞ!」「ぎりぎりに戻ってこないと罠にならないのだからな!」

あくまでも電磁機雷を使ってやろうと決めているのである。

同盟軍のホーランド艦隊は10000隻。アルフォンス艦隊は9200隻・・・互角ではあるが、ホーランドの背後には総数未確認の同盟軍艦隊が控えているので長期戦は不利である。ここは一気に大きい被害を出させて出鼻を挫きたい。

電磁式宇宙機雷もトラップ型雷撃システムも味方識別装置があるので基本的には爆発しない、突撃して中央突破と見せかけて機雷原に引きずり込みたいのである。戦艦同士の主砲の打ち合いも憧れはするが、キルレシオが高すぎるので嫌なのである。

「よし、突撃だ!・・・と見せかける!」・・・我ながら何という命令だ!

俺の艦隊は紡錘陣形のまま突撃を開始した。

「させるか!全艦柔軟に受け止めて後退しているように見せる!」「ホーランドは叫んだ!こっちも罠に仕掛けてやるという作戦だ。

「敵艦隊中央部、後退します」管制官が報告してきた。

「もう少し押し込まないと効きませんか?」ギュンター・ノルトが聞いてきた。



「よし、加速しろ！本気で一度突っ込め！」俺のコーラル・シーもブラスターを連続発射して突撃を行った。向こうが下手を打てば突破して反転すればいいし。

「帝国軍艦隊、加速して中央部に突撃します！」

「やはりな。上手く受ける！」「この戦いは我々がもらった！」ホルランドは確信したのである。

猛スピードで中央部に突撃した俺達は徐々に新劇のスピードを弱めて、まるで攻めあぐねているような姿を見せていた。

「もうスピードダウンか！」「素人め本当の艦隊戦を見せてやるぞ！」

「中央部の全艦！思い切り押し戻せ！」

一転して同盟軍ホルランド艦隊が力押ししてきた。お互いの先頭部分は相手の艦橋内部が見えるくらいに接近した！

「今だ！全速力で逃げろ！隊列も何も無い！急げ！」俺は命令した。艦列を乱しながら俺の艦隊は猛スピードで機雷原に向かって進んでいった。

天頂方向から真下を覗いて見れる状態ならば、小惑星帯に向かって俺達が逃げ出しているところに吸い寄せられるように敵艦隊が追いつがってきている状態が確認できたであろう……

「奴ら自分達で撒いた機雷原に飛び込むつもりか……パニックでも起こしたか」

「よろしい、それほどまでに自分らの撒いた機雷で死にたいのか……させてやれ！」

ホーランドは何故そうなるのかを確認しないという艦隊司令官にはあるまじき判断で、指示をだしてしまった。

「いけ！全艦最大戦速！一気に小惑星帯まで突っ込め！」

俺達は次々と小惑星帯に突っ込んできたが敵識別装置のおかげで機雷が作動しない。それを勘違いした同盟軍艦隊が突っ込んできた。

先頭の戦艦の管制官は

「魚雷です本艦に多数！機雷が・・・」最後まで報告できなかった。  
・数十発の魚雷と電磁機雷が体当たりを行い、一瞬で爆沈した。  
立て続けに連鎖で光の玉が数珠繋ぎ状態で広がった。

ホーランドは未だ状況が確認できずに、あの光の玉は敵が機雷に接触しているのだと勘違いしていた。

「何だと！あれは味方の爆発なのか！何故だ？」帝国軍の奴らは何でダメージを負わないのか？

「さあ、入り込んだ蟻地獄から抜け出させるなよ。」俺は一気に勝負をつけようと考えた、スクリーン映ったのはあのラインハルト・フォン・ミューゼルだった・・・

「という戦況になったので、よろしければ追撃戦をご一緒願えないものかと思ひまして。」とおれは追撃戦を共同戦線でいこうと考えた。やっぱり俺の艦隊だけで戦うと被害が大きくなる。キルレシオが高くなってしまうので。

「ここまで完璧に戦況を整えたにも拘らず、勝利を分けていただけの真の理由は何か？」とラインハルトが聞いてきた。

「ああ、分けるのではなくて、序盤戦をより優位に展開して同盟軍の士気を下げるのが狙いだが・・・ご賛同いただけませんか？」ちよっとひねた考え方をする奴だなこいつ・・・

「・・・そういうことなら・・・受けねばなるまい。了解した。ただし、衛星ミサイルを用いるときは必ず事前の連絡が欲しいものだ。突然では図体がでかいだけあって回避に手間取るのでな。」

お前の事なんかどうでもいいのさ。ただ、ちゃんと報告するよ。俺はキルヒアイスが欲しいのだから。

小惑星帯から機雷と魚雷の攻撃を潜り抜けてきた同盟軍艦隊はようやく開けたスペースを確保できたかに見えた。

しかしそこにはアルフォンス、ラインハルトの艦隊が待ち構えていたのである。

次々とようやく小惑星帯を抜け出てきた同盟軍艦艇が増えてきた。

ぞくぞくと小惑星帯から抜け出る黄色の光点がメインスクリーンに点滅する。

俺はラインハルト艦にも伝えるために大声で

「フェイエエル！」と命じた。

光の束が一斉に同盟軍艦隊の中心に突き刺さっていく・・・たちまち数え切れない光の玉が広がっていく。

おれは火力集中型の砲撃で、ラインハルトは柔軟な陣形のバランスを取りながら痛撃を与えていく。次々と爆沈する同盟軍の艦隊を見

ながら序盤戦の勝利を確認した。

この後は艦隊の本体通しの激突になり、一時こう着状態となるが、俺の艦隊が紡錘陣形で中央突破を果たし、ミンチサンド戦法（中央を突破し敵部隊を二分して片方を半包囲しフルボッコ状態にすること）で敵を混乱させてその隙に帝国軍艦体はイゼルローン要塞へと帰還したのである。

今回はトールハンマーが同盟軍に対して初めて、使用されなかったという以外に特徴があるわけでもない戦いで、双方が勝利である！と宣言している。

### 第十三話：ガチ！門閥掃討バトル1！

第十三話：ガチ！門閥掃討バトル1！

俺は前回の（ほぼ半年前の）第6次イゼルローン要塞攻防戦での実績で、ついに中将に昇進した。これで艦隊16000隻、ワルキューレ11000機の機動部隊となった。

そんな中、我がランズベルク家は6つ目の恒星開拓を完了させたのである。この段階で所有している恒星の数は銀河帝国随一である。一気に隣接の7つ目の恒星を開拓しようとした時、事件は起こった。

7つ目の恒星開拓中にとある鉱物資源を含んだ山脈を発見した。レアメタルやレアアースの需要は未だ旺盛だからね。その山脈の逆サイドからフィッツジェラルド家の開発部隊がやってきて接触して、トラブルになり、お互いに領有権を主張しだしたのである。

門閥貴族で頂点を極める家柄が4つある。筆頭はブラウンシュバイク家、次いでリッテンハイム家、そして残りの二つがフィッツジェラルド家、盟主はリンスター・フォン・フィッツジェラルド。もう一つがベルナルド家、盟主はカスパー・フォン・ベルナルドとなっているが……

当然、我がランズベルク家の大躍進を奴らは知らない、まあいいところあほ貴族の次男が出世しとるわ。位にしか感じていないのである。つまりフィッツジェラルド家としては格下のランズベルク家なんぞ気にも留めていない状態なのである。

そんな中で父上にフィッツジェラルド家の盟主である、リンスター・

フォン・フィッツジェラルドから直ちに鉱山を明け渡すように命令が来たのである。本来は命令なんぞ聞く必要が無いのであるが、父上とあほ兄のアルフレッドはおろおろして

「ゴールデンバウム王朝のエスタブリッシュメント貴族の一つ、フィッツジェラルドに睨まれたら御終いだ！アルフォンス、今回は言うことを聞こうではないか！」

とあほ兄が言ってきたので

「兄さん、心配しないで、軍備は数倍、能力は、こっちは帝国軍最年少、最速の中将だよ僕。全然問題ないよ。今ならあのブラウンシユバイクだって！」

「こら！言わせておけば！あの天下のブラウンシユバイク公に向かつてなんだ！」

「盗聴でもされていたら、国家反逆罪だぞ！」

「それなら、丁度いいじゃん。ぶっ潰してしまえば」と俺はきらくに答えた！

「な、何ということを・・・そんなことが出来ると思っているのか！」

「それが無理だと考えるほうが、よほどおかしいよ！」俺は引かない。

「父さん、アルフレッド兄さん。正直、俺はフィッツジェラルド家をこの際、併呑してしまうのもいいと思っている。」

「しかもそれほど難しい問題ではないとも思っているの・・・この際やつちまうことが良策だと思うよ・・・軍事指導者の俺が大丈夫だといってるんだからさ」

「むう……」父親は黙った

「それでもアルフォンスよお前の暴走でランズベルク家を滅亡させるわけには行かない。」

「よって、お前が負けそうになったら、お前を売るしかないぞ！」

「上等です。ぜひそれで。」おれは啖呵を切った。

「正直申し上げて、ランズベルク家をここまで躍進させたのは全部自分がいたからだと自負しています。今後も絶対に負けませんから」

これで取る道は決まった。

帝国内ではこの騒動はメディアに取り上げられ、大きなゴシップとして取り上げられている。大勢はフィッツジェラルド家に軍配は上がり、謝罪するか最悪は併呑されてしまうだろうとの読みである。

「ふん！門閥貴族どもの痴話げんかごときに興味は沸かんが、片方があのランズベルク家であるとなると少し違う気がするな。キルヒアイス」ラインハルトは電子新聞を読みながら話した。

「はい、ラインハルト様。今回は恐らく大方の予想は外れるかと思われませう。」キルヒアイスは答えた。

「純粹に軍事的な優劣を決めれば間違いなくアルフォンス中将のランズベルク家が有利でありませう。」

「何しろ、お前のお気に入り的人物だからな？キルヒアイス？」冷やかしながらの質問にキルヒアイスは

「お気に入りとかではございません。正当な評価として他の門閥貴族の子息達とは物が違うと感じているだけです。」と返した。

「しかし今回ばかりは厳しかろう。何しろ銀河帝国軍宇宙艦隊司令長官のミュッケンベルガー元帥が20000隻の艦隊を率いて助太刀するとの発表がある」

そうなのである。門閥貴族の名家なのでしかも急成長しているランズベルク家が気に入らないことも合って、あのミュッケンベルガー元帥閣下がフィッツジェラルド家についていたのである。

「今回はあのヤング・エグゼクティブも荷が重いというところかな。」「ロイエンタールはやはり電子新聞を読みながら盟友に尋ねた。」「例のアルフォンス・フォン・ランズベルクか。」「そうだな、今回は駄目かもしれないな」

「卿ならどうする？オスカー・フォン・ロイエンタール閣下なら？」ミッターマイヤーはコーヒーカップの手前に手を組みながら尋ね返した。

二人は共に少佐となっており、いよいよその手腕が目立ち始めていた時期である。自分達より後から登場しさつさと追い抜き驍進しつづけているアルフォンス中將を気にしているのである。

「そうだな、あきらめるかな。謝罪すれば何とか生きていく分くらいは残してくれそうじゃないか」ロイエンタールはそう答えた。

「俺も今すぐ引くな。今回ばかりは、相手が悪い。勝てないとも思わないが、こちらにも甚大な被害を受けるかもしれないしな。」「ミッターマイヤーも続いた。

「上級士官学校では確か後輩だったよな。彼は確か。」「ロイエンタールは続ける。

「うむ、飛級で今年我々と一緒に卒業されたがな。」「」「こつこつ



うのを同期というのだろうか？それともやはり後輩なのだろうか「ミッターマイヤーが尋ねる。

「少なくとも我々よりははるかに上級士官であることは変わりがないだろう、アルフォンス中将閣下は」ロイエンタールが答える

「例のあれか、卿の言う猫の子ではなくて虎のほうだと」「ミッターマイヤーは以前ロイエンタールがラインハルトを評して話した内容を思い出していた。

「そうだ、彼もまた、虎のほうだろう」「ロイエンタールは眩しそうに目を細めながら話した。

「それでももとの虎のほうは最近どうなっているんだ？」

「ラインハルト・フォン・ミュゼル少将とジークフリード・キルヒアイス中佐か」「ミッターマイヤーも天井を見つめながら話した「しばらく聞かなくなったな・・・」

「ヤング・エグゼクティブか・・・」「ロイエンタールはミッターマイヤーの後ろの壁を見つめながら考え込んでいた・・・

宇宙艦隊司令長官ミュッケンベルガー元帥起つ！の報はランズベルク家にも入ってきた。あほ兄アルフレッドに至っては半狂乱になっている。しかし父親は

「アルフォンスに任せただ。打ち勝とうと滅亡しようとするアルフォンスが全力でやってくれればいい」

さすが親父！任せておきなよ！必ず勝つからね。俺は意気に感じていた。

そういつても今回は同盟軍に対する軍事作戦ではないが、配下の帝

国軍艦隊を使ってしまう予定である。

そうすると使える艦隊数は最大で42000隻も使える！まず負けることは無いだろう。何しろミュッケンベルガー元帥が出てくるのなら、問題は無いのである。

トトカルチヨのオッズも28対1である！やった！俺は手持ちの現金を全部ぶっ込んだ！これで勝てれば億万長者だぜい！

幕僚チームを集めて基本方針を確認した。艦隊戦で相手を消耗させてフィッツジェラルド家の本拠を攻略し併吞してしまう。その過程でミュッケンベルガー艦隊を打ち破る。

ギウンター・ノルト中佐（今回昇進）は

「まあ、撃ち勝つということであれば問題は無いでしょうから・・・」

ベルホルト・フォン・ウインメル中將（今回昇進）は

「油断しなければ、別に問題は無いので粛々と準備を進めましょう」

アーダベルト・フォン・ファーレンハイト大佐（今回昇進）は

「ミュッケンベルガー元帥閣下？よろしい！本懐である！」

フリッツ・ヨーゼフ・ビッテンフェルト大佐（今回昇進）は

「突撃！突撃！突撃だあ！」

各々感じ方が別なのである・・・

しかもついに今回初めて実戦投入する予定の宇宙要塞「デス・ネットワークス」もスタンバイさせた。そして平行開発していた補給重視型要塞「ブラッディ・スピア」も投入する。

そして銀河帝国中央銀行発行の元帥債券「ミュッケンベルガー債」

を大きく空売り注文を出していた。これも当たれば！ウハウハである。

2日後、フィッツジエラルド＋ミュッケンベルガー＋勝ち馬に乗りたいあほ貴族連合の艦隊31000隻が我がランズベルク家領内に接近してきたことをセンサーが教えてくれた。いよいよ戦闘開始である。

我々の先鋒はその人柄で艦隊内での信頼度NO.1のベルホルト・フォン・ウインメル中将貴下の艦隊7000隻である。

「7000隻？先鋒はウインメル中将か・・・ふん！」ミュッケンベルガー元帥は鼻で笑っていた。楽勝ではないか。さっさと撃ち破ってロビー活動に専念せねば、次回もしくは次々回の貴族連合会議にはブラウンシュバイク公の推薦を貰って議長に選出されたいのだ。こつこつ楽勝な時に手柄を立てておくことも悪くない。それにあのランズベルク家の次男とか言うやつは気に入らないので、ここでお灸をすえてやらないと・・・

「イエローエリアからレッドエリアに入ります。」  
管制官が伝える。

「よおし、先制攻撃だ。全艦全速！フェイエル！」ミュッケンベルガー元帥が伝える！

「本物の艦隊戦とはどういうものか教えてやれ！」

一斉に光の線が一直線に相手側のウインメル艦隊に突き刺さる。高磁場フィールドで何とか持ちこたえているが、実体弾であるミサイルや魚雷は避けられない。徐々に爆沈による光の玉が増え始める。

「もう少しふんばって見せないとな!」「全艦、踏ん張れよ!じきに横槍が入ってくるからな!」とウインメルは僚艦を励ましながら適格に戦線の維持に努めている。

「さすがは帝国軍宇宙艦隊司令長官というわけか!」俺は小惑星帯の中から戦況を見つめている。

「最初から楽をしようとお考えでしたか?」ギウンター・ノルトが聞いてくる。

「そんなことは考えていないな・・・でも、もう少し仕込みの時間があればな、とは思うよ」

今回の出兵は相手の予想外の速攻であり時間が取れなかった。

「そろそろウインメル殿も反撃かな?」スクリーンを見ながら話す。「御意」ギウンター・ノルトもスクリーンを見ながら答える。

「さあ、一気にいくぞ!」ウインメルは全速前進の命令を出した。そしてそれは実行に移された。じつと堪えていたウインメル艦隊に対して安全マージンを取りながらの射撃を繰り返していたミュッケンベルガー艦隊はこの前進に対応できなかった。一気に詰まる距離と比例して爆発の光が増えてきたのである。

「ええい、何をやっている!接近してくるではないか!」旗艦ヴィルヘルミナの周りで爆沈する艦艇が増えてきたためミュッケンベルガーが動揺し始めている。

ぐんぐん火力を集中させながらウインメル艦隊は突き進んでくる。明らかにウインメル艦隊よりもミュッケンベルガー艦隊のほうが爆

沈の光の玉が多くなってきている。やはり火力集中が効いているのだ。ある意味、アルフォンス艦隊の定番攻撃になりつつある。

「この辺だな。」ウインメルはつぶやく。

「この辺りかと・・・」副官のケルビン・シュワルツ中佐もうなずく。

「よし！今だ、全艦後退しろ！急いで逃げる！駆逐艦、フリゲート艦は進路に機雷敷設！」

猛スピードで前進していたウインメル艦隊が突然急ブレーキをかけたように停止し、今度は一目散に逃げだしたのである。

「おのれ！単なるこけおどしだったのか！全艦！前方の艦隊に突撃だ！踏み潰せ！」動揺してしまったミュッケンベルガーは髪の毛を逆立てて、命令した。

「ミサイル艦隊前面に出して撃ち込んでやれ！」

天頂付近から見るとぎゅっとウインメル艦隊に押し込められたミュッケンベルガー艦隊が相手の後退に合わせて細長く伸びだしている感じがわかる。ウインメル艦隊の全速力の後退に合わせて猛スピードで前方の艦隊が突き進んでいく。全体的に細長く伸びてしまったときである。

「左舷巨大物体が高速接近！」管制官が絶叫する。

「巨大物体とは何か！詳細を報告せよ！」ミュッケンベルガー艦隊の副官がオペレーターに怒鳴り返す。

パネルを操作してオペレーターは

「小惑星サイズの物体が左舷から本艦隊に向けて進んできます。数

300」

「アルフォンス中将艦隊から発射された模様。」

「衛星ミサイルとかいう奴か・・・うーむ」ミュッケンベルガーは唸る。

「対空防御及び回避運動開始せよ」副官は指示をする。

細長く伸びている艦隊の一部が左側から右側にへこむように回避運動を開始した。

それでも衛星ミサイルはもともと軌道などを計算されているわけではないので、衛星ミサイル通しがぶつかり軌道が変わってしまうことに対応できずに爆沈する艦艇が増えてきたのである。

ますます回避運動のために細長いラインは左から右側へ大きく膨らんできた。しかも通過する衛星ミサイルのために艦列が寸断されてきているのである。

「右舷より艦隊接近！数およそ2000隻！」

「何だと！何故それだけの艦隊の存在がわからなかったのだ！」副官はどなる！

「恐らく船体に黒いステルス・インクで塗装していた模様です。熱反応で探知できました。」

オペレーターは話しながらメインパネルに戦況を映し出す。

黒いステルス・インクの船体・・・黒色槍騎兵艦隊であった・・・司令官はもちろん、フリッツ・ヨーゼフ・ビッテンフェルトである。

## 第十四話：ガチ！門閥掃討バトル2！

第十四話：ガチ！門閥掃討バトル2！

船体に黒色のステルス・インクをペイントした戦艦群が静かにしかも高速で近づいている。一撃必殺、中央突破命！と司令官席の後ろに掲げてある。天井には「RUN & GUN」と貼ってある。

それらの旗の下に仁王立ちしているのが、司令官のフリッツ・ヨーゼフ・ビッテンフェルトである。階級は大佐である。原作を熟知している俺は帝国の双璧よりもむしろ黒色槍騎兵艦隊が欲しかったのである。

どの局面でもカンフル剤になりえる集団なので、ラインハルトよりもとにかく先に欲しかった。

艦隊構成は全艦高速戦艦で構成されているという際立った編成だ。その黒色槍騎兵艦隊が真っ直ぐに突き進んでいる。

その正面には銀河帝国軍宇宙艦隊司令長官ミュッケンベルガー元帥の直属艦隊が展開している。

「我々の前で横腹を出しているとは・・・頭の悪い連中だな」ビッテンフェルトはつぶやく。

「本当にアルフォンス閣下の衛星ミサイル戦略は効きますなあ」副官のハルバーシュタット少佐は続く

「さてさて、叩き潰してくれるわ！全艦最大戦速！」ビッテンフェルトは叫ぶ

「黒色槍騎兵艦隊の主砲は正面の敵にのみ向いていればよいのだ！  
進め！進め！」

ここにきて分断された艦隊の一団に猛然と黒色槍騎兵艦隊が押し寄せてきた。進路上の艦艇が爆沈し始めたのである。

「おのれ！一番弱いところを狙って！」ミュツケンベルガーはメイ  
ンスクリーンの中で爆沈していく見方艦艇を見ながら叫ぶ！

「我が艦隊正面の敵からワルキューレ多数！数およそ1000機！  
オペレーターが叫ぶ！

今回ウインメル艦隊には第139高速機動空戦隊が配備されていた。  
体長のAAはアルマリック・アスヴァール

「軍艦連中に遅れをとるな！各自1隻以上ぶっ倒してこい！」俺様  
は確実に4隻以上沈めてみせるぜ！と決めていた。

ミュツケンベルガー本人が率いている直属部隊がワルキューレの群  
れに襲撃される。1隻の艦艇に4〜5機のワルキューレが群がり魚  
雷攻撃を行っている。さすがの戦艦級も一瞬で爆沈してしまう。

ミュツケンベルガー艦隊は対空防御に切り替えた瞬間にウインメル  
艦隊が突撃をかけてきた。

「おのれ！狡猾な！」副官は歯軋りして悔しがる。

正面はウインメル艦隊、右から黒色槍騎兵艦隊、そして新たに  
「艦隊後方部、左から新たな敵艦隊！数は4000隻！」オペレー  
ターが叫ぶ！

「ぐう！」ミュツケンベルガーが呻く



左後方の敵艦隊はファーレンハイト、アイゼナツ八艦隊であった。主砲は撃たずミサイルと雷撃を繰り返していたのである。大きい爆発光で敵の精神状態にプレッシャーをかける目的があったのである。

「やるな！ヤング・エグゼクティブは！」

ロイエンタールが感心していた。

「それに比べて我が軍の宇宙艦隊司令長官は・・・」と皮肉った

「ある意味で仕方ないことだったのかもしれない」ミッターマイヤーもさらに皮肉る。

「このままでは完勝になってしまうぞ」

戦況は逐一、帝国軍広報ディスプレイに映し出されるのである。現在はミュッケンベルガー艦隊が数箇所に亘り分断されてランズベルク家のアルフォンス艦隊が各個撃破を行っている状態が映しだされている。

「見事だな、キルヒアイス」ラインハルトも広報スクリーンを見ながら話す。

「はい、予想通りの展開ではありますが・・・」キルヒアイスが答える。

「しかし宇宙艦隊司令長官もこのままではふがいなさだけが残ってしまうのではないか・・・」

俺ならどうする・・・ラインハルトは考えていた。

戦闘は一方的にランズベルク家の優勢で続いている。

対艦砲撃とワルキューレの対空防御が入り乱れて展開されており、收拾がつかない格好となっている。

黒色槍騎兵歓迎はまさに突撃、粉碎を繰り返して猛烈な突撃を繰り返していた。被害も甚大で600隻がすでに爆沈しているのにもかかわらず、突撃のスピードを抑えようとしていない。ミュッケンベルガー艦隊をすでに1500隻以上粉碎しているのだ。

「これは・・・思った以上に恐ろしい集団なんだな・・・味方に出てよかった」俺は心のそこからそう思った。この突撃をともに食らったらたまらないよ。

AAはAAで暴れまわっていた。補給も3回行いながら戦闘を継続しているのだ。船体を雷撃しその後ミサイル発射孔をレールガンで攻撃、最後に戦闘艦橋付近にギヤトリングガンで掃射してから離脱これですでに6隻葬っているのだ。

「だいぶアルフォンス陣営も人材が揃ってきた。今後はさらに加速するだろうから、ここらで一つ目立っておかないとな」

「しかしアルフォンスという男、未恐ろしい男だ。我々の七色星団連合に同じくらいの智勇兼備な人材がいるのだろうか・・・」

ファールンハイト、アイゼナツ八艦隊は至近にいかず、一定の距離を持って砲撃を繰り返している状態である。

「敵の集中力を散漫に出来ればいいのだ。このままでいい」

ファールンハイトは叫んだ。アイゼナツ八も黙って頷きただけだった。さらに右後方からユーリー・クルガン、ケネス・ギルフォード、カール・グスタフ・ケンプの艦隊が出現し攻撃を始めた。衛星ミサイルによって分断された艦隊はもはや各個撃破の対象でしかなかった。

アルフォンス本体が4万隻の艦隊とともにウインメル艦隊の後方から現れて、戦線は一気に収束モードになってきた。このままゆつくりと押し出していけばミュッケンベルガー艦隊は壊滅する。さらにその後方には「デス・ネックレス」が姿を現した。

「元帥閣下に名誉ある降伏をしていただくように案内せよ」俺は伝えた。

ギユンター・ノルトは命令を忠実に実行した。

しばらくするとミュッケンベルガー艦隊からの回答が来た。メインスクリーンに映る情報参謀士官と名乗る男の顔に見覚えが・・・

「オーベルシュタイン！」俺は叫びた

「小官の名をご存知でいらしたとは・・・甚だ光栄の極みです。アルフォンス中将閣下」

そう、俺はお前を良く知っている・・・帝国軍印の絶対零度の剃刀といわれたあの、オーベルシュタインと会話しているのだ。

「ミュッケンベルガー元帥閣下のお考えをお伝えいたします。降伏など考えることもできない。よって、徹底抗戦を宣言する！」断固とした決断のようであった。

「それではこのまま負けると申されるのか。卿も死んでしまつかも知れぬぞ」少し皮肉も散りばめて言ってみた。

「仕方ありません。中将閣下。お考えのままにご判断くださって結構です。」

しばし俺とオーベルシュタインがスクリーン越しに見詰め合っていた。それは、本気でやっちゃうぞ？という俺の考えと、やれるなら

やってみるよ、というオーベルシュタインの気持ちが悪く交錯している瞬間だった。

その瞬間、前方で展開しているウインメル艦隊の右側面の艦艇が一気に爆沈した。

「何事か！」ウインメルは叫んだ！

「右後方より新たな敵艦隊。数およそ20000隻。艦艇の御旗マーク確認……」

「ベルナルド家の紋章です。中央部にカスパール・フォン・ベルナルド盟主の旗艦ティンセレス・グスタフを確認しました。」

「何だと！ベルナルド家がフィッツジェラルド家に就いたのか！」ウインメルはスクリーンを見ながら叫ぶ

「数で圧倒されそうだ……本隊へ合流させてもらおうぞ」  
ウインメルは直ちに艦隊を整え、隙を与えずにアルフォンス艦隊の本隊部へ合流した。

左にミュッケンベルガー艦隊、右に新たに参戦してきたベルナルド家の艦隊を見ながら俺は考えていた……どうしようかな？と

「ティンセレス・グスタフに通信を」俺は通信オペレーターに命令した。コンソールを作動させながら、オペレーターは

「ティンセレス・グスタフ、繋がりました。」と報告してきた。  
スクリーンの中央部にアップでベルナルド家盟主である、カスパール・フォン・ベルナルドが青白い顔をして映っていた。

「私に何か用か？ランズベルク家ごときが」怒りの一言である。

「ベルナルド家盟主殿にご提案がありまして」おれは冷静に答えた。

「先ほども申したとおり、ランズベルク家ごときに対等な立場で議論をする気が余には全くないわ」と切って捨てられた。

「それは残念、フィッツジェラルド家の領有権を分割しないか、との相談であったのに・・・」俺は欲望の湖に小石を投げ込んでみた。

「何だと！」と叫んだきり、盟主のベルナルドは黙ってしまった。

「もともと領土拡大を目論んでおられたはず。しかし恐縮ですが現在のベルナルド家ではフィッツジェラルド家を打ち破れるほどの力の差が無いと判断しました。」

「そして、現在の現実をご覧の通りです」もう一押しでフィッツジェラルド家及びミュッケンベルガー艦隊は粉碎される・・・  
勝ち馬に乗らなくて良いのかい？と暗に伝えているのである。さあ、馬鹿盟主はどう反応するのか・・・

俺にとっては一時的に預けているだけであるので、勿体無くないし。どうでもよいのである。このまま一気に両家を葬ることも可能であると思う。どちらでもよいのである。

戦闘は続いており、もはや一方的なフルボッコ状態になってきている。ミュッケンベルガー元帥閣下の旗艦ヴィルヘルミナを射程に捕らえることも時間の問題である。

沈黙していたベルナルド艦隊に動きがあった。紡錘陣形を取り始めた。

「乗ってこなかったか・・・仕方ない」

「デス・ネックレスへ、ライトニング・アクセルへエネルギー充填を開始せよ」

先手必勝である。要塞兵器であるライトニング・アクセルは正式には高磁力メガ粒子砲のことである。イゼルローン要塞のトールハンマーには及ばないが一撃で艦隊ならかなりの被害を与えられる。次弾発射に1分30秒しか掛からないのも特徴のひとつである。

「ライトニング・アクセル、エネルギー充填完了しました。」オペレーターが叫ぶ

「いよいよ使うのですね」ギンター・ノルトが確認してきた。

「ああ、使ってみないと威力がわからないのでな」俺は腹を決めた。

「フェイエル！」ついにライトニング・アクセルの発射命令を出した。

10秒ほどしたときに青紫の光線が一気にベルナルド艦隊に突き刺さった！

同時に猛烈な爆沈の光の玉の塊が炸裂した。一撃で数百隻の艦艇が蒸発した。

ベルナルド艦隊は大混乱に陥っていた。その中で第二射が行われた。ライトニング・アクセルの通過した後は埋まりきれない穴ができてしまっていた。

慌てて密集体系から逃げ出そうとする艦艇通しの衝突や自暴自棄で攻撃し僚艦に命中し爆沈させたり、パニックに陥りワープをしてみよう艦が一斉に行われており、もはや集団として機能していなかつ

た。

続いて第三射が行われ、ベルナルド艦隊は殆ど艦隊戦を行わないまま、壊滅し逃走し始めた。

このときに第二射で盟主であるカスパール・フォン・ベルナルドが旗艦ティンセレス・グスタフとともに蒸発してしまっていた。

ミュッケンベルガー艦隊も右後方からのユーリー・クルガン、ケネス・ギルフォード、カール・グスタフ・ケンプの艦隊と右真横からの黒色槍騎兵艦隊の猛攻でついに旗艦ヴィルヘルミナをその射程に捕らえた。

あらゆる角度から主砲のエネルギーが突き刺さった旗艦ヴィルヘルミナはゆっくりと分解され、やがて大爆発を起こした。

しかし・・・デス・ネックレスのライトニング・アクセルを見た瞬間に実はミュッケンベルガー元帥、オーベルシュタインらは脱出して旗艦を変えていたのである。

ミュッケンベルガー艦隊の全面敗走！

ステージは追撃戦となり最大戦速で残存艦隊の数を減らしながらフィッツジェラルド家の本星に向かうのである。

ミュッケンベルガー艦隊は総数4000隻まで数を減らしていたのである。追撃するアルフォンス艦隊の数は52000隻。既に勝負は決っていた。

「見事ではないか、キルヒアイス」ラインハルトは戦況を映し出すスクリーンを見ながらつぶやいた。

「しかし50000隻以上の艦隊だぞ、どこから集めてきたのだ？」

「中将待遇での艦隊運営は多くて15000隻のはず。40000隻は何処から集めてきたというのか。」

キルヒアイスは答えなかったが、一つの仮説を立てていた。つまり、もともとこうなる準備を最初からしていれば、出来ないことはないかもしれない。秘密裏のうちに勢力を拡大していれば可能かもしれない・・・では何故？隠すのか？理由は多くなく、知られたらまずいからであることは想像できる。では、何のために・・・

「ラインハルト様、もしかやアルフォンス中将閣下は・・・」

「門閥貴族を妥当するのが目的ではないか・・・だろ？」ラインハルトは先読みをした。

「しかし、アルフォンス自身がバリバリの門閥貴族ではないか！説明がつかない部分が多い」

「いずれは俺とぶつかるのか？それとも・・・」

フィッツジェラルド家本星に到着してもミュッケンベルガー残存艦隊が上空に展開しており、ここでも艦隊戦を行うのか？と思っただが、またもオーベルシュタインから通信が入り

「ここに至り、動力停止を行うので部下には寛大な対処を、とのミュッケンベルガー元帥閣下の申し出ております。何卒、ご検討を」とのことだった。

俺だってこれ以上味方の損害を出さないで進めたいのでOKした。それに先立ってミュッケンベルガー元帥に休戦のための5つ条件を出した。それは・・・

？ 帝国軍宇宙艦隊司令副長官のポスト



- ? イゼルローン要塞を除く、他の全ての軍事要塞、施設の運用責任者のポスト
- ? 正式な階級として上級大将の地位を受ける
- ? 帝都オーデインとフェザーンに上級大将府を設置、運営する。
- ? 統帥本部副総長のポスト

この条件であった。

かなり欲張った形ではあるが、まあ、格下に負けたんだからそれなりに奮発してもらわないとね。

??、?はすぐにOKが出た。

?は何か戦果を挙げたわけでも無いのでいきなりは難しいとの事で大将への昇進でとめて置くことになった。?は前例が無いので保留、検討協議継続扱いとなった。

もちろん旧フィッツジェラルド家とベルナルド家は我がランスベルク家が併呑するのである。良いとも悪いとも言われなかったのだからとノイエラント総督府をこしらえて監督者を置いたのである。

ばか兄アルフレッドも一応少将級扱いで軍属にしたのである。これで年収3000万帝国マルクがもらえるんだよ!いいよなあ・・・

次の日の電子新聞には大見出しで「大併呑!!」と書いてあった。ブラウンシュバイク家、リッテンハイム家をはるかに超える資産を手に入れた貴族となってしまった。

噂によるとブラウンシュバイク家は怒り狂っているみたいだけど・・・  
・いつでもどうぞ?やるならデス・マッチでね。

惑星19個で総人口16億人の巨大貴族になってしまった・・・

しかも何だかどさくさにまぎれて銀河帝国軍宇宙艦隊総数は20個艦隊あるのだが、その半数を配下に収めてしまった訳である。

統帥本部副総長のポストも手に入れたので時期F X（新型ワルキューレ）の開発も口を出せるようになった。

ヤング・エグゼクティブではなくてエグゼクティブだな！

ちなみにミュッケンベルガー債・・・空売りの利益が・・・890億帝国マルク！

28倍のオッズ！5億帝国マルク！

どうしよう、こんな大金使い切らないや！

オーディンの大将府に來客？

げ！オーベルシュタインかよ！きつと仕官の依頼だな・・・  
どうしようかなあ・・・

## 第十五話：第3次ティアマト会戦

### 第十五話：第3次ティアマト会戦

フィッツジェラルド家とベルナルド家の「大併呑」の後にミュッケンベルガー元帥に上級大将昇進は早いということでも許可されなかった。その代替案でアルフォンス艦隊幕僚チーム全員を昇進させてもらった。

それくらいはね。銀河帝国筆頭貴族になったわけだからさ。

アルフォンス艦隊の幕僚チームは以下の通り

アルフォンス・フォン・ランズベルク 大将

銀河帝国軍宇宙艦隊副司令長官

統帥本部副総長

銀河帝国軍戦闘要塞総司令官

ベルホルト・フォン・ウインメル大将 アルフォンス分艦隊司令官

ザザ・パチュリア少将 戦艦コーラル・シー艦長

アーダベルト・フォン・ファーレンハイト少将 アルフォンス分艦

隊司令官

エルンスト・フォン・アイゼナツハ少将 アルフォンス分艦隊司令官

フリッツ・ヨーゼフ・ビッテンフェルト少将 アルフォンス分艦隊：

黒色槍騎兵艦隊司令

ギュンター・ノルト大佐 分艦隊参謀チーム参謀官

リュウ・ウェイ大佐 分艦隊参謀チーム参謀官

ユーリー・クルガン大佐 アルフォンス分艦隊司令官

ケネス・ギルフォード大佐 アルフォンス分艦隊司令官

アルマリック・アスバール大佐 第139高速機動空戦隊指揮官  
カール・グスタフ・ケンプ大佐 アルフォンス分艦隊司令官  
カール・エドワルド・バイエルライン中佐 アルフォンス分艦隊司令官  
アルフレッド・グリルパルツァー少佐 アルフォンス分艦隊司令官  
バウムガルト・フォン・レッケンドルフ少佐 アルフォンス分艦隊司令官  
エリオット・バーゲンザイル少佐 アルフォンス分艦隊司令官  
ウエルナー・アルトリングン少佐 アルフォンス分艦隊司令官  
ラッセル・ウエストブルック少佐 アルフォンス分艦隊司令官  
オスロマイヤー・フォン・シャフハウゼン少佐 参謀チーム参謀  
アンドレイ・キリレンコ大尉級：フェザン地区諜報部員  
ケルビン・シュワルツ大佐 ウインメル艦隊副官

かなりな人材が集まってきたと思う。

マネジメント下に置かれる半分の宇宙艦隊はそれぞれが幕僚チームを抱えているのでここには書かないです。それに同盟軍のようにナンバーズ・フリートではないのでめんどくさいのでまた後で書きます。

大将に昇進後の最初の出撃は皇帝フリードリヒ4世の在位30周年に花を添えるためというだけの目的の出征となり、俺はミュッケンベルガー元帥閣下に直訴に行った。

元々、ミュッケンベルガー元帥も今回の出征は反対であったが押し切られたという形で決定した作戦である。

まあ、前回の戦いで自分の不甲斐なさで貴族の名家を2ついっぺんに潰してしまった功罪は大きいと思うよ。

でもってティアマト星域だ。イゼルローン要塞回廊同盟側の最遠部分に位置する。ガス状星雲が年中磁気嵐を起こしているところだ。強行偵察艦隊の司令官ウィルキンソン・ナスカ少佐が同明領内から多数の熱核反応を探知した。

推定40000隻以上の艦隊に500隻に満たない、しかも火力を捨て、高速移動を重視した艦隊構成であるのに猛然と攻撃を開始してしまった。

新しい艦隊の編成でイゼルローン回廊帝国領にいた俺達はこの連絡を受けた。至急に駐留艦隊の出撃を命令し、自分達も陣容を整え向かうことにした。

イゼルローン要塞から出撃した艦隊はカーク・ハインリック中将貴下9000隻の艦隊でその中に帝国の双璧が今回は出撃していた。

小規模艦隊戦で目を見張る戦果を挙げたオスカー・フォン・ロイエンターとウオルフガング・ミッターマイヤーはともに大佐の階級に昇進していた。

「強行偵察艦隊のナスカ少佐か、無謀にも程があるのではないかな」士官食堂でコーヒーカップを前にロイエンターが話した。

「しかも火力も大した事のない、速度重視の艦隊構成だということではないか。」

「同じスピーダーとしての意見は？ミッターマイヤー大佐？」

「近頃の帝国内では年齢や経験に関係なく、出世のスピードが上がってきているとの間違った解釈が多いらしい・・・」「きっとそれに乗せられたのだろう」

ミッターマイヤーはそれほど関心があるような感じではない意見である。

「世の中には出来る事と出来ない事が確かにあるということをお忘れなければ、死に急ぐことは無いと思うがな」

ミッターマイヤーは天井を見上げながら考え事をしていた。

「それはそうと、卿は軍事ディレクターの件は承諾するのか？」  
不意にロイエンタールは話を変えて質問をしていた。

ブラウンシュバイク家が成り上がりのランズベルク家を快く思わずに賞金を賭けて討伐軍を組織しているとの噂（実はとくに事実）があり、ミッターマイヤーとロイエンタールにブラウンシュバイク家の執事から軍事顧問としてのディレクター（調整役及び作戦司令）に就任要請があつたのである。

「そういう卿はどうなのだ？ロイエンタール？」

ミッターマイヤーは聞き返した。お互いに決めかねているというところであるようだ。

「そうだな・・・俺の中では、賛否両論持っている。」

ロイエンタールが考えているのは、同じ陣営に居る以上、直接に決めることは甚だ難しく、機会という意味では貴重であると判断していること。

もっともどちらかが違う陣営に所属することがあれば別の話になるが・・・もう一つは門閥貴族に加担することで将来の展望の足かせになるのではないかという疑問・・・どちらも併せ持っているので返答が出来ない状態である。

「やはりな・・・俺と同じということか・・・」  
ミッターマイヤーもこのときほぼ同じ事を考えており、返答に窮していたのである。

ただ、寄せ集めの集団、しかもそれほど実戦経験の無い連中を束ねて、あの連戦連勝中のアルフونس軍団を打ち破れるのだろうか？本当に1から10までこちらの思い通りになるのか？こちらの命令を完全に遂行してくれるのか？不安は多いのである。

「そもそも、敵対する事にメリットがあるのだろうか・・・」  
釈然としない疾風ウオルフである・・・

511隻で構成されているナスカ強行偵察艦隊は無謀な攻撃によりその数を340隻にまで減らしていた。対する同盟軍は先発のホルランド提督の1万隻の艦隊が肉薄していた。

そこにイゼルローン要塞から急行してきたカーク・ハインリック艦隊が殺到してきた。艦艇数は互角である。

ホルランド艦隊のほぼ中央部に位置するロイエンタールの分艦隊はひたすら水平射撃を繰り返し始めた。敵の集中力を散漫にしている左翼や右翼の部隊に攻撃させるのである。

ハインリック艦隊は天頂方面から眺めると半円の形をした布陣で左部分が大きく前方にでっばっている布陣である。これはミンチサンド・アタックの前哨であり、中央部分が何時飛び出すかに懸かっている。

「中央部にはロイエンタールがいる。大丈夫だ。我々こそ、タイミングを間違えなければいいのだ！」

ミッターマイヤーは自分の分解艦隊にそう厳命した。

突出していた左部分がじわじわ後方に下がっていきだした。天頂から見ると傾いていた半円が正面に平行に戻りつつある・・・そんな動きだ。

直後に中央部分が飛び出して同盟軍ホーランド艦隊の中央部に突き刺さる形になった。その次の瞬間に下がっていた左部分が前進してきた。その瞬間、すっぱりとホーランド艦隊左半分が半包囲の中に陥る形となり、ミンチサンド・アタックが開始された。

あっという間に同盟軍艦隊の中に光の玉が増加し、何隻もの戦艦が爆沈していくのである。

「何をしている！中央部分に飛び込んできた艦隊を右部分で挟み撃ちにすれば逆に包囲殲滅できるではないか！」

ホーランドは叫んだ！確かに判断は正しいのである。ただしインリック艦隊の右側を視野に入れていないのは問題であった。中央部のロイエンタール艦隊に対して正面を向いた砲撃戦を展開している以上、正面であるインリック右翼艦隊からは横腹をむき出しにしている形になる。

「今だ！全艦一斉射撃！チャンスを逃すなよ！」  
カーク・ハインリックは命令した。中央から右部分の残存艦隊が一斉に砲撃を開始した。

今度はホーランド艦隊の右部分が激しい光の玉を作り出し多くの艦艇が爆沈していく。



「後方からの攻撃に気取られるな！正面の敵のみを集中砲火せよ！」  
ロイエンタールは自分の分艦隊に命令した。ミンチサンド・アタック状態のホーランド左部分艦隊はその数を徐々に減らされて崩壊寸前である。さらに左部分のミッターマイヤー分艦隊が速度を上げて延びてきた。これによりホーランド艦隊の左部分はほぼ包囲状態になってしまった。

判りやすくいうと、数字の9の丸の部分が左部分で完全包囲、半包囲寸前の部分が右部分であると判断できる。

ミッターマイヤー分艦隊が敵艦隊の主力が接近していることを察知した！

「敵の本隊が来る！ロイエンタールはわかっているのか！」

「全方位を解くしかない！半包囲状態にまで後退しろ！」

続けざまに指令をだして本隊からの攻撃に備えようとするミッターマイヤーだが、ホーランド艦隊も援軍到着を把握しており、逆に大勢力を持って完全包囲に展開させようと後退を許さない。

「長く叩きすぎたということか・・・」

ミッターマイヤーは収まりの悪い髪の毛を両手で掻きあげ、メインスクリーンを見つめた。いざとなれば、足の遅い味方を振り切つて離脱することも可能だが

「そんなことは俺には出来ないしな・・・」

味方を置き去りにする意味での疾風ならば意味は無いと考えているミッターマイヤーであった。

突出した中央部と左部分に光の玉が増えてきた、後方に下がろうと

する意図を察してホーランド艦隊も必死に追いつがって攻撃を繰り返しているのである。

「左後方より艦隊出現！数は凡そ10000隻！」  
オペレーターが絶叫する！これが敵の増援なら、一溜まりも無い。

「レーザーフラッグ確認中・・・アルフォンス艦隊です！助かった！」  
オペレーターが本音を吐いた

俺は先発にウインメル大将を中心にした増援艦隊を発進させた。脇をビッテンフェルトの黒色槍騎兵艦隊とケネス・ギルフォード、カール・エドワルド・バイエルラインで固めた部隊である。

増援艦隊はミッターマイヤーらの戦闘エリアをとっぱして一気に同盟軍の本体に向かっていった。

「同盟軍本隊とハインリック艦隊の間に割り込み正面展開しろ！」  
ウインメルは命令した。正面の本隊はやく30000隻であるが、問題なかった。

「おっつけイゼルローンの駐留艦隊がでてくるさ！だから心配するな！」

ウインメルは全艦隊に向けて通信した。

黒色槍騎兵艦隊の旗艦【王虎】（ケーニヒス・ティーゲル）のビッテンフェルトなどは、

「ふん、そんな愚鈍な連中を待っている必要などないぞ！突撃あるのみだ！」

そう叫ぶと、持っていたプロテイン入りの果物ジュースのパッケージを強く握り、中身を撒き散らしてしまった。その上にブーツで通過しようとして滑ってしまい、転びかけてしまった。

一瞬、戦闘艦橋内は苦笑を堪える辛い時間が過ぎたのである。

ケネス・ギルフォードとバイエルラインはもつと冷静に作戦を伝えていた。

「艦隊は天頂方向から確認すれば長方形の形をした布陣である。これを奥に向かって中央部及び後方集団に対して突撃を行う。進入角度を正確に計測してから行動せよ！」

同盟軍本隊の布陣は第7艦隊フォーウッド提督、第9艦隊アル・サレム提督が指揮していた。

前半分が第7艦隊で後方が第9艦隊という陣形であった。そのギャップを突こうというのがウインメルヴァンデールリアンの作戦である。ウインメルはこの戦いで片腕なのに圧倒的な迫力と人望と沈着冷静な戦略眼から隻腕将軍と呼ばれるようになる。

正面に対峙したウインメル艦隊は3つに分かれた陣形で中央、右、左となった。左右の分艦隊がそれぞれ黒色槍騎兵艦隊とギルフォード、バイエルライン艦隊である。

「よおし！全艦突撃！フェイエル！」  
とウインメルが号令した。猛然と突き進む中央部艦隊は約8000隻である。

「舐めるなよ！帝国軍め！全軍突撃！」  
同盟軍第7艦隊司令官のフォーウッドが叫ぶ！

猛スピードで同盟軍第7艦隊の前方部分と近接しながら攻撃をするウインメル艦隊とフォーウッド艦隊は互角に戦況を展開している。主砲、ミサイル、魚雷を撃ちまくりながらお互いに爆沈しながら光の球を増殖させているのである。

お互いに突撃しすぎた艦艇が相手の艦隊の中に潜り込んだ時に、それを狙って攻撃をするのだが、ミスをして僚艦に命中させてしまう艦艇が多く、同士討ちがあちこちで発生しているのである。

ウインメルは冷静に戦況を読んでいて、引き際を計っていた。そして、

「よし！今だ！全艦後退しろ！急げ！」

一気に後ろに後退を始めたウインメル艦隊を追いかけるようにフォーウッド艦隊が前進してくる。まさに第7艦隊は縦に長く伸びてきたのである。狙いはそこであった。

「全艦突撃！突撃！突撃！」

ビットンフェルトは叫び続けた！

黒色槍騎兵艦隊はフォーウッド艦隊の右中央部から後方にかけて斜めに突き刺さっていったのである。

これに呼応してギルフォード、バイエルライン艦隊も左中央部から後方にかけて斜めに突撃を開始した。

このドリル・アタックはさすがに効いたようだ。艦列が延び切っている上体での横っ腹に喰らっているのであるから、被害も予想以上に甚大となっているのである。

「おのれ！狡猾な！」

フォーウッドは苦悶の表情で飛び出しすぎた前方部隊を後退させた。そのタイミングを見逃さずにウインメルが

「今だ！全艦突撃！」

と再突入の指示を出した。

下がるフォーウッド艦隊と追いかけるウインメル艦隊が再び激しい砲撃による光の玉が増殖する。

後方で展開している第9艦隊アル・サレム提督は

「フォーウッドの奴は何をしているのだ！独り相撲で苦戦している！」

と吐き捨てた。

実際に前方で何が起きているのかが判断できないのでラストレーションも相当高くなっているのである。

一方、黒色槍騎兵艦隊とギルフォード、バイエルライン艦隊は2度目の突入を開始しており、第7艦隊の中央部及び後方部分は大混乱に陥っているのである。分艦隊ごとに広がりつつあり、1個艦隊としての機能を果たさなくなってきたのである。

先発しているハイリック艦隊はミッターマイヤーやロイエンタールもほぼ撤収を完了し、ホーランド提督の艦隊は数を半分以上に減らしてイゼルローン回廊外延部を大きく迂回して第9艦隊に合流しようとしていた。

ロイエンタールの分艦隊も半分以上を撃沈されたので、戦線復帰は

困難となつてしまった。  
遭遇戦から発展したこの戦いもいよいよ終盤にさしかかり、お互いにポイント稼ぎにためか激しい攻撃を繰り返しているのである。

ここに来て散々打ちのめされた第7艦隊の後方から戦線を包囲すべく第9艦隊が2手に分かれて進撃してきた。さすがに包囲されれば袋叩きにあうはずである。

「ここまでだな。黒色槍騎兵艦隊とギルフォードに撤退命令を！発  
行信号上げる！」

ウインメルは命令した。

メインスクリーンのはじめにワルクューレ戦隊のAAの顔が映った。

「殿ですか？」  
アルマリック・アスウアル  
AAが尋ねる。

「ああ、大変な役割だが引き受けてくれ。」  
ウインメルが命令した。

「待ちくたびれました。了解です。」  
敬礼してAAは画面から消えた。

第9艦隊のアル・サレムへ通信管制官が

「敵はワルクューレを発進させた模様です。数200！」

「こちらにも直ちに対応しろ！スパルタニアン戦隊発進！」  
アル・サレムは命令した。

「……ここらで手打ちか……よかろう。最後はどっちが強気で  
終わるかだ！」

アル・サレムはメインスクリーンを見ながらつぶやいた。

AAの空戦隊が出撃したタイミングとほぼ同時にスパルタニアン空戦隊が発進した。数はほぼ同数であるがキャリア、スキル全て違っていた。ウルキューレ戦隊は三位一体のフォーメーションで攻撃をするが、スパルタニアンはペアでアタックしてくる。

AAの指揮する第139高速機動戦隊はすさまじい戦果を挙げている。同盟軍艦隊にも襲い掛かり数隻を爆沈させていたし、損失機の数も30機でありながら同盟軍スパルタニアンを100機以上撃墜している。

お互いの艦隊が退避行動をとりながら、一気に後退を始めたときに帝国軍艦隊の策敵リーダーにイゼルローン駐留艦隊の発信するところが映し出された。

「相変わらずなのんびり屋さんかわが方には多いと見られるな・・・」

「ロイエンタールはつぶやく。」

「さらに遠方から駆けつけてきた援軍もいると言うのにな・・・」  
ミッターマイヤーも続く。

「ヤング・エグゼクティブか・・・」  
ロイエンタールは考える。1対1で戦って勝てるのだろうか、あのアルフォンス大将に、いや、盟友ミッターマイヤーと協力して戦って勝てるのだろうか・・・

「次は恐らく対戦相手となるのかもしれないな」  
ミッターマイヤーはウィンググラスをロイエンタールに掲げて見せた。

「アルフォンス・フォン・ランズベルク大将、ヤング・エグゼクティブか・・・」

ロイエンタールは血のように赤いワインの入ったグラス越しにミッターマイヤーに微笑んだ。

「面白いじゃないか。」

バンデリアン  
隻腕將軍のウインメルは凱旋後、俺に報告をしてきた。

「アルフォンス大将閣下の言うとおりに、ロイエンタール、ミッターマイヤーの両名にたっぷり貸しを作っておきました。」

「ははは、ウインメル大将閣下！ありがとうございます！」  
俺は意地の悪い顔でにんまり微笑んだ。

がっちり隻腕將軍と握手をした後に

「そういえば、例のオーベルシュタインはどうなさったのですか？」  
と聞いてくるので、

「ああ、打倒ゴールデンバウム王朝とか危険な事をぬかすので、追い出して、今はミュッケンベルガー艦隊に引き取られたはずだけど・・・」

「ほう、追い返しましたか。以外ですね。」

「何となく、アルフォンス艦隊の幕僚チームにお入れなさるのかと思いましたが・・・」

ウインメルは興味深そうに感想をいうが、

「こっちはギウンター・ノルトにリュウ・ウェイだよ？」



「これ以上変わり者は必要ないよ！」

二人で顔を見合わせて爆笑していたのである。

今回の第3次ティアマト会戦は、特に勝ち負けがはっきりしない戦いなので、昇進等の査定はなかった。

数日後、挑戦状？果たし状？が届いた・・・

差出人はあの、

オットー・フォン・ブラウンシュバイクであった・・・

ひええ・・・

## 第十六話：ガチ！門閥貴族掃討戦3！

第十六話：ガチ！門閥貴族掃討戦3！

あのブラウンシュバイク公からいただいた挑戦状は、下級貴族の分際で、成り上がりのくせに、身の程を知らない馬鹿どもだ、帝国NO・1は俺様だ・・・みたいな内容でありました。

一応、これでも宇宙艦隊副司令長官なので、親分のミュツケンベルガー元帥閣下に尋ねてみた。こんなの貰っちゃったんすけど、どうしたらいいすか？って、そしたら

「帝国軍としては公には動けないものと判断せよ。」  
だってさ。自分がフィッツジェラルド家に加担した時は？公じゃなかったの？

憤りを感じてはいたが、まあ、そんなレベルでしょ？と収めた。  
俺の常駐しているオーデイン宇宙艦隊司令本部に来客があった。

フェザーンの中央信託銀行の連中だった。  
今回のブラウンシュバイク公との私戦（はつきり言うじゃん？）につき資金の融資を受け付けたいとのことで、担保は・・・レアメタルの発掘権？

正直、資金的には全く困っていないのでお断りした。

しかし、逆にブラウンシュバイク公の持ち株会社の一つである、フェザーン所属の運輸会社【マッキンリー・カーゴ】社の株を5000万株ほど空売り注文を出しておいた。同社の転換社債も思い切り、

空売りを出しておいた。

俺は前世の頃から金の執着心は異常なほどあった。

だから稼げるときは思い切りやってやるぜ！と、考えている。

我がランズベルク家の資産内容は銀河帝国NO・1であることは間違いない。

俺がいた時代の感覚で言えば、某パソコンのOSを開発し目のくらむような金持ちになった創業者がいたが、その総資産の50倍くらいか？そんな感じである。

こちらがフェザーンに放っている諜報員のアンドレイ・キリレンコからの報告を受けた。

ブラウンシュバイク家では現在12の貴族に檄文を飛ばして参戦要請をかけているらしい事、その中で半分以上が渋々ではあるが兵を出すことを約束しているとの事である。

結論はキリレンコの予測は参加可能艦艇数は10000隻〜20000隻の範囲であろうということである。驚いたのはランズベルク家と親類関係にあるボラスキノフ家やシュシュケビツチ家が参戦予定であることである。

確かに急な躍進を快く思わない連中もいるのは理解できるが、親類であれば躍進の恩恵に与れるだろうに・・・頭の悪い連中だこと。

もう一つの問題は帝国の双壁である。軍事ディレクターとして赴任しているらしく、正面からぶち当たる可能性が高い。それでも、前回の貸しもあることだし、何とか取り込めないかと思っている。

こちらが移動式要塞のデス・ネックレスとブラッディ・スピアーを持っていても加味した上で会戦予定地はパレス・パラス星域を指定してきた。

ここはブラウンシュバイク公の管理している要塞【ガルミッシュ】があるところである。

ランズベルク家は今回、下級貴族に働きかけて参戦を募った。何と30以上の貴族が参戦表明してくれた。特にランキング上位の貴族の参戦が多く、動員可能艦艇数は38000隻となった。

自分で挑戦状送り付けといて、相手にこのこ出て来いって、それ自体どうかと思うが・・・

ブラウンシュバイク公はともかく、下級貴族は打ち破って併呑してやるぜ！

「このこ出てくるようではないか・・・アルフォンス閣下は」  
ロイエンタールは向かいに座る盟友ミッターマイヤーに問いかける。

「ああ、ちょっと予想外だったな。よほど自信がおりなのか」  
ワイングラスを持ちながらミッターマイヤーは答える。

「しかし先鋒はメルカツ提督だそうじゃないか」  
下を向いてミッターマイヤーが話す。聞いているロイエンタールも首を小さく左右に振り、

「正直、残念だな。まあ、アルフォンス大将の手並みを拝見できるチャンスではあるが・・・」

いいながらロイエンタールはワインを飲み干して立ち上がる。

「ところで卿の方にいるあの馬鹿貴族はどうしている？」

にやりとミッターマイヤーは笑いながらロイエンタールの預かる舞台について尋ねた。その中にはアルフォンスとは天敵であるあのフレゲル男爵が居た・・・

「ああ、奴は最低だ。自分勝手どころかまるで俺の命令を無視したいが為に三文芝居の主人公のような演技で周りの同情を買おうとしている。」

「どうしようもないな・・・それはミッターマイヤーは吐き捨てる。」

「ああ、どうしようもないぞ。」  
答えながらロイエンタールは自艦に戻るために歩き出した。

「俺はせめて隻腕將軍バンデリアンと戦えればよしとするか・・・」  
ミッターマイヤーも戦闘艦橋に戻るために席を立った。

ガルミツシュ要塞の司令室では、アルフォンス艦隊の出現を察知していた。

「敵艦隊、数40000隻で出現。距離700万宇宙キロ」  
オペレーターは報告する。

「来たか、成り上がりの下級貴族めが、思い知らせてやるぞ」  
司令官席に陣取るブラウンシュバイク公とその取り巻きたちである。

「叔父上！まずは艦隊戦で血の洗礼を持って迎えましょう」

フレীগエル男爵は自慢の演技力で盟主に訴えた。回りの取り巻き立ちも

「そつだ!」「景気付けだ!」  
などと熱狂的な意見を並べた。

端で並んでいた軍事顧問のメルカツツ、ロイエンタール、ミッターマイヤーは青ざめて進言した。

「敵の出方も判らないのに、景気付けなどで出撃されては堪りません。どうかご自重ください。」  
老練なメルカツツが釘を指す。

「メルカツツ提督、卿らの進言も確かにわからんでもないが、この者どもの熱き帝国への忠誠心を汲んでやりたいと盟主たる私が思うのだ、最終判断は決めさせてもらうぞ」  
面倒くさそうにブラウンシュバイクはメルカツツに答えた。

「待つていただきたい!それでは話が違うではありませんか!」  
オスカー・フォン・ロイエンタールが異論を唱えた。

「戦略上の決定は軍事顧問の我々の意見を最優先に考慮いただきたい!」

「でないとアルフォンス大将の艦隊には勝てませんぞ!」  
続けてロイエンタールは主張した。隣のミッターマイヤーが

「ロイエンタール、やりすぎるな!」  
と小声で引き止めた。

すると

「な、何という無礼な言動か、下級貴族の分際で盟主たる叔父上に

食って掛かるとは」  
フレーゲルが勢いだけで前に歩み出た。

「小官の発言が非礼に当たるのであれば謝罪いたしますが、こと、  
軍事面に関しましては・・・」

ロイエンタールの発言途中でまたフレーゲルが遮った。

「それが無礼だと申している！下級貴族は分別がつかんのか！」  
フレーゲルがさらにロイエンタールに詰め寄る。

ロイエンタールの金銀妖瞳ヘテロクロミアはこのとき両方ともに怒りのアイスブル  
ーの炎が吹き上がっていた。

「何か間違ったことをいつているとは小官は思いません。それより  
もフレーゲル男爵と私の間でこの場で何か解決しなければならぬ  
事がありますでしょうか？」

ロイエンタールも前に出た。ほんの少し苦笑しながら・・・

「あるようでしたら、アルフォンス艦隊も進撃してきている中、急  
いで決着をつけましょうか？」  
と宣戦布告状態である。

するとメルカツツが

「判りました。先駆けはお引き受けいたしますが、行動の全権は小  
官に一任でよろしいですか」

「おお、メルカツツ提督。さすがだ！よくご決断いただいた。お願  
いいたす」

ブラウンシュバイクが大げさに大声で喜んでいることをひけらかし  
ていた。

「叔父上、では早速出撃してあの下級貴族の成り上がり次男を懲らしめてやります！」

フリーゲルは大げさに胸に手をあて、忠誠を誓うポーズをとった。

これは負けるかもしれないな・・・心の中でミッターマイヤーとロイエンタールは感じていた。

察したようにメルカッツ提督が

「お二方ともに出撃を願いたいのだが。」

こうなった以上、後には引けない。

二人は快諾した。

旗艦コーラル・シーの戦闘艦橋で俺は幕僚チームに基本戦略を説明していた。

その中で伝わってきた情報によれば、メルカッツ、ロイエンタール、ミッターマイヤーが軍事顧問として参加しているとのことだった。

「先鋒は隻腕將軍バンデーリアンにお願いしたいのだが・・・」  
と、ウインメル大将に要請した。

「老練と新進気鋭ですか、やりがいがありますね」と引き受けてくれた。

俺とAAは二手に分かれて敵の宇宙母艦を探し出して一気に攻略して優位に立つ戦略である。

今回からAAの部隊の半分は新型ワルキューレ（ヤクト・ワルキューレ）に変わっている。現行モデルよりも小型化が進み、機動性も上がった機体である。



なるべくガルミツシュ要塞から艦隊を引き離したいと思うので一戦して陽動し後退してくる。これが基本方針である。

それから24時間後

お互いの艦隊がほぼ友好射程距離に入りかけている・・・

メルカツツの作戦は中央で敵を引き付けておいて左右のロイエンターとミッターマイヤーに包囲させて殲滅する。

敵を殲滅することが目的ではないため（フレーゲル男爵などは殲滅を主張するだろうが・・・）

「主砲発射と同時に我々は発進する。目的は敵の宇宙母艦を探し出して撃沈することにある。くれぐれも戦艦に宇宙魚雷を打ち込むな

よ！」

アルマリック・アスパール

AAは部下に伝えた。

俺は青き流星の機体に取り込み最終チェックを行っていた。

「久しぶりなんで、アクセルとブレーキを間違えて敵艦に体当たりをかまさないで下さいよ！」

通りすがりのAAに言われた俺は

「敵と味方を間違えないようにするよ！アルマリック大佐も間違えて俺の前方に出てこないことだね！」

「そうします！間違えて撃たれて撃墜されたら、銀河中の笑われ者になっちまいますしね！」

「よし！戦果の大きいほうにワインだからね！大佐！」  
俺は吹っかけると

「乗りましょう！ごちになります！」  
AAも負けてない！

その後すぐに俺達は全機発進した。

コーラル・シーの戦闘艦橋ではギンター・ノルトが全艦に  
「今だ！フェイエル！」  
と砲撃命令を下していた。

宇宙の暗黒の空間に突然に数千本の光の矢が煌めき、一斉に突き刺さるのである。

突き刺さった方も同じくらいの光の矢を応射した。あっという間に数万本の光の矢が往来しているのである。

ブラウンシュバイク艦隊は中央部分がメルカッツ大将、右がオスカ  
ー・フォン・ロイエンター大佐、左がウォルフガング・ミッター  
マイヤー大佐の艦隊である。

ランズベルク艦隊は中央部分がウィンメル大将、右がビッテンフェ  
ルト大佐の黒色槍騎兵艦隊、左はファールンハイト大佐、アイゼナ  
ッ八大佐、ケンプ少佐の艦隊である。

アルフォンス本隊は別働隊として10000隻で大きく戦場を迂回  
してガルミツシュ要塞と艦隊の間に入り込んで退路を絶つ作戦であ  
る。

お互いに砲撃しつつ、じりじりと前進してきている。

少しずつ爆沈による、光の玉が増えてきて一層宇宙空間を明るく彩

るのである。

「よし！今だ！中央部分は後退しろ！」

ウィンメル艦隊は突如、ピタッと停止し急速で後退を始めた。

「奴らが前進し始めた出鼻を叩くぞ！」

と副官のケルビン・シュワルツに命令した。

だが中央部分のメルカッツは現在の位置から全く動かない。  
むしろ合わせて少し後退を始めた。

再度射程距離に合わせるためにウィンメル艦隊が前進を始めた。

すると同じ距離を詰めてくる。再び砲撃が開始され、光の矢が飛び  
回る。半包囲に引き込むために再度後退するウィンメル艦隊・・・

またもメルカッツ艦隊も後退する。

天頂方向から見下ろすとお互いにUの字で相對している状態である。

そうなるとう有効射程に入らなくなるために再度前進を開始する。今  
度は少しメルカッツ艦隊が前進速度が遅いようだ。

「これでは有効射程に入るまで時間が掛かりすぎます。少しだけ加  
速しましょう」

副官のケルビン・シュワルツは提案した。

「仕方ない、前進を続けよ！」

ウィンメルが指示する。

艦隊中央部はさらにゆっくりと前進を始めた。

「掛かったな！今だ全艦全速！敵中央部と前方の右部分の間を突撃

せよ！」

ミッターマイヤーは号令した。

高速戦艦と高速巡航艦で組織された艦隊は猛スピードで黒色槍騎兵艦隊とウインメル艦隊の間を突撃してきた。

境目にあたる艦船は当然自分の所属している集団に逃げたがるわけ  
できれいにウインメル艦隊と黒色槍騎兵艦隊の間が裂けてしまい、  
ミッターマイヤー艦隊が殺到してきた。

「しまった！全艦、進入艦隊を挟み込め！ミンチサンドアタックだ  
！」

ウインメルが進路の変更を指示した瞬間に

「前方的艦隊！突進してきます！」  
オペレーターが絶叫してきた。

進路変更を仕掛けた瞬間に前方のメルカツ艦隊が突撃してきたの  
である。

「うぬ！狡猾な！」  
ウインメルは後退し陣形を立て直す考えに出た。

「中央部の艦隊は後退せよ！一旦引いて陣形を再構築する！」  
一息つかないと混乱は収まらないと判断したウインメルは後退し始  
めた艦隊の最後尾に位置して戦線を維持しながら後退し始めた。

するとその瞬間にメルカツはさらに加速して元にウインメル艦隊  
が占有していたエリアを進入してきて猛攻を始めたのである。

ウインメルの周辺も爆沈する光の玉が増えてきた。

爆沈の増加は艦隊の後退速度に拍車をかける。

殆ど全速力で後退している中央部のウインメル艦隊は同じ速度でのメルカッツ艦隊の進入を許してしまい、気がつくのと左右と中央部分は完全に分断されているのである。

「急ぎ黒色槍騎兵艦隊と左翼艦隊に交代信号を送れ！」

このままでは各個撃破に逢ってしまう、最悪のケースになりつつある状況を打破すべく後退をさせようとしたが、既に左翼艦隊は中央部分のメルカッツ艦隊と右展開しているロイエンタール艦隊にミンチサンドアタックを逆に仕掛けられているのである。

「最初から、これが狙いか・・・」

呆然と立ちすくむウインメル大將は陣形再編よりも味方の救出を優先する決断をして、後退を中止して左翼艦隊の救出を行うために戦場を移動し左翼艦隊後方から回りこんでロイエンタール艦隊の更に外周から半包囲を実行した。

ほぼ3000隻のロイエンタール艦隊の外周に10000隻以上のウインメル艦隊が逆に半包囲を仕掛けてきたので

「意外に早かったな。もう少し反応が遅くなると思ったが・・・」  
敵の半包囲が完成する前に一旦後退する決断を決めた。

「ウインメル大將閣下か・・・やるじゃないか。さすがは隻腕將軍バンデーリアンというところか」

ロイエンタールは密集体系のまま一旦後退を始めた。

ようやく左翼艦隊と合流を果たしたウインメル艦隊だが、向きを変

えて正面にはメルカツツ艦隊が展開している状態となった。

その後方にミッターマイヤー艦隊が展開しており、ウインメル艦隊が後退していた宙域に進出しされに半包囲を仕掛けようと準備していた。

しかしそれは実行されなかった。

ようやく戦場の状況を把握できた黒色槍騎兵艦隊が突如、ミッターマイヤー艦隊の後方から突撃を開始したのである。

「アルフォンス分艦隊実力NO.1の俺達を舐めた分だけお釣りはでかいぜ！全艦突撃だ！体当たりを咬ましてやれ！構うことはない！」

ビッテンフェルトは司令官席の上に立ち仁王立ちのまま大声で指示した。

いつも単純明快、それがかえって艦隊全体に理解しやすさとして浸透しており、全速力で前方に艦隊に突っ込んでいくのである。

行動のバランスや秩序を意識しているミッターマイヤー艦隊に無秩序な殴り込みをかけてきたのである。堪ったものではない・・・

「くっ！これではウインメル艦隊を半包囲する時間が掛かりすぎる。全く艦隊運用を何だと思っているのだ！」

ミッターマイヤーは包囲するための前進を諦め、黒色槍騎兵艦隊と正面に展開しようとしている。

黒色槍騎兵艦隊はビッテンフェルトの司令を忠実に守っていた。接近しすぎた相手の艦には本当に突撃してしまいお互いに爆沈してし

まった艦艇もでているのである。

ミッターマイヤー艦隊に正面から受身を取られてはさすがの黒色槍騎兵艦隊も思うように突撃できないでいる。

巧みに左右展開を繰り返され、正面を定める時間を取らせないで揺さぶりつつ艦艇を消耗させているのである。

ここにきてようやく、ビッテンフェルトも被害の大きさに艦隊をまとめざるを得なくなった。4000隻で構成された黒色槍騎兵艦隊は最初のミッターマイヤー艦隊への突撃で800隻を爆沈させられ、失ってしまったのである。

ロイエンタール艦隊は適度に距離を保ちつつ前線からじりじり後退し、一気に後方へ離脱した。

これを見た両方の中央艦隊は一旦後退し陣容を立て直しに入ったのである。

今のところ、どちらが有利ともいえない。大きく迂回していた俺の空戦隊はもうじきブラウンシュバイク艦隊に突撃できる位置までできているのである。

「た、体長！前方に機影多数！」  
俺達の行動も読まれていたのである。

相手側のワルキューレ戦隊が映し出されている……

まだまだ互角……

「やるじゃないか！メルカツツ提督は！」

「いくぞ、全機突撃だ！」

爆装したまま俺達は敵の迎撃部隊に突撃を開始した・・・



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0169y/>

---

銀河迷雄伝説

2012年1月10日16時18分発行